女子文壇

第壹巻 第九號

口繪
三宅克己 水彩画 殘暑
山中古洞 彩色画 白菊
美術寫真版數葉



中村不折画
吉田晩稼題字

明治三十八年九月一日發行(毎月一回)
明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可

東京 女子文壇社 發兌
(電話本局六〇七番)

注意—此目次を熟讀順次内容御閲覧を乞ふ

▲勿見落——本號には兼て發表せる特別懸賞文第一回の披露あり又頁數々增加す

女子文壇

卷一 第九號 目次

次號には清方氏畫美人虫聞鮮麗の繪葉書を添ゆ

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

文士奇譚

文學士久保天隨君編

口繪（廣澤雪夜屋に上りて赤穗義士の討入を窺ふ）（蜀山提灯に描きて下男の貧を救ふ）（不折畫伯筆 石版五色摺）

文士印譜…（二遍刷）▲附錄…（名著序文集）

▲全一册大判百三十頁 正價拾錢 郵税一錢

文士訓

文學士 大町桂月先生序
長谷川天溪君校閲
立野天風君編

▲正價金二拾錢 郵税二錢
全一册 袖珍

（諸新聞雜誌の好評あり）

文學博士 建部遯吾君述

歐洲 學生の生活

全一册袖珍 正價二拾錢 郵税四錢

學生必讀

旅行の友

全一册美裝 賣價拾六錢 郵税二錢

秀才文壇

低廉無比 青年筆戰雜誌 毎號獎學賞與規定あり

十八號九月一日發行
十九號九月十五日發行

不折先生 水彩畫及寫眞版入

大判二百十頁 頗美本

價郵税共 一册金拾壹錢 六册六拾參錢

文士必讀 大評判の本誌を讀めば文章の上達疑ひなし

慶應義塾々長鎌田榮吉君題辭
慶應義塾教授菅緑陰君譯

父母と子供

▲正價三拾錢 郵税四錢
全一册 中判美裝

目次 ○總論●新誕生兒に就て●第一期の教育●幼兒の言葉に就て●餘計なる心配は無用なり●子供は愛す可きものなり●子供は奴隷にあらず又暴君にあらず●理論は餘り早く教ふ可からず●虚言及び摸範の効力に就て●體育に就て●衣服に就て●睡眠に就て●五官の修養●腦官に就て●視官に就て●畫學に就て●聽官に就て●音聲に就て●味官に就て●勉強の時代●好奇心に就て●實物教育に就て●學問と趣味●實驗物理學●實學に就て●「ロビンソン、クルソー」●結果―十四五歳頃の子供

此軍艦帖は紀元節をトし東京市四谷第一、二、三尋常高等小學校を始め全國重なる各學校にてつまらぬ菓子抔を廢し數萬部御買上の命を忝ふせり殊に「紀念品としては上乘の者なり」との讚辭をさへ賜はりしは無上の光榮といふべし

◀美術寫眞銅版三色刷▶

軍艦寫眞帖

第五版

附錄 大捷軍歌集

全壹册袖珍美裝價金五錢

（送料 二册まで 三册まで 二錢）

勅語……上等洋紙鮮麗金刷

出版元 東京神田旅籠町壹丁目廿三番地 文光堂 賣捌 東京堂外全國書店

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

第五回内國勸業博覧會賞牌及褒状受領

登録商標

五二會品評會功勞銅牌

THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE
ヴワイオレツト煉製
陶壺附
乳白硝子器入
壽美禮おしろい



◉壽美禮おしろい◉

ねり製

定價 大壜 二十錢 小壜 十二錢

水製

定價 大壜 二十五錢 中壜 十五錢 小壜 十錢

すみれ水おしろい
ヴワイオレツト水製



すみれ白粉は
菫おしろいは
壽美禮白粉は

歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成蹟體等を以て調製しあるを以て總てを艶麗ならしめ芳香馥郁として長時間保續するの特性あり芳香馥郁と長く保つが故宴會祝席雜踏の場所に望みて衛生上良好の逸品なり高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最適當す方今東京横濱に於て上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

●壽美禮あらひ粉●

◉弊舗製造の壽美禮洗粉の義は方今歐米諸國に專ら賞賛する香料及弊店新製の原料を用ひて製せしものなれば朝夕此洗粉を御用ひ給へば能くあかを落し御肌を美しくなす

◉常に髪洗ひに用ひ給へば髪のねばりを取り油あか等を生ぜず又半襟ハンカチーフ絹綿等に用て能く汚垢を落す總て物を漂白する性あり

◉使用法は普通あらひ粉の半分にて能し水又は温湯に溶し又はぬかに混ぜ入浴の際用ふるを良とす

綠、藍、紅彩蝶番ひボックス入 三錢
鑵詰 六錢五厘 袋 壹錢

登録商標

西洋色美くなるあらひ粉

SUMIRE
WASHINGPOWDER

壽美禮あらひ粉



製造本舗
東京市兩國
元町兩國橋際

伊勢吉壽美禮堂謹製

販賣所ハ全國到ル處小間物店化粧品店賣藥店其他各勸工場各劇場運動場ニ有リ

殘暑



三宅克己先生筆

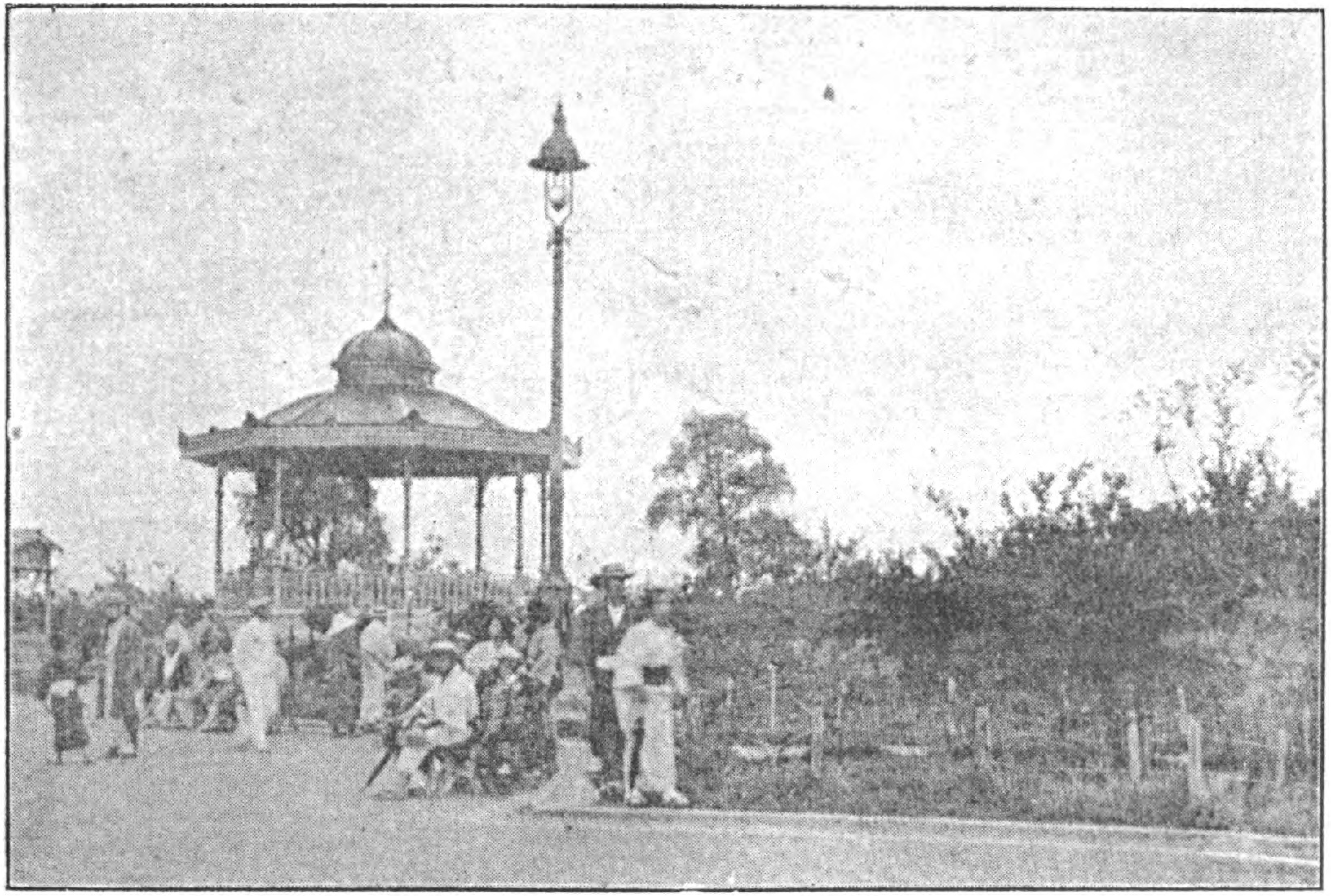
小島工塲石印

白菊



山中古洞氏筆

東京大江石印



音樂堂は東京市が市民娛樂の爲めに建てたるものにて去る八月一日開堂の式を擧げたり八角形無壁の構造にて奏樂を四面より聽き得らるゝ樣になし强度の電燈を裝置したるなど頗る工夫を凝らし爾後每年四月より十一月の間每月二回宛陸海軍軍樂隊の奏樂ある筈なり

（社員撮影）　日比谷公園新設音樂堂



（所在　麴町區虎の門內）

東京女學館高等科卒業生並職員　（明治三十八年）

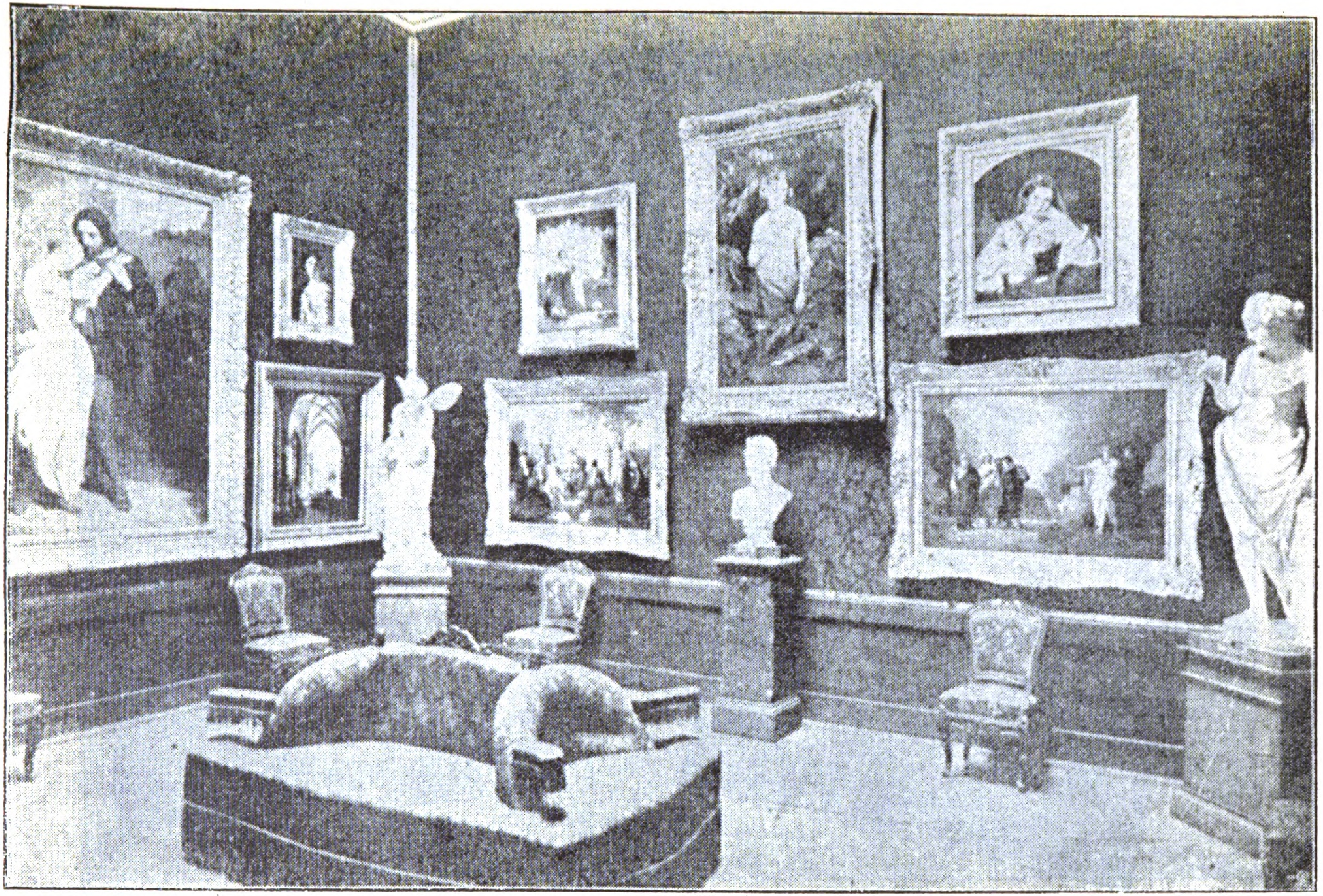






泰西名畫

聖母



ロツツベツク博物館の美術室

第五回内國勸業博覽會褒賞受領

定價 壹袋壹錢 罐詰五錢



此名題洗粉は皆々樣の御引立に依り益々盛大に相成難有仕合に奉存候然るに近來諸方に名題洗粉の摸造品澤山顯はれ候に付弊舖製造品には袋の裏面に芝居櫓形の登錄商標を相印し御座候間何卒御求の節は篤と御熟覽の上多少に不限御用向の程偏に奉希上候也



東京淺草區黑船町

梅素亭謹製

（電話下谷二三四番）

高等化粧水 フイテルミン

定價一本金二十五錢　三個入七十五錢

本品は高等化粧料中の化粧品なれば貴婦人令孃方の御常用に適し皮膚を艶美滑澤ならしむる効あり



（改良すき油・柳糸香）	メラセリン	一個五十錢
（改良びん附・玉椿）	コラキン	一本二十錢
（改良水油・花かつら）	チイトリシキン	一本四十錢
（ふけ取香水・花たちばな）	ラウリン	一本六十錢
（あか取香油・春風油）	ア子モシン	一本四十錢
（ひげ油・住の江）	プロ子ミン	一個三十錢
（うがひ水・しのゝめ）	エオチン	一個三十錢
（福原ねりおしろい）		一個廿五錢

新製 旅行携帶用衛生齒磨 發賣

本品は高尚なるゴム器入一個三十錢

（總て美麗なる三個箱入に有之御進物用に適す取次は至る處に有之候）

衛生齒磨石鹼

大廿五錢　小十五錢

洗浴化粧エリノイン（花の露）

は高尚なる芳香藥及び軟和劑の配伍しあれば朝夕の盥漱及洗浴に際し此の液をたらし用ゆれば如何なる水と雖ども皮膚肌色を損ずる患なく、色を白くし殺菌消毒の効力有る衛生上必要の逸品なり　定價一瓶八十錢



衛生材料 藥品器械 處方調劑

調製本舖

東京新橋出雲町角 電話新橋三二四番

福原資生堂

女子文學泰斗

第七號目次(再版出來)

美術口繪

水彩畫 ▲夕立雲(石版十色刷)三宅克巳筆

彩色畫 ▲朝の散步(同　六色刷)山中古洞筆

寫眞版

都下有名女學校卒業生大判寫眞三枚(日本女子大學校、共立女子職業學校、女子商業の三大學校)アルマ、タデマ夫人の繪畫眞筆

短冊小杉文學博士、酒井伯爵夫人、大塚楠緒子筆○圖案畫○淺草觀音と仁王門○吾妻橋



第二號殘部僅少

第三、六、七、八號の外は皆品切缺本なり

最寄書店になくば本社へ注文を乞ふ

第八號目次(殘部僅少)

美術口繪

水彩畫 ▲夏の海邊(石版十色刷)三宅克巳筆

彩色畫 ▲綠蔭(同　六色刷)河合英忠筆

寫眞版

泰西名畫村の少女　米國大統領夫人と其家庭　女學校卒業生(大判寫眞三枚)新潟縣女子師範校、東京裁縫女學校、立教女學校○赤堀氏割烹敎室

○短册津輕伯　樺山伯夫人、東久世伯、大河內子夫人眞筆

○紀州和歌の浦、日光含滿ヶ淵同中禪寺湖、上野妙義山旭嶽、青森縣嗒門瀧、北海道幾春別瀧

文學博士　坪内逍遙氏序
杉谷代水氏作歌◎東儀鐵笛氏作曲

（小野鵞堂氏書）

新曲　熊野

（一條成美氏畫）

頗美裝全一册定價金四拾錢郵税金四錢

哀々たる母子の思、綿々たる君夫の情、止まらんか將た歸らんか洛西春闌にして孝女が心は千々に煩悶す。清新の想、優婉の辞、餘韻の哀れに盡きざる所暮れ行く春の姿に似たり若し夫れ作曲の妙に至ては東西雅俗の粹を比べ、踏襲以外別に一機軸を出して凄婉幽雅亦極めて團欒と諧和せり。既に某々高等女學校に演奏せられて父兄博識の好評を受く。藝界最新の珍什たり

蜂谷鍵吉先生作歌
目賀田萬世吉先生作曲

（三版出來）

獨唱　廣瀨中佐

定價金貳拾五錢
郵税金四錢

發行所　東京市神田區錦町一丁目　大阪市南區鹽町通一丁目　修文館

何人と雖も一度は必ず繙かざる可からざる良著

訂正八版



男女の起源及其發達男女生殖上の差異及び現象男女の生質及生活上の差異男女の發生及發育男女の地位關係等苟も吾人人類が相偕に生活する社會の根源たる男女につきあらゆる方面より研究し明快なる解決を與へ空前の良著なり而も行文流麗眞面目にして些の卑猥の點を有せず却て高潔なる思想の下に最も着實に穩健に之か解決を試みたるものなり

帝國理科大學教授理學博士 坪井正五郎先生序

福岡縣中學修猷館教諭 大鳥居弃三君著

宮崎縣師範學校長 遠藤正先生序

宮崎縣師範學校教諭 澤田順次郎君著

寫眞版圖畫挿入
美麗裝釘全壹册
正價金五拾錢
郵稅金八錢

高評嘖々
賞讃聲裡に

▲新に家庭を作り成して希望に滿ちた光に浴し將に父たり母たらんとする者は讀むべし▼

▲複雜なる人生の發展研究に資すべく處世の趣味を向上的ならしむべく速に之を讀むべし▼

▲高き理想の下に新生命ある家庭生活を營まんとするものは熟讀すべし▼

訂正八版
盡きんとす

圖書之新趣味

學校に家庭に多大の高評を博して今や再版成る敢て吾が姉妹諸孃に一讀せんことをすすむ

意匠斬新和裝上製
全壹册挿圖千餘圖
正價金八拾錢
郵稅金拾錢

發行所 東京市神田區裏神保町 電話本局二千三十九番 光風館書店

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ





遊學を憚る勿れ

昨夜秋風吹いて白雲起り、今朝庭前に秋の葉の落るを見る、實に音なうして秋は來た。地方に歸省して山色水聲に腦を新たにし、再び都に入る諸孃もあるでせう、或は新しく父母に志を告げ、物學びの爲に都に上る少女諸君もあるでせう。只、此際吾人が諸孃に一言したいのは、遊學の志を抱きながら、躊躇して東京に出でかねて居る諸孃に向ひ、勇を振つて遊學の途に就かれんことを勸めるのであります。今や女學全盛の時代に向ひ、各種の學校は其設備を整へ、諸孃の來るのを待つて居ます。女學生の風儀は亂れ、東京は墮落の巣窟であると解釋する者もありますが、之れ僅少なる一部分の現象で、全躰の進歩は駸々として日々に新なるものがあつて、今日の女子は相當の敎育を受けて置かなければ、他日非常に他より後れることがあるでせう。他が墮落しやうと、荒まうと、自分は他視もふらずに勉强さへすれば宜しいので、要するに其人の人格さへ健實であらば、今こそ女子の學問すべき時代です、田有れども耕さゞれば倉廩虛し、書有れども敎へざれば子孫愚なりと、諸孃は自ら愚なる子孫となる事は好むでせうか、時や新學期に入る、一言以て新勸學の辭を志望ある諸孃の左右に呈します。

名家文壇

選評餘談（三）

文學士　鹽井雨江　談話
門生　筆記

（六）婉曲に發表する事を心懸けねばならぬ。婉曲に發表すると云ふ事は、抒情にもあれ、敍事にもあれ、直接に表面から其の事柄を云ひあらはさずして、迂回して裏面から其の意をきかするやうにあらはすのである。

其の發表法には種々あるが、一つ一つあぐる事は出來ぬ。たゞ其の一二の心がまへの例を示せば、西行法師が水邊の柳蔭いかにも涼しくして、そゞろ時をうつしたる感を言はんとして、

路のべに清水流るゝ柳蔭、
しばしとてこそ立ちどまりつれ。

とのべ、また和泉式部が、其の女小式部の死（小式部一子をのこして死したり）を悼みて、

とゞめ置きて、誰れをあはれと思ふらん、
子やまさるらん、子はまさりけり。

といへる歌のよみ方は、慥に婉曲なるものなり。其のあらはさんとせる意味と、其ののべたる詞とを較べ見よ。迂回して言へるにあらずや。また躬恒が、

櫻の花の咲けりけるを見にまうで來たりける人に、よみてつかはしける、

我が宿の花見がてらにくる人は、
散りなん後ぞ戀しかるべき。

花見がてらに來れる如き薄情の人なれば、花の散りなむ後は、最早や我れを忘れてしまふならむとの意であるが、それを、散りなん後ぞ戀しく思はるゝ事ならんと、反對にのべたり。かく反對に發表するのも、一種である。また寂蓮法師が、人の僅かなる才力に慢心するを戒めて、

牛の子に踏まるな、庭の蝸牛、
角あればとて、身をな頼みそ。

と言へる如く、譬喩を以て發表するも、一種の婉曲である。また我が思ふ事を言ひ盡さずして、中ばにのべ置くも、一種である。淸少納言の枕草紙に、

思はん子を法師になしたらむこそは、いと苦しけれ。さるは、いとたのもしきわざを、たゞ木のはしなどのやうに思ひたらむこそ、いとほしけれ。精進物の惡しきを食ひ、寢ぬるをも、若きはものもゆかしからん、女などのある所をも、などか忌みたるやうに、さしのぞかずもあらん。それをもやすからず言ふ。まして、驗者などの方は、いと苦しげなり。御嶽、熊野、かゝらぬ山なくありく程に、恐ろしき目も見、しるしある聞え出で來ぬれば、此處彼處によばれ、時めくにつけて、安げもなし。いたくわづらふ人にかゝりて、ものゝけ調伏するも、いと苦しければ、困じてうちねぶれば、ねぶりなどのみしてと咎むるも、いと所せく、いかに思はんと。これは昔の事なり、今樣は安げなり。

僧侶の苦しげなる境遇のみ說き立てゝ、最後に、簡短に「これは昔の事なり。今樣は安げなり。」と記して、當時の僧侶の氣樂げなるを發表したのは、誠に面白い組立て方である。昔の僧侶の苦境を語つた表面の筆は、皆裏面に當時の僧侶の氣樂げなるを語つた筆となつたのである。

思想によつては、斯くの如く婉曲なる發表法によつて組み立つるのは、慥かに面白い趣向を得るの一法である。然るに、初心の作者は、毎時、何事も、正直に表面から、其の眞意のあるまゝを發表するやうである。これも趣向の面白くない文章の出來る一原因である。

（七）　文章は拵へるものと許り思ふべからず。

作文とは言へど、詞を以て拵へ作るものなりと許り思うてはならない。例へば、情を抒べやうとするには、我が心に感ずる眞情を記さねばならぬ。景を叙べるにしても、我が目に映る實景を記さねばならない。故に假りに題を設けて作るにしても、一時全く其の境遇に、

我が心身を置きて考へる必要がある。然らざれば、情をのべても僞りとなり、景を記しても死物となる。まことの文、活きた文とはなるを得ず。投書の中の抒情、多くはわざとらしく思はれ、景を叙べたるも、眞にせまつたのは、極く少ない。これ全く拵へるとのみ思ふの結果であらう。又、外形は美しい文字が並べてあるが、内容は何の實もない文が多い。是れも、只金玉の文字、燦爛の句を並べて拵へさへすれば、それで文章であると考へて居るからであらう。

元來文章は心がもとで詞が末である。心は言葉の出づる處で、詞は心のあらはるゝところである。それゆゑ、如何に美しい詞が並べてあつても、心が皆無では、これを繪にたとへて見ると、錦繪のやうなものである。只美しい繪の具をぬつただけのもので、眞の畵とは言へない。文章もそれと同じく、心のないものは、眞の文とは言はれない。

單に文を拵へるとのみ思つて居るやうな人は、作文の技術の修養よりは、先づ作文の精神の修養をする事が必要である。

(八) 結末をもあらかじめ考へて置かねばならぬ。

投書の中に、所謂龍頭蛇尾の難をまぬがれぬもの、しまりの無きもの、さては、結末の爲めに特に終りに添へものをしたる如きもの、すべて結末の面白からぬものが多い。

是れは預め結末を考へて置かないからであると思ふ。言ふ事つきて、それておしまひと言ふやうになるから、しまりの無いものにも、龍頭蛇尾にもなる。或は、言ふ事盡きたり、何とか結末をつけねばならぬと、こゝにはじめて、結末を工夫す。されば、特に添へものをしたる如きものにもなるのである。又、さまでの難はなくとも、平凡の評をまぬかれぬものが多い。例へば、紀行文などの結末に、「日が暮れて家に歸る」。「暮鴉の聲にうながされて、家に歸る。」などの如き極りきつた結び方をするのである。是れ等は、今少し工夫して、嶄新な結末を預め考へてから、筆を取つて

もらひたい。總じて、文章を組み立つるには、冒頭と結末との工夫が大切である。冒頭は最も人の注意を引くべき力のあるやうに、面白きものを得ざるべからず。結末は自然にして強く、一篇の思想をこゝにしつかりとまとめ得て、而かも、盡きぬ餘韻のあるやうに、面白きものを得ざるべからず。これを得るには、預め斯くの如き事、かくの如き文句にて結ばんと、はやく工夫をして置かねばならぬ。いかに言ひはじめ、いかに言ひつゞけ、いかに言ひ收む、この三點は、筆をとる前に、必ず大躰を考案し置かねばならぬ。さらでは、到底立派な文は作られぬ事ぞ。

◎筆づかひ詞づかひ

（一）言文一致の文章の缺點

投書中、言文一致の文章が多いが、とかく冗漫にして、くだくだしく、しだらがないのが多い。これは、初心の人の陥り易き言文一致の文の弊であるやうに思はるゝ。其の一因は、書く事、言ふ詞の選擇取捨の注意をかくからである。例へば、幼兒のあどけなき言行を寫さむとする時など、其の言ふ事を一言一句もらすまいとして、命題にさまで關係もなき、必要もあらぬ言葉迄、一々並べるので、自然だらだらとして冗漫になるのである。其の幼兒がしやべる片言を、一つ一つ並べるには及ばぬ。其の中を取捨して、幼兒のあどけなさを表はすに、其の場合必要なる詞だけを、選びて記すやうにするがよい。

また、言文一致の文は、兎角其の言ひまはし、いひつゞけ方、いひとめ方、すべて筆路に變化が誠に乏しい。例へば、言ひとむるところは、何々である。何々だ。何々した。といふやうに、である、だ、た、にてのみ終れる文章が多い。元來我が口語は、極めて言ひ方に、變化の乏しいものなれば、これを以て文とするには、口語の言ひ方にのみとゞまりては、到底不器用の文となるをまぬがれ難し。文章語のいひ方と、口語の言ひ方とを巧みに取りまぜて書くやうに工夫せねば、面白い言文一致の文は到底出來ない。巧みに取り

まぜるといふは、よく自然にして、よく融和して、耳にをかしくさはる事の無いやうに、工夫して用ふるを言ふなり。其の法は、とても言ふ事は出來ぬ。自から苦心して、自から悟らるゝより外は無い。

また、會話體の言文一致の文には、いかなる人に對しても、同樣の言葉をつかひたるものが多い。長上の人に對しても、同等の人に對しても、我れより下の人に對しても、いかなる人に對しても、每時同じやうなる言語、同じやうなる詞づかひをする事である。これも、投書の中によくみとむる缺點であるが、今更多言せずとも、また別に考へられずとも、よくわかつた事であらうと思ふ。言語も、詞づかひも、對する人によりて自から差のある事は、日常の會話にても皆人の知つて居る筈なれば。

（未完）

○女子清韓語講習所生徒募集。岩倉夫人を校長とし顧問伊澤修二氏、監督淑德婦人會なる小石川區表町仝校は本月六日より第二學期を開始し支那教育に從事したき女子教育家、彼地駐在の外交官會社員等の夫人令孃、及び清韓を研究したき夫人令孃の入學を許可する由、特に便宜を計りて撰科の設けもある由

ゆきかひぶり（上）

佐々木信綱

うばらの枝にそへて

木々の梢若葉おひしげりて、空のけしきも夏めき候を、いかにおはしますらむ。けさ園生のそゞろありき、築山かげの草むらに、見出て候白ばらのはな二つ、露にしをれたる樣のなつかしさに、折とりて一本さしかざし、一本を御許へとさし上候。急ぎ人してもたせあぐるにて候へども、御手許にいたるまでには、いさゝかしをれて、折りとりし時のあざやかさを失はずやと、それのみ心にかゝり候。美しきものゝ命は短かく候へば、かくいふうちもと、氣づかはれて、取いそぎかくは。

かへしぶみ

うれしき御たまもの、いさゝかしぼみしさまもなく、思ふに折とり給ひし時、そのまゝのうるはしさにて候らむ。共に咲きし一本は、君が御髮に匂ふかと思ひ候へば、いとなつかしく、彼の御園生をそゞろありきし

給ひて、彼の山かげに立ちとゞまり、折りかざし給ひけむ御姿もみゆるやう、露をおびてあざやかにましろき花の、御くろかみに、いかにはえまさりけむ。さるにても、こゝの花は、机の上の小さきはながめに、さし候を、はやくも妹の目とめ候て、只今寫生いたしをり候。いかゞといなみをり候へども、出來候はゞ御目にかくべく、まづは御返しまでかしこ。

梅雨ふるころ友に

しめ〳〵とふりくらす昨日今日のさみだれ、いかにか眺めさせ給ふ。こゝはいさゝか町離れたれば、さらでだに訪ふ人もまれに、書もよみ倦ぜしはては、なすこともなく、たゞ空のみ眺められ候。かゝる折ごとになつかしきは、友の上にて候を。櫻ちる頃までは、御近くに住居して、日々御ゆきゝいたし候ことゝて、たゞ御あたりのみ思はれ候。來月に入らばたづねんとの御言葉、切に思ひ出でられて、頼みがたき晴れまも、頼まれ候。幸ひ宇治よりおこせ候新茶もこれあり候まゝ、梅の實おつる窓のもとに、くさ〳〵の御物語も承りたく、いかで御いとまもあらば音づれ給へ。前のやうに御間近からずとも、さばかり遠くも候はぬを。

かへしぶみ

御あたりはなほ若葉の梢のひまに、雨に烟る遠山のをかしき眺めもおはさむを、町なかの此頃ばかりいぶせきものは候はじ。たてこめたる家居の、何に心をはるけむよすがもなく、道ゆく車の音のみさわがしく、堪へ難きばかりに候。中々にうみ給ふまでの御讀書の御境こそ羨ましく候へ。うれしき御招の御詞、いかで御うけがひ申さゞるべき。けふははや時おそく候まゝ、あす晴間を見て、必ず御驚かし申すべく、かねて作らせ給へりと承り候花畑の露をおびたる花のいろ〳〵、いかばかり美しかるべく、ぜひ拜見ねがふべく候。まづはみ答までかしこ。

梅雨ふる日人のなき跡とふらふとて

晴間も見えずふりつゞく梅雨の空いぶせく候を、父君失ひ給ひし御なげき新らしき御身の、いかにわびしく眺めゐ給ふらむ。花鳥のまぎるゝものおほかりしも、中々に思ひ出のたねとなりて悲しかりし亡き母に別れし一昨年の、我身の上も思ひ出され、さらでだに黑雲

おほひ重なりて、うつとうしき限りなる此頃を、忘るゝまもなき御悲しみに、いかにたへがたくすごしゐ給ふらむと、御察し申上候。それにつけても、先日御葬式の折、いといたう面やつれ給ひて、かなしげに見え給ひし御面影の、まざ〳〵とうかび來りかくてあまりの御悲しみに、病みたまふやうの事おはさばと、安き心地もおぼえず、御兄君と御もと樣とを、たゞ御頼みに殘りゐ給ふ母君の、御心づかひも、いかにと察せられ候を、何もさる方に思ひとゞめ給ひて、母君の御心を安んぜさせ給へ。これぞ亡き御父君の御心にも適ふべく候。やさしき御心よりは、つれなき事いふものよとおぼさんも、これも君思ふ故の言とみ許し給へ。御たづねいたし、御まのあたりにていろ〳〵申上たくも候へど、かなしげなる御姿にむかひては、涙のみなるべく、わざと文してかくは申上候。このうばら一枝、園にさき殘りをり候を、御靈前に御そなへ給はりたく、あはれなき父君も、草花好ませたまひて、かつて此花さける頃來給ひつゝ、めでたしとの給ひし事もありしをと、またも思ひ出でられ候。かしこ。

かへしぶみ

御心こめさせ給ひし御言葉の數々、慰められて一しほかなしきは、かゝる折の思ひ、又もなみだに御玉章打ぬらし候。しかもはては、やゝ心のなごむをおぼえて、御いましめの御言葉、しみ〳〵と胸にひゞき候。思ひて甲斐なき歎きとは知りつゝも、よわき心の、さま〴〵の悲しき思にたへては、われかもわかぬ心地に、思ひしづむことのみにて候。ことに晴まなき此頃の空、まくろき雲も、身一つにおほひたるやうにて、たゞ忘られぬ父の上、世に例なき事にもあらぬをと、思ひつゝもなほ行末のたゞ暗路をたどりゆくらむやうにおもはれて、堪へがたく候。されどもとより御いましめのごとく、かくてくづをれはてゝは、母や兄にも申譯なく、亡父にも御すまぬ事、必ずよわき心はげまして、御言葉にそむかぬやう心がくべく候。給はりしうばら、佛もいかに喜び候ふらむ。たゞちに靈前にそなへ候。去年さきしをめでし人、今年はあらず、もろきは花のみかはと、線香のけぶりたちめぐる、新しき位牌のかたはらに、花も何をか思ふらむと涙ぐまれて候。かしこ。

螢籠にそへて

ふりくらしゝ梅雨もはれて、緑こき山々のけしきをか

しく候を、いかにか眺めゐ給ふ。さて去年今頃月の明きに誘はれて、共にそゞろありきせし、かの山かげの野邊のさま、いかならむとそゞろ忍ばれをり候ところ、昨朝より親戚の子供ら、泊りがけにて參りをり候にそゝのかされ、夕つ方より螢狩に物し候。折からうす月夜にて、おぼつかなくも候ひしかど、去年御供せし折の道をたどりゆき候に、こゝかしこの草のしげみ、流れのくまなどに、とびかふ螢の光、天つ星を地上にまきちらしたるやうにて、いかにもうつくしく、皆々打興じてあまたとり申し候。凉しき風袂をあをりて、そゞろにひるのあつさも忘られ、心地すが〳〵しう、幼き子らの唱歌の聲にともなはれて、八時ごろかへり候。去年を思ひ出るにつけても、あまり急にて、御誘ひえざりしこといかにも口惜しく、急ぎ使して、螢いさゝかばかり、御わかちまをし候。かしこ。

かへしぶみ

只今は御心にかけさせられ、御使して御書はた螢籠、御おくり給はり、あつき御志、うれしう存じ上候。昨夜の御供に加はりえざりし事は、返す〳〵も口惜うは候へども、御手紙によりて御有樣も知る事をえ、去年の事なども思ひいでられて、樂しき思いたし候。給はりし螢籠は、今夜よりわが机のほとりにおきて、せめては怠りがちの身を、はげまさるゝよすかとせむと存じ候。庭にさき候白色合一本、御うつりにもとさし上候。御繪の料ともならばうれしかるべく候。かしこ。

納涼にまねくふみ

あまりに暑さきびしき折なれば、いかゞとも存ぜられ候へど、來る何日納涼の會をかねて、親しきかた〳〵御招き申し、すゞしき御物語りに、心のちりをはらひたく存じ候まゝ、殊にかゝる折の、何も御もてなしはいたさず候へども、何時より御入り下されずや。もとより御みなりなども、御ふだん着のまゝにて、御輕くあそばされたく、招き候人々も、みな御知り合のなかなれば、つゆ御心置なくて御出待ち上候。恰も月明き頃に候まゝ、園の松の梢をたゝみにうつさせて、樂しき御物語に、夜をふかすもをかしかるべく、御かるへさは、たしかなるものに、御おくらせ申すべく候まゝ、その御つもりにて、御ゆるりと御出下され度、御待ち申上候。かしこ。

かへしぶみ

御招き給はり忝く、たゞ日々のあつさに打まけて、なす事もなくくらしうんじをり候折からの御もよほし、涼しき風吹き來る心地して、承り候。いかで御辭み申し候べき。夕ぐれより必ず參上いたすべく、この品輕少に候へども、その日の御もてなし草にまでもとさし上候。取あへず御答まで。かしこ。

國文評釋

伊勢物語(二)

文學士　中内蝶二

○吾妻下りの條(續)

富士の山を見れば、さつきのつごもりに、雪いとしろうふれり。

時しらぬ山はふじのねいつとてか
かのこまだらに雪のふるらむ

(釋義)さつき　早苗月の略にて、陰暦五月の異稱○つごもり　陰暦にて、二十日以後の稱、月の籠り隱れて、見えずなるの意より來れり○時しらぬ云々　時しらぬとは、元來雪は、冬降りて、夏は降らざるものなるに、今五月の末に、かく雪降りたればなり。ふじのねは、富士の峯、いつとてかは、何時と思ひてか、かのこまだらにとは、鹿の毛の斑文の如きさまにとの義にて、この歌の意は、時を知らぬ山とは、富士峯のことなり。今の時節を、何時と思ひてか、かくまだらに、雪は降るならむとなり。

その山は、こゝにたとへば、ひえの山をはたちばかり、かさねあげたらむほどして、なりは、しほじりのやうになむありける。

(釋義)こゝにたとへば　この都にたとへばとの義○ひえの山を云々　比叡山を二十ばかりも積みかさねたるくらゐの高さをしてとなり○なり　形の義○しほじり　濱邊にて、砂を圓く塚の如くに積みあけたるもの。これに潮水を注ぎかけ、日に晒し

て、鹽を採るために造りたるものにて、その形、富士山と畧ぼ似たり。

なほゆきゆきて、むざしの國と、しもつふさの國との中に、いと大なる河あり。それを、すみだ川といふ。その河のほとりにむれゐて思ひやれば、かぎりなく遠くもきにけるかなと、わびあへるに、わたし守、はや船にのれ、日も暮れなむといふに、のりてわたらむとす。

〔釋義〕むざしの國　武藏國なり○しもつふさの國　下總國なり○すみだ川　隅田川、また角田川ともいふ。今は武藏國にありて、東京市を貫流すれども、昔は、兩國の境となりて、角田川以東を下總國といひたり○むれゐて　群居てにて、集まりゐての義○思ひやれば　都の方を思ひやればとの義○かぎりなく遠くも云々　都を出て、こゝまでの旅の道、限りも知られぬほど、はるかに遠く來りしものかなとの意○わびあへるに　旅の心ぼそきことなど、口々に語り合ふうちにとなり○わたし守云々　わたし守とは、渡船を漕ぐ船頭のこと。はやより、暮れなむまでは、船頭の言葉にて、日も暮れかゝりたれば、はやく船に乗れよとなり。

みな人、ものわびしくて、京におもふ人なきにしもあらず。さるをりしも、しろき鳥の、はしとあしとあかき、鴫のおほきさなる、水のうへにあそびつゝ、いをくふ。

〔釋義〕ものわびしくて　長途の旅に來て、日暮れかゝりたれば、何となく、淋しく、心細くてとなり○京におもふ人云々　都の方に思ふ人の、なきにてもあらずと、さすがに都を思ひ出したるなり○さるをりしも　其時しもの義○はしとあしとあかき　嘴と足との赤きとなり○鴫のおほきさなる　鴫の大きさの鳥がとなり。鴫は、形水鶏に似て、嘴長く、全身青ばめり。頭より翼まで茶褐色にて、背は大抵灰黒に小さき白斑點あり。胸と腹とは白し○いを　魚のことにて、古は、うをといふを、いをと云へり。

京には見えぬ鳥なれば、みな人しらず。わたし守にとひければ、これなむ、みやこどりといふをきゝて、

　名にしおはゞいざことゝはむ都鳥
　　わがおもふ人はありやなしやと

とよめりければ、船こぞりて、なきにけり。

〔釋義〕これなむ　これこそと云ふに同じ○名にしおはゞ云々　名にしおはゞとは、名に負ひたる如くならばとの義、いざとは、いて、さア、どれなどの義、ことゝはむとは、もの申さうとの義、ありやなしやとは、生きて世に在りや否やとの義にて、この歌の意は、都鳥といふ鳥が、まこと、都といふ名を負うてゐる如くならば、定めて都の樣子も知りつらむ。さあもの申さむ都鳥よ、わが思ふ人は、都にて、無事なりや、否や聞きたしとなり。都を出でゝ遠き旅路にあり、都鳥と云ふ名を聞きて、都を戀しく思ふの情は、さもありぬべし○船こぞりて云々　こぞりてとは、みな、ことごとくなどの義にて、歌のこゝろの哀れさに、船中に在りあはせる人、ことごとく泣きたりとなり。

〔評論〕業平身は親王の家に生まれて、人臣に列せられ、しかも藤原氏の權勢は、袞龍の袖を犯して、讓位の御沙汰にまで、叡慮を左右するに至る。たゞさへ憤懣の情に堪へざりしを、二條の后の御事より、またも失戀の苦しみに遭ひ、失意の浪は、ます〳〵失意を載せて、胸中堪へがたき悶えを覺えぬ。都の春をよそにして、踏みもならはぬ東國の旅に出づ、これまことに、沒し難き悲みと、消しがたき憤りとのあればなりけり。或は、みやこにありわびてと云ひ、また或は、身をやうなきものに思ひなしてと云ふ、これ到底わが志の行はるべからざるより、世を憤りて、自から身をおもひ棄てたるにあらずや。口にこそ、都に住みわびたりと云へ、まことは、都に住みわびたるにあらず、悲憤のあまりに出でたるものなれば、東國の方に赴きたりとて、何の樂しみかあるべき。何の心やりにかなるべき。旅情物に觸れ事に激して、溢れ出づる所おのづから悲哀の調を

帶ぶ、また怪しむに足らざるなり。伊勢より尾張の海濱をたどりて、寄りては返る浪を羨み、『いとゞしく過ぎにしかたの戀ひしきに羨ましくもかへる浪かな』と歌へるもの、これやがて、都の忘れられぬしるしにあらずや。都の戀ひしき證にあらずや。三河國八橋に至りては、燕子花の色美しきを見るにつけ、『からころもきつゝなれにし妻しあればはる〴〵來ぬる旅をしぞおもふ』と歌ひて、都に在りける人を思ひ、駿河國宇津の山に至りては、巨木天を蔽ひて晝なほ暗く、葛蔓脚にまつはりて、人跡稀なる寂寞の境に、ゆくりなくも知己の修行者に邂逅し、『駿河なるうつの山べのうつゝにも夢にも人の逢はぬなりけり』と一首の歌を托し、富岳の麓を過ぎて、武藏に入るに及びては、角田川に都鳥を見て『名にしおはゞいざことゝはむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと』と歌ふ。一として都を思ふの情をあらはさゞるはなし。げにや、一日〳〵に都の花にそむきて、一歩〳〵寂寞荒涼の境に入る、心細さは一句〳〵に加はるを見る。八橋にての歌は、情おもく、宇津の山にての歌は、寂しさ強く、角田川にての歌は、情も寂しさも、兩つながら切になれり。おもふに吾妻下りの條の中にて、最も趣あるは、角田川べの景色を寫せる文ならむか。それ當時の武藏野たるや、荒原赤土、百里相望み、渺茫として際涯なく、隅田川その間を流れて、溶々海に注ぎ、寒村わづかに左右の沿岸に點々せしに過ぎずして、滿目の光景は、まことに寂寥をきはめたりしなり。こゝに大川の岸にのぞみて、これをわたりて知らぬ方に赴かむとす、誰かまた、かぎりなくとほくもきにけるかなとの感起らざるべき。加ふるに、日暮れて、なほ行路遠きの憾みあり、日もくれなむの一句、まことに千鈞の重みありと云ふべし。而して、京におもふ人なきにしもあらずの一句は、巧みに冒頭の、みやこにありわびて及び、身をやうなきものに思ひなしての一節に照應して、無限の情趣あるにあらずや。『名にしおはゞの』一首、當時船中にありて、まのあたり其歌

を聞きし人ならずとも、今その時の業平が胸中と、四邊の景致とを想ひやるときは、また一掬同情の涙なき能はず。讀者閑を得て向島に遊びたまふことあらば、ねがはくば、名物の言問團子を味ひて、この風流公子が、そのかみの數寄を偲びみたまへ。（未完）

古城

文學士　古陵生

一

悲しき城の物がたり
聞きたまひしか旅の君
櫓も壁も吊橋も
みながら蔦に埋れたる

戰好む老侯の
齢の末の荒らかさ
荊棘にまじる雛菊と
生ひしは一人姫の君

やさしき思おこりては
燭にはふるしろがねの
胄のひかり楯のかげ
たゞ何となく凄まじう

廣室をぬけてやはらかに
世界をつゝみたる月ふめば
庭の桂の花の香に
たぐひてひゞく笛のこゑ

胸にしみいるゆかしさに
いとゞ心はときめきて
壁の狹間につとよれば
顏につめたき蔦のつゆ

二

やすからぬその夜のゆめや
その笛をかくしに入れて
その駒に二人相乘り
雪白き高嶺を越ゆる

葉はあらぬ森のかげより
狼の遠音近づき
四つ五つ七つ九つ

吼えたけり迫りて來れば
驚きて駒はさかだち
鞍の上の二人は谷に
と思へば夢はやぶれて
枕邊のともしもきえぬ

あゝ何ぞ何の祥ぞと
しづまらぬ胸抑へつゝ
火を喚べばあと侍女は
とりて來ぬ銀の燭

「城の外に見えしは誰ぞと
口々に皆いひはべり
てる月のかげにはえたつ
美はしのその御姿や

隣國なる軍の君の
一の公子あらず二の公子
さならでは笛のしらべの
優なるはあるべくもなし」

「げにそれよ老侯の君
狩りにとて出でましゝ時
小さなる女の童して
桂の枝おくりたまひし」

かくいへばかと答へつゝ
その枝は涙にぬれし
何ぞともわれしらざりし
されどこの思ひはそれよ

かにかくに思ぞ姫君
灯のひかりかすかになりて
角のこゑ狩犬のこゑ
老侯は今朝もまた狩

三

ひと夜平和やぶれしの
人の咡きさしより
いよ／＼胸の安からず
ひたや籠りの姫の君

風よりあくる朝の野の
緑の末に鯨波のこゑ
旗のひらめき見えくれば
こゝにもおこる武具のおと

からくも枕もたげつゝ
帳あぐるもものうげや
戍楼に兵士のぼらせて
しらせまつまは年のごと

「敵はやう／＼近づきぬ」
「今老侯はいでましぬ」
「盾のひかりにみち／＼て
野は皆兵となりはてぬ」

進軍の曲ひゞきしと
思へばおこるとよめきや
鎗と鎗とは雲と飛び
駒と駒とは火をや蹴る

「老侯駒を進めます
いま戰はたけなはに
烟塵天に漲りて
旗も兵士も見えわかず」

「さと吹く風にほの見ゆる
敵の指揮者の一の公子
駒やかへせし一本の
旗は横さに仆れたり」

あなやと姫は手をあげて
あてなき空に揮らすれば
指先ふるゝ花柱
あゝその人は二の公子よ

「逃ぐるを逐ふや老侯の
旗は岡より驀地
いよ／＼起る烟塵に
わかねどしるし我勝利」

あゝ勝利とやそは何ぞ
我身に何の榮かある

崩れて走る群の中
つゝがあらでや思ふ君

たちまち聲はひゞき來ぬ
「あな戰運は逆に
敵は再びかへしたり
前に立てるは二の公子か」

あゝかの君は出でますか
「銅鐵のよろひ白の駒
先立つさまのをゝしさよ
されども侯は引きまさぬ」

「また立ち込むる塵の中
みだれあひたる劒のかげ
鎗のひかりに佇るゝや
十騎二十騎三十騎」

公子やいかなる父いかに
身をもだえつゝ姫の君
窓にとあせりたまふ時

味方勝利のこゑ高し
あな彼の君は失せませし
今は希望も光明も
失せぬつきぬの一時に
さと迸るくれなゐや

四

胸當を血汐にそめて
二の公子の大旗とりて
凱歌につゝまれながら
城の門に入らす老侯

「姫ゆきぬ」その一言に
破れたるその傷口や
夕映のうすれゆく空
さながらに身は失せませし

祟ありて靈こそ棲めと
この城に人は來らず
荒れ／＼てこゝに幾年
梟ぞたゞ夜を守る

家庭

季節料理

赤堀峯吉

○野蜀葵の浸物（朝飯用）

小束なる野蜀葵七把を購め、一寸ほどの長さに截り、水洗して毛篩にとり、水氣を斷りてその前より中火に水を加れたる鍋を架け、その中へ投じ、一二回沸騰したれば手早く毛篩に上げ、團扇にて煽ぎ冷却し、淺草海苔一枚を火にて炙り、青色になりたれば、すかし視て芥塵をよく去り、新聞紙に包み、手にてほどよく揉み置き、山葵のえぼを庖刀にてこそげ去り、さゝらにてこすり洗ひ、青色となりたる時、擦金にておろし、醤油八分目と煮出汁の冷したるを二分加へたる小なる器にとり、これにて右のおろしたる山葵を溶き、野蜀葵の水氣を斷り、直ちに皿に加れ、その上より山葵醤油をかけ、ほどよく箸にて攪拌し、粉にしたる海苔をふりかけ、別皿に取分けて供す。

○納豆汁（同）

納豆を一錢ほどを購め、皿にあけよく芥塵を箸の頭にて去り、それより甘味噌二錢ほど購め、納豆を擂鉢に加れ、擂木にてよく擂り碎し、それより味噌を投れてほどよく擂り混ぜ、その前より鍋に水一升ほど加れ、中火に架け置き、鰹節三十匁位削り、湯の沸騰したる時その中へ投じ、二三回ほど沸騰したれば鍋を下ろし、泡を去り直ちに擂りたる味噌の中へ、毛篩を當てそれにて漉し、溶かしたれば再び毛篩を鍋に當てゝ漉し、火にかけ、沸騰したれば味の加減を試て、椀に盛り分け、その前より葱五本を水洗ひして小口より薄く截り、布巾に包み、水の中にて振り動かし、堅く絞り、右の椀にほどよく投れて供す。

○煮梅干（同）

大なる梅干を購め、ザット水洗して針五六本を以て、まんべんなく突き刺し、直ちに水中に投じ鹽氣を脱き、一日に三四回ほど水を替へ、二日間も浸け置き、味の加減を試て、少しく酸氣のあるを度とし、よく水氣

を斷りて鐵鍋に投れ、湯少々を加へ文火に載せ、二三回沸騰したれば金杓子にて掬ひ上げ、水氣を斷り再度鍋に加れ、少量の水と梅干五十顆につき砂糖百匁を混じ、文火に架け、よく煮込みて器にとり、小皿に取分けて供す。

〔注意〕一人宛に二三顆づゝを供す、亦鹽氣を即時に脫かんとするには、微溫湯と共に鍋に加れ、文火にかけ十二三回水を替へ煮て用ゆ、

○火取小鰺の椀（壹飯用）

小鰺を購め、頭を左に向け、ぜんご（えらくの部分）を庖刀にてそぎ去り、頭を截り去り、腹部を開け腸を脫きて水にて洗ひ、三枚におろし、皮骨をそぎ去り、淡き鹽水にて洗ひ、金串に刺し、烈火にて皮目の方を炙り、直ちに串を脫き、毛拔き亦は指頭にて肉の中央の小骨をよく脫き去り、椀に一人前に一尾づゝ盛り、茗荷を水洗して小口より截り、水中にとり、少量の煮出汁を鍋に加れ、火にかけ、茗荷を堅く絞り鍋に



投じ、煮へたれば汁氣を搾りて、椀に盛り、淸汁を注ぎ込みて供す、淸汁の製法は、水一升を鍋に加れ、中火に架け、鰹節四十匁ほど削り、湯の沸騰したる時その中へ投じ、二三回沸騰したれば鍋を下ろし、浮き上りたる泡滓を掬ひ去り、毛篩に布巾をあて、漉し、再度鍋に移し、火にかけ、鹽少々（六分）を加れ、沸騰したれば鍋を下ろし、醬油少々（四分）ほど加へ、手早くかきまはし、味の加減を試て用ゆ。

○小鰺のおろしかけ（同）

小鰺を購め、前條の如き手順に爲し、三枚におろし、小骨をよく脫き、皿に鹽を撒布し、その上に皮目を下に爲して置き、更にその上にも少量の鹽を撒布け、暫時經て水洗を爲し、水氣を去り少量の酢にて洗ひ、目笊にとり置き、大根を皮を剝き、擦金にておろし、毛篩に載せ置き、二顆の柚子を水洗して輪截に爲し、兩手にて汁液を搾り、布巾にて漉し、その中へ少量の酢を加へ、

砂糖少々を混じ、鹽を加へ味の加減を試み、その中へおろしたる大根を投じ、箸にてかきまはし、鯵を適宜に庖刀して皿の中央に盛り、その上におろし大根共に酢をかけ、尚ほ柚子の皮目を擦金にて少しくおろしかけて供す。

〔注意〕右の小鯵は一人分に三尾ほどを盛るべし、

○油　玉(同)

一人分二枚の分量にて油揚豆腐を購め、縦に二ツに截り、横に一分ほどに截り、目笊に加れ熱湯を灌ぎ、鍋に煮出汁を加れ、砂糖少許、醬油少許を加へ、その中へ右の油揚豆腐を投じ、中火にかけ、沸騰したる時味の加減を試み、大なる玉子一顆を茶碗に破り、箸にてかきまはし、右の中に流し込み、鍋蓋を爲し、直ちに鍋を下ろし、少時く經て丼にとり、擦し柚子をふりかけて供す。

〔注意〕この煮方は先づ油揚豆腐を掩ふほどに、煮汁を多くして煮るべし、

○秋茄子の吸物(夕飯用)

小さき秋茄子を購め、皮を剝き、小口より一分ほどに輪截に爲し、直ちに水中に投じ、鍋に水を加へ、その中へ投れ中火にかけ、少しく軟かになりたれば、鍋を下ろし笊に掬ひ上げ、三州味噌三錢ほど購め、俎に載せ庖刀にて細かに截り、鍋に一升ほどを加へ、中火に架け、沸騰したれば削りたる鰹節三十匁を投じ、一二回沸騰せしめて直ちに刻みたる味噌を加れ、箸にてかきまはし、鍋を下ろし毛篩にて漉し、鍋に移し其少量を小鍋に取分け、右の茄子を投れて下煮を爲し、程よく椀に盛り、汁を注ぎ入れて供す、吸口には水とき芥子を滴し込むべし。

○鯔の片ぎ身(同)

鯔を購め、頭の方を左に向け置き、表裏の鱗を庖刀にてこそげ去り、頭を截放ちて腹部を開け、腸を脫き去り、腹肉をよく洗ひ、再び俎に載せ三枚におろし、腹骨をとり肉の方を上に向け毛抜にて肩の方の小骨をよく脫きさり、尾の方を左の手にて持ち皮を剝き、薄く小形に斜に片ぎ、ほどよく皿に盛り、山葵を水洗ひして庖刀の刃にてえぼを去り、さゝらにて青くなるほど洗ひ、おろし金にて擦し、右の肉を盛りたる前に添べし、亦注け醬油の製法は、醬油を鍋に加れ、中火に

架け、少量の削りたる鰹節を投れ、煮返しよく冷却して用ゆ。

○鯖の付燒(同)

鯖を購め、前條の手順に爲し腹骨を去り、二ツ截に爲し、二三本の金串を刺し、中火に鐵串亦は煉火石を向前に置き、皮目の方より燒き、三回ほど醬油を灌ぎ、燒けたれば板に載せ串を脫き皿に盛り、古根生姜を水にて洗ひ、皮を剝き薄く小口切に爲し、小鍋に酢少許と水少許を加へ火にかけ沸騰したる時その中へ投れ、二三回沸騰せしめて掬ひ上げ、直ちに水中にて冷却し少しく鹽をふりかけ、小なる器に酢を加れ、その中へ浸れ即時引上げ、酢氣を斷り、右の鯖に少量ばかり盛添ゆるなり。

○鯔の筒截(同)

前條の手順により頭を截去り、八分ほどの厚さに輪截に爲し、直ちに水中洗ひしながら指頭に腸を去り、水氣を斷り置き、鍋に酒五勺、水五勺、砂糖少量、その中へ敷笊又は細引たる竹の皮を加れ、その上に加れ、落ち蓋を加れ、中火に架け、四五回沸騰したる時醬油三勺ほど加へ、味の加減を試み煮終りたれば皿に盛り、おろし生姜を添へて供す。

○鯖の舟場煮(同)

前に除き置きたる鯖の中骨及び殘分の粗肉を細かに截り、ほどよく强さ加減に鹽をあて、暫時置きて鍋に水を加れ、烈火に架け、沸騰したる時薄く短冊形に截りたる大根を投じ、少時置きて肉を水洗ひなし、その中へ投じ、煮へたる時味の加減を試み、鍋を下ろし、少々の醬油を滴らし、酢少許加へ、椀に盛り出すなり。

【注意】落ち蓋とは、鍋の中へ落し加れる小なる鍋蓋をいふ、

▲理想の家庭(五號の續)

池田朝村

五　結婚後に於ける夫婦間の交際(續)

前回に述べました六種の原因を、猶綜合しますと、三種に約ります、即ち

一　夫婦間に起る問題を、總て理性の判斷――其判斷は當れるにもせよ、當らざるにもせよ――に依りて解決せんとするもの、

二　自己の意志の欲するが儘にして、毫も配者の利害、苦樂を顧ざるもの、

三　情の妄動するに任せて、毫も理性の判斷、意志の制肘の要を知らざるもの、

家庭不和の根原は、少なくとも此三者の一に歸するのであります。

偖、人には情に厚い人と、理性に富だ人と、意志の强い人と三種類有りますが、此中最も人に愛され、敬はれ、慕はれるのは、情に厚い人で有ります。

理性に富だ人は其行は實に完全無缺で、一言一行規矩に當て箝つて、一點非難の打ち處はありませんが、此完全無缺なる處が即、人類交際上の大陷缺で有りまして、斯ふ言ふ人は概して人の缺點を認容しませんから、斯ふ言ふ人に相對して居るとは、宛で冬の日に氷にでも接して居る樣て、五體が蹇んで少しも打解けるとが出來ません。

又意志の强い人は、概ね冷酷て、自己の利益幸福の爲には、毫も他人の利害得失を顧みません、又他人の艱苦不幸に對して毫も同情の念が有りませんから、交際して見ても、何等の愉快、何等の幸福をも享受するとが出來ません。

唯、情に厚い人のみは、善く他人の悲喜苦樂に對して、同情の念が盛で有り、また他の缺點を認容するに吝て有りませんから、互に衷心を披攊して、共に慰め、共に樂み、共に悲むとが出來ますので、斯ふ言ふ人に對して居るのは、宛ど溫かな春の光に浴して居る樣て、頗る愉快なものであります。

元來人が交際すると言ふ必要は、寂漠の苦を脫して、互に安慰を與へ合ふと云ふとに在るのですから、其間に冷かなる理性や、冷酷なる意志のみを働かせると言ふとは、大なる誤りでなければなりません。諺にも、旅は道連、世は情と申しまして、世間の交際には、情を以てせなければなりません。

併し、注意すべきとは、情と言ふものは、盲目的で有りますから、餘りに情の趨るに放任すると、其結果は、反つて恐るべきものとなります。情と言ふものが、常に法に適つた行動を執るものなら宜しいですが、そうてなくて、兎角條規を脫した行動を執り易いものでありまして、極めて純潔な善の動機から發動した情も、對象の眞相を観ぜず、其變化にも伴はないで、一直線に驀進すると、飛んだ結果を惹起すものであります、世間に情が過ぎて反つて人の怨を買たり。大切の子弟

を墮落せしめたりするのは、此結果に他ならないのであります。又此情には善惡二方面がありまして、同情、博愛、忠孝等は、其善なる方面でありまして、嫉妬、怨恨、不義等は、其惡なる方面であります。而して、情なるものが、常に善なる方面に於てのみ發動するものならば善いですが、兎角、惡の方面に於てのみ發動し易いものでありますから、交際上非常に必要なものてはありますが、餘程注意せんと、反つて交際の圓滿を缺く樣なことになります。

此情の妄動偏向を牽制して、善く中庸を得せしむるものは、理性と意志とであります、理性に依て、其情の善惡正非を判斷し、意志に依て其情の趨向を牽制して行く處て、其情は常に善なる方面に、規律ある行動をなして、人をして常に快感を感ぜしむるのであります。此點より見まするど、理性意志、共に交際上必要なるものでありますが、直接にして、而も重要なるものは、情であります。理性及び意志は、唯裏面に在て、情の傾向を支配するに止まるもので、表面に現はれて活動すべきものは、唯情のみであります。

偕、社會上の交際が情を以て結ばれざるべからざるが如くに、夫婦間の交際も亦情を以て結ばれねばなりません、冷靜なる理性や、冷酷なる意志を以て、夫婦間に起る問題を解決し樣としたら、其家庭は忽ち破壞されて了ひます。

（次號完結）



新刊紹介

▲新撰女子文範（五十嵐越郎編）内外出版協會發兌名の示すが如く新しく選擇されたる女子の文範なり、古きは紫式部清少納言より新しきは若松賤子樋口一葉に到る、各時代の女流の名文を拔き之れに簡潔なる註釋を加へたれば女子の文章を學ぶものにして座右に具へ置くには至極重寶なり、編者は餘り世に知られざる人なれど文章には造詣深き人なりと聞く（定價三十五錢）

▲月刊スケッチ（第五號）本號より體裁を一變し從來の横本形を菊版形にし殊に本號には三宅氏の繪葉書、外に諸家の洋畫、及び文士の創作數十編を載せ材料豐富なり本號に限り定價三十錢（本郷元町スケッチ會）

論文

日本女子大學教授　鹽井文學士選

人

○田舍

茨城縣新治郡高濱町東大橋　小泉はま子

見渡す限り一望の稻田蒋々として、天心は一に孤月にかゝつて、四方の山々は畫くが如く、茅屋の朦烟白くたなびきて、動かぬ處は、宛ら天地悠久を示すものではあるまいか。

田舍は實に神の住む處である、天地正大の氣の鍾まる處である、一國精華の働く處である。社會に田舍がなくなると、其の社會は全く無味乾燥で、國家から田舍を拔き去れば、其の國家は骨拔蹈になる。我れ等は田舍を愛するのである。我れ等は實に田舍の人情風俗を愛するのである。

肥馬一聲、靄然たる曉霧を破つて、高く天の一方に嘶く曉、三尺の草中、鎌を曳いて立つ牧童の、そも如何に爽快なるよ。夕には月を踏んで歸り、數杯の濁酒に晝間の勞を休め、幾椀の麥飯に飢ゑたる腹を滿たし、以て眠り、以て勤め、私慾を計るべき奸智なく、自利を貪るべき惡計なき農夫の、如何に潛如たるよ。比隣の悲しみは我れも亦悲しみ、自己の喜びは之れを他人に別ち、一村恰一家の如く、四隣擧げて兄弟の如きもの、亦之を田舍に於て初めて見ることが出來るのである。

彼等が無骨なる笑聲は、これ決して人に諛ふるものではなく、彼れ等が野卑なる言語は、これ亦決して人に誇傲するものにはあらず。彼れ等は倫理を解せず、人道の何たるを辨ぜず、而も公明正大の氣は彼れ等の間に存するのである。あゝ田舍は樂園である。

我れ等は田舍人士に對つて、飽くまでも其の特風を固守せよと勸むるものである。淫逸浮華なる都風の流行を追ふは、宛も自分達の本城を敵に奪ひ取られる樣なもので、これをむづかしく言へば、正が邪に敗れたといふ事になるのである。さるにても／＼、社會の樂園は田舍である。四季の風物、自然的の美をそなへたる樂園は、慥に田舍である、されば、自然的公明正大の

氣も、また實に此に集まるのである。あゝ此の樂しい田舍!!此の樂しい田舍には、どんな無名の英雄が住んで居るのでせう?無冠の豪傑が隱沒して居るでせうか。と筆をおいて天を仰げば、碧空高くして、一輪の皎月冷やゝかに冴えて居る。

（雨評）議論としては不完全なれど、景や情をまじへて書きたるところに味ひあるを以て、人とす。

秀逸

○綠陰隨筆

鳥取市鍛冶町五七　上山千重子

綠なす木の間に、ハンモック釣り渡して、讀書に耽つて居ると、偶毛虫の孵化した弱々しい蛾一つ舞ひ來て、小さい羽を詩集に休めた。彼れが前身を恐がつた私は、心よからず、輕く書を打つて、彼れが去らんことを希望した。併し彼れはすましたもの、一向驚いたらしくもない、勿論逃げやうとはせぬ。て、更に私は携へた扇子を開いて、件の蛾をのせ、ハッとはたいた。が、彼れには飛び去る勇氣はすでに無かつたらしい、パタリと地上に落ちた。實に私の行爲は少し當を失したかもしれない。然しながら、彼れは毛虫だ、植物界を荒し廻つた毛虫だ。私はまた大嫌ひで、一目見てもゾッとする。その恐い厭やな毛虫が、しばしのすごもりに、この樣な、かよはい哀れつぽい、充分同情すべきものに化したとは、一寸信じ得ぬほど差別がある。さきには永劫地獄に監禁すべきもの、いまは樂園に宥放すべきもの、大々的差異ではないか。さはれ、彼は容姿の變化に心も伴なつたろうか。即ち、心も姿の樣に淸く美しくなりしにや。私はあやしまざるを得ない。あの弱い痛々しい羽衣のうらに、恐るべき毒を包んでは居らぬか。いと恐しき前身を秘めて、最後の慾をたくましくし、詩人をたぶらかす曲者ではあるまいか……。とはいへ、彼れは瞬間に悟つて、神の御前に罪を悔いたかもしれぬ。私はさありたしと切望するのである。さらば、私は滿腔の同情を以て、彼れを迎へやう。斯く思ひおこした私は、ハンモックより降り、前の蛾を視ると、可憐や、



女學生風俗（其十六）

既に骸！日光の征矢を受けつゝはかなくなつてゐる。おゝ、彼れは遂に神に謝したのだ、懺悔したのだ。私は、一掬の同情の涙を拂つて、花さく小草の根に葬つた。ア、悟るに鈍く改むるに吝かなる世の罪の子よ、何ぞそれ、毛虫にしかざる。噫!!

（雨評）論旨も文も幼し。たゞ叙事を以て說きたる趣向の僅に見るべきのみ。

○現社會

伊豫　俊子

陰雨人を苦むること連日、鬱悶遣るに由なかりし日も、何時しか過ぎ去り、爽快の日と成りし今日、或る一小山頂に青草を茵となし、以て、綠雲十里の田野に心を放ちて、一日の快を味ふ妙齡の處女二人あり。一を百合子と云ひ、一を淸子と呼ぶ。

百合子「淸子さん、あのね、先日あの法學士が私に是非にと云つて結婚を申し込んだのは、やはり此の山頂でした!!」

淸子「そうさね、百合子さん、それはその筈ですよ、あれ御覽、此處からは、あなたの御父上さまの田畑が、すつかり一面に見えて居ますもの」。

嗚呼、今此の二女の會話を聞くもの、何人か悲しまざるを得んや、罵らざるを得んや、泣かざるを得んや、噫、現社會はかく迄腐敗を來たしゝか。身は自由の位置にありながら、人の財產の爲め、自ら結婚を申し込むとは、あゝ何たる事ぞや。然れども、これ只現社會の一例のみ。今や公德地を拂ひ、目前の小利に一身を左右す。

あゝ、現社會は、萬事往くとしてこれならざるはなし。實に觀じ來れば、悲しい哉。

（雨評）二人の對話をかけ來たれる趣向は一寸面白し。されど、論も筆も共に足らず。

○德鏡

福島縣　隈　水

德鏡とは何ぞ、此は實に文明の利器なり。而して、此の德鏡なる鏡は、決して人の面貌の醜惡を映ぜしむる者にあらず。吾人は之を持ち來りて、現今の腐敗せる道德界の醜惡を映ぜしめむとす。請ふ、如何にして映ぜしむるかを見よ。

序幕に顯はるゝは現時の人心の名譽を得むとするの心なり。然り、吾人は名譽を渴望す。然も、正當なる手

段に於て得むとを望むものなり。然れども、世人の名譽を得むとするものは、正義の許に活動せるか。德鏡に映ずる處によれば、正義も正義、頭に不の字を頂けり。嗚呼慨嘆。次に顯はるゝは巧利に走るの心なり。然り、吾人は利を得むと欲す。然も、正當なる勞働苦心の報酬として得ん事を望む。然して、世人の之れを得むとするもの、果して如何。德鏡に映ずる處を見よ、皆覆面主義。欺僞主義、實に口に言はむも忌はしき所爲あるにあらずや。第三幕に顯はるゝは快樂を得むとする心なり。然り、苦悶夥しき此の人生に於て、吾人は大に快樂を得ざる可からず。然も適當なる苦境を經たる後適當なる快樂を得むを欲す。世の人果して然るか、吾れ之れを掩はむとするも、德鏡は聽かず、歷々として世人の不義を暴露せり。嘆又嘆。終に顯はるゝは、最も忌むべき現今の社會に於ける動物的欲心なり。人動もすれば戀愛を口にす、彼等の言ふ所をきけば、戀愛は神聖なる限り差支へなしと。其の言やよし。然れど、德鏡に望め、彼等の心は次第〳〵に角を生ずるにあらずや。嗚呼慨又慨。

吾人は德鏡に於て世の醜態を映じ了りぬ。而して、此に一言せむとす。今の世の人、不潔面にあれば之を耻づ、心如何に不潔なるも、聊も耻づる所なきが如し。人は朝に夕に鏡に對して容姿を裝ふ。然れども、德鏡に向つて、其の精神の不潔を拭除するものあるか。之れ吾人の嘆惜措く能はざる所なり。請ふ、諸姉、朝な夕な德鏡を離すなく、玻璃鏡と共に懷ろにして、面の不潔を拭ひ、容姿を裝ふと共に、精神の曇りを去り、以て精神及身躰をして隈なき秋月の光の其れの如くせしめられむとを。

（雨評）これも趣向は一寸面白けれど、筆は未た大に練熟を要するものあり。



女學生風俗（其十七）

○平家

三河　澤田霞溪女史

予は最平家を好む。其の好むや、民族的關係あるにあらず、源氏を惡める反動によれるにあらず。其の平家一代が悉く詩なるによりてなり、其の一門の實に劍と

花との美はしき性格を具へたるによるなり。

ああ平家一門一代の盛衰は、悉く詩を以て表され、其の家庭の成立は、一般に芳しく清く切なる戀より來れり。殊に慘憺たる其の末路は、平家の總てをして、詩の最高調に上らしめ、遂に長篇なる敍事詩をなさしめたり。其の都落ちの何ぞ詩的なる。あした西海の浪に漂はんとする一門が、榮枯の夢さめやらぬ福原の故都に、今を名殘と催せる管弦講、如何に其の悲劇なるかを見よ。玉つき矢折れ、而も最後の運命を、日の丸の一扇に試みたる、其の心情を思へ、而して一門悉く海に入りて、名門の終を濺した末路を思へ、眞に慘の慘、美の美、詩の最も悲愴凄婉なるものにあらざるなきか。

加ふるに、平家は詩人に富みたりき。憶ひ未だ分ざるに、心を暗憺迷ふ夕雲に馳せ、屍と朽ちん詩巻を懷ひて、故師の館に止めたる忠度あり。千鳥なく須磨の浦に、明日をも知れぬ露の命を、青葉の笛にこめて、月に思ひをやりし敦盛あり。あるは、出陣の曉に、琵琶を明神に納めたる經正、孤館に囚虜の詩を吟ぜるの重衡等、數へ來れば遑あらず。然して、彼等詩人は、戰陣の間に風雲月露を弄し、其の遺骸の多くは、詩巻樂器と共に横へしなり。然して、斯る詩人に富める平家の家庭は、常に切なる戀によりてなれり。見よ、彼等の未亡人は剃髪染衣の身となれり。ホーム快樂の失墜は、維盛の絶望的漂泊失踪となり、通盛の戰死は、其の戀人の入水を來せり。平家はかくも所謂美花を自己の胸に飾れり。而して、平家各家庭が、清く芳しく單一純粹にして、源氏の如き暗黒なる政治方面に關せざるをあらはせり。

要するに、平家の一族が、純潔優美なる性情を有し、而して、其の性情の爲めに、大に品格を高め、一面貴族的なると共に、一面武夫的にして、其の右手に劍を、而して左手に花束を握りしは、平家一代の盛衰をして、遂に高調なる詩を終らしめたる所以なるべし。

（両評）平家一代が詩なりといふ一點は、我れも贊成なりと申すべきのみ。

◎瞬　間

福岡市外赤坂の里　美江子女

瞬間!!　さなり、儚さは瞬間！　貴さも瞬間！

翠したゝる柳の葉末に宿る白露の、颯と川風にさそはれし刹那、そが即ち瞬間なり。

夜の色は漸くうすれゆきて、東の空ほの／＼と見ゆる

もしばし、刻一刻移り變りて、五色七彩雲は走り、雲はみだれ、雲は湧き、雲はやぶれつ、やがてそのむらだつ雲を排して、萬條の金モールを突如と投げ出す瞬間、そは人をして絶美の偉觀と叫ばしむるものにあらずや。嬉れしきは、魔の手放れし鋭き毒矢に、柔胸射ぬかれし小羊の、ふと救はれて、牧人の手に抱かれし瞬間。

愛らしき小女、父の戰死を聞きて、かたみのうつし繪かい抱きし瞬間、鈴の眼よりあやしうもれ出づる一雫は、げに白ゆりの露よりも清く美しきものぞ。

手弱女が掻きならす秘琴の調、一しほ美妙に響く瞬間は、鋭き斧ふりかざすまがつみをして、うなだれしむるにたる。

曉鐘鎬となり渡る瞬間は、希望と慰藉の福音を傳ふるもの、夕鐘幽かに暮靄をやぶる瞬間は、衰と滅、暗黑と死の影を示すもの。

勇ましき軍神中佐が死出の瞬間。

あはれなるは、夕日全く沈みて、彩雲漸次色を失ひ、下界黄より灰、灰より闇と次第に移りゆく瞬間。そは名利に迷ひ、黄金に花の香に狂ひうちまどろむ罪の子が、露よりもろき運命を啓示するものにあらずや。

あゝ慘い哉瞬間、尊い哉瞬間!!

(雨評)すべて今一人の文にて候。


女學生風俗(其十八)

○犬猫論

備前　松本茂登

卑屈なる家畜あり、猫といふ。飢うれば、臺所に入つて魚肉を盜み、飽けば爐邊に横つて眠る。犬の如き强者に逢へば、背を高くし牙を鳴らし、以て、虚勢を張り隙をなみて、こそ〳〵と逃げ出し、鼠の如き弱者を見れば、忽ち跳りかゝりて、捕へ食ふ。又よく人の顏色をうかゞひ、咽喉を鳴らし目を細うして、膝による。靜かに見よ、其の目は一見温順なるが如しと雖、又一種猛惡の相あるを見ずや、馴れて膝に眠る小猫の足にも、恐ろしき爪の隱れあるを見ずや。然も人に愛せられて、高樓の裡、殘肴に飽きてあり。

眞率にして愛すべき家畜あり、犬といふ。主人に從て、鳥獸を追ひ、以て主の獲を助け、夜は家を守つて盜賊を追ひ斥す。饑餓につながるゝも、敢て其の非を訴へず。主人を見れば、尾をふり、耳を動かし、遠きより躍り來れば、出てゝ迎ふ。昔より犬の人命を救助したる美談少なしとせず。斯の如く忠實なる犬も、人に疎ぜられ、居食共に地下に於てす。前者は奸猾、後者は忠實。之れを男と女に見れば、後者は男性にして、前者は女性乎。

新體詩

東京女子高等師範教授尾上文學士選

天

○深林

長野市狐池一八　安孫子美子

虚飾を忌む詩の神が　此所を永劫なる我が領と
壯嚴の靈集め來て　太古の影の崇い哉。
『人の子入らば犧牲たらん』　神いかめしき宣言に
幹に匂ひの斧絶えて　蔓いたづらにからみ行く。
巨人と仰ぐ松、檜木、　其冠首を震はせて
天飈の矢に抗ひては　斬蛇の劒のひゞきあり。
紅に紫莖細う　姿を媚ぶる花もなく
立てり六尺濃綠の　草こと〲く雲を生む。
怪鳥さつと舞ひたてば　暗より闇に夜は明けて
あゝ幽深の森の朝　山氣冷たく骨を刺す。

一讀幽怪の氣肌に泌するを覺ゆ。老手、老手。

地

○金魚の賦

陸前米岡小學校內　鈴木幸子

裸の天童が水浴の浪に結びし靈の泡
凝りて成りけん瑠璃壺や八分堪へぬ岩清水
青藻を卷いて鰭振れば眞夏の光零れ來て
古錦襴緋の輝きに小魚の女王と踊るなり
眞珠の冠被ぎつゝ魚はもとより姫なれば
袖嫋やかに裾たわに今嬉樂の衿りかな
留守居閑なる晝の興金魚讃ずと筆とりて
（罪の終焉に光明あり轍の鮒の末裔に見よ）

語々奇警あり。句々光輝あり。

人

○夜

德島縣勝浦郡多家良村大字八多村　大久保桂子

萬籟暫し聲秘めて、
疲れたゆたふ日の影は、

西のみ空にかくろひて、靜に月はうかびたり。
闇にと向ふ物象の、善きも惡きも隱れては、
詩人筆を口にして、夜半のけしき靜なる
夢よりさめて夢に入る、時の小車、めぐりつゝ、
紫匂ふ曉の色の、いづくともなく動く哉。

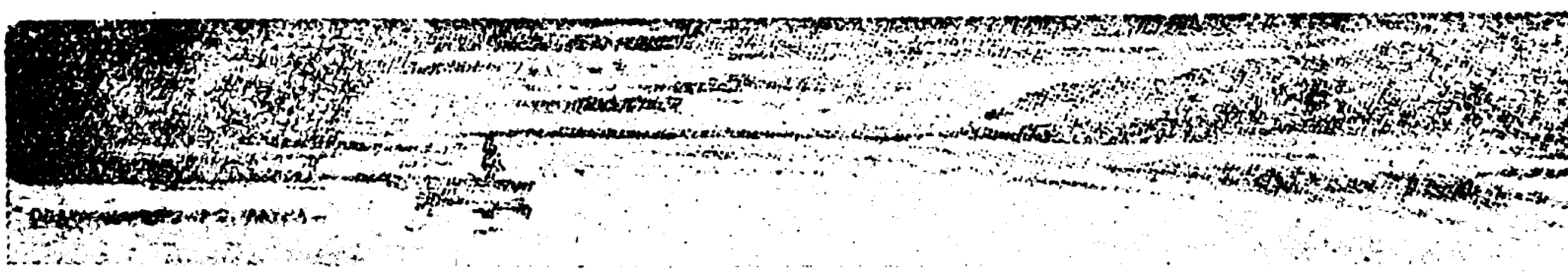
結句妙甚し。時の車は君が名を乗せて世に出てしめむ。

秀逸

○病床

小石川　服部けさ子

病んで二年うらぶれの、身は瘠たりなしかすかに、
もろかる命もろからで、世は又こゝに蟬のころ。
紅なでしこの露ふくむ、五月雨に晴れつばくらの、
ぬれ羽きらゝゆきかひ、われにはつらき眺め哉。
そよ乳母が脊に紐結ひの、その二十年はふりにしよ、
繪日傘かざす野遊びに、つかれてねむる花の床。
母とよばれし十八や、物皆香る桃のはる、
來る日ゆく日も悦びに、永き短き世はゆきぬ。



藥になれし病床を、問ふ白蝶のなつかしさ、
オゝ我が頬にむつれよ、よりて惱みを吸ひゆけな。

佳句纍々として出て、涙痕また紙上にあまれし。

○紅蓮白蓮

三河　霞溪女史

むらさき匂ふ曙の、星またゝきの池の面や
啓示をつゝむ唇の、炎ともゆる色彩に
紅蓮香り高うして、人は狂へる色と見る。
夕べ女神の惠みもて、輝きわたる瑠璃の座の
雫をたぐひて新なる、生命の水に根ざししか
白蓮聖く薫りして、人靈妙の花と見る。

前者は麗。後者は清。

○雲の賦

徳島市　佐藤きん子

天つみ空をみあぐれば、希望の平和みちみちて、
碧色の蒼穹に仄の見ゆる雲は七彩虹の如。
紫―黄―紅雲や、或るは白色、或るは瑠璃、
鳶色、樺と亂れつゝ、美しきは夏の夕の映。
彩る雲を偲ぶれば、愁憂浮きたつ紫や
黄は悲絶しむ色ありて、女神の如き紅雲は。
美人や臙脂を流してし悠々たりや白雲の
中の瑠璃には笑洩れて怒憤彷徨ふ鳶の色。

慨きの樺や興ありと　思へばいつか暗のかげ
消えて儚き大空に　夜の扉は下りたり。

紅黄紫白相和し相混じて、五彩燦爛。

○磯くれて　大阪　あい子

うすゞみの繪にも似たる、君ゆきし濱べ松原
只ひとりさびしと言はじ、夕暮を友もなけれど。
磯くれて誰が子の笛ぞ、ゆかしきは千鳥のふしよ
砂路ふむ足も輕げに　汐風ぞ袂を拂ふ。
うつろへる月もおぼろに、夏の夜の小波よせ來る
限りなき浪路の果て　思ひなき思あるかな。

簡淨の中に味あり。

○夕暮　神奈川縣　小野雪枝子

一日の務なし終へて、自然の胸にやすらへば、
牧場につたふ草ぶえの、聲より暮るゝ草のくに、
あゝ世の人よ夕ぐれの、聖けき幸をなにと知る。
天にはにほふ愛のいろ、地にはねむる暗の影、
天地にみつる平和は、げに夕暮のめぐみなり
あゝ世の人よ皆ともに、この樂園にあそべかし。

清麗の氣みち〳〵たり。

○蝶　越後　三浦美以子

塵の浮世に人の子の　苦き憂に泣かんより
春永久の夢清き　胡蝶となりて麗はしき
花のしとねに眠らばや、
富も望も煩も　憂も知らぬ汝が風情
朝清けき春風に　花と熟睡の夢さめて
醉ふや情の露甘し
言はず語らず笑まざるも　彩羽ひろげて輕やかに
鳥なく空も花の野も　思のまゝに飛び狂ふ
汝がたのしさやいかならん

やさしの願とやいはまし。

○見返り柳　紀伊　木村とし子

何やさしげにさやぐらん　何かる〳〵となびくらん
けがれし戀に溺れよと　人呼び招く玉やなぎ」
きぬ〴〵をしみ歸りきて　身もたな知らず浮れ雄が
袖もて枝にふるゝとき　絶えずさゝやく聲や何」
闇より闇にさそはれて　夢に夢みるうかれ雄は
このひと度の罪に　犯す罪ぞもいくばくぞ」

いつ迄かくてさやぐらん
　いつまでかくて靡くらん
親より子孫とつぎ〳〵に
　人をけものとかはらせて』

やゝ道歌めきたれど、字句煉熟せるところ捨てがたしし。

○厭世詩人に

愛知縣　平野樂華子

捨てぬ浮世にすてられて、
　さとりがほする歌人よ、
心からこそ花ちらす、
　風もつらけれちる花は、
又こむ春も咲かざらめやは。
夢とすてたるこゝろにも、
　鴫立つ澤の夕まぐれ、
秋はさびしと詠めけむ
　捨つべきよかはいざや君、
希望に滿てる歌うたはなむ。

勵し得て力あり。

○名なし川



日比谷公園運動場

栃木縣　前澤さく

晨に花の香をうかべ、
　夕に月の影やどし、
いとも優しく囁きて、
　ゆるく流るゝ名無川。
淸き調べのあるところ、
　そこに平和の響あり、
つきぬ眺めのある所、
　そこに自然の力あり。

やゝ、平凡なれども諧調。

○淸水

神田區　山本富美子

園生の淸水流れつゝ
　君がみ池に落ちゆかば
花の姿のうつるかと
　濁しもやらぬ我が心
中の柴垣ひまあらみ
　流れてくゞる眞淸水に
せめて一夜は身を捨てゝ
　君と相見むすべも哉。

情緒纏綿。

〇夏の小川　　福岡　廣瀨美江女

岸に微笑む白ゆりの、　け尊きかげを寫しつゝ、
あした讃美の譜を歌ふ、　夏の小川の清きかな。

綠滴たるゝつゆ草に、　集ふほたるを與じつゝ、
夕べ歡樂の曲たかき、　夏の小川の清き哉。

露の運命の幸なくて、　零時の榮華に迷ひては、
憂愁煩悶に狂ひ泣く、　人は愚かの子ならずや。

夕べの虹のはかなくて、　僞多き泡沫の、
浮世の濁浪は逆卷くも、　永久に清かれ夏の川。

統一は欠けたれど、語句精練。

〇天に　　土佐　秋月廣江子

星に希望の影ひそみ　月に無限のさとしあり
憂のあした眺むれば　雲のかよひもたゞならず
行路の難に疲るゝ時　すゞしき雨の降るあり
運命うすきを嘆つ身に　露はやさしき慰藉なり
けがれし下界に慣る　肩に降り來る雪清き
あゝわれ遂に人の子と　弱き涙は示さゞれ
天のめぐみに滿ち足りて　感謝のうたをたてまつれ

彼の怯懦なる者を激勵して、餘あり。

〇花の露　　日本橋　遠本蓮江

宿世は彩の天の星　直衣かづき太刀はきて
月の宮居にさむらへし　若き公卿の身なりしが
ひと夜宿直の其みぎり　綠小草のみ簾ごしに
下界には惜しき百合姫を　ひそかに垣見まゐらせて
頓に下界を戀ふ思ひゆき　そゞろ心のとめかねて
み袖に眉はおほひつゝ　嫦娥の御門まぎれしが
さて曉となりぬれば　甘きさゆりの靈に汁
天にかへらん神術を　醉ひてこと〳〵忘れけり
さは月姫のみとがめに　光も彩もうばはれて
永久に冷たき地の世の　花の露とはなりにけり

散文的なれど、着意甚佳なり。

〇雛の戀　　石狩國　佐々木まさ子

緋桃くんずる雛壇の　淡き灯夢のごと
金の屛風に照り榮えて　文箱の蒔繪艶なりや

今日を主の少女子が　思をつゝむふり袖の
かろくさわりて箱のひも　とけてこぼれぬ戀の文

誰が子の業と問ふ勿れ
　耻も鬢も十六の
少女の頰にきざし來る
　胸の血しほの色に見よ

雛の夜たけて桃酒の
　甘き匂の薫じては
むねのさわだちおさまりて
　うれしき笑ぞ浮びくる。

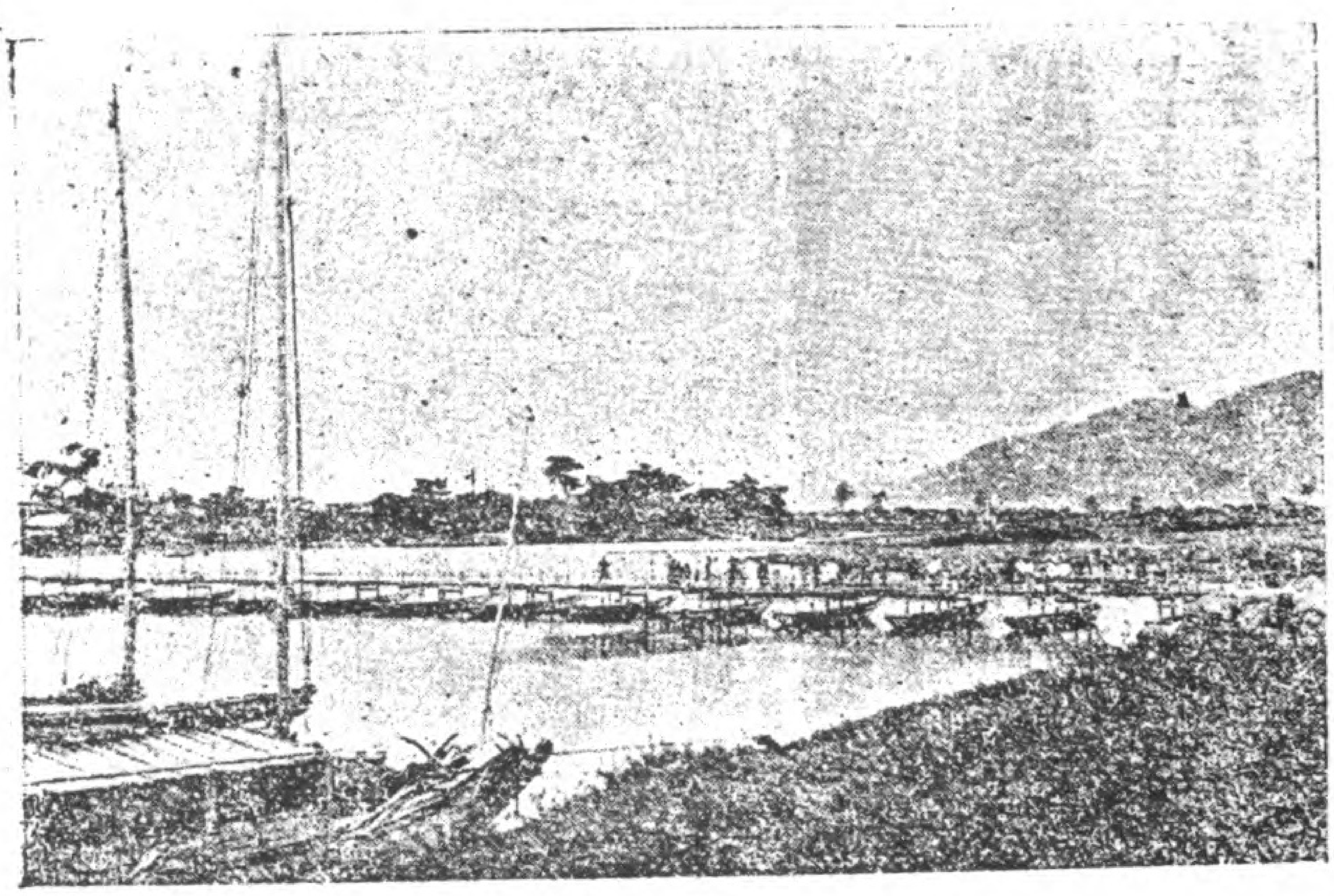
雛と少女と相映發して、艶麗比なし。

○泉
廣島縣　堀田溫子

瑠璃の液たゝへし甕
　夏姫が粧ひの鏡
底に輝る白銀の珠

この泉、さても昔　月姫の綠髮すら〱と
玉櫛の、底に沈みぬ

戀衣、姫はかつぎつ
玉櫛のひゞきを求む
浮舟に銀の波わけ


肥後球磨橋

玉碎け千々にゆらげば
　いぶかしみたゆたふや
香り高き百合の一本

想深く語高し。たゞ惝怳して、云ひ盡さゞるが如き風あり。

○君を思ひて
麹町　重田春子

星の光に似通ひし
　眼無言の戀語る
さうびのにほひたゞへたる、
　口は愛說くそのおもは。

靜けき月の影うけて、
　君がうたひし須磨の曲、
うれへを胸に抱けばか
　しめりやさしきその聲音。

もとより天使にあらざれど、白き双翅を背におひて

百合の冠に笑み清き、　人の子ならぬその姿
夢と化すべきうつし世の　位や富や名や榮や
あゝ何かせん只我れは、　君がみ前に膝折らん。

少女の美を賛じ盡して、筆端光華あり。

○水車守

茨城縣　石塚靜江

廻れよ廻れやよ水車、　廻りてやまざれやよ水車、
汝は頼みの世渡るたつき、　夫がかたみの汝水車。
六年をここに此の山岨に、結びし夢は早やとくさめて、
柱にかけし遺髪と寫眞、　かへせ昔に賜へ一言。
さ云へ皇國の爲とぞ散りし、旭櫻男われとて如何て、
日本の妻なり徒には泣かじ、愛子育てん汝をば友に。
春まだ寒ら霜夜の鐘は、たえ〴〵響きて灯はうするゝ、
夢みて泣くか父を戀うてか、おゝいじらしやいじらしや吾子。

水車、尋常の水車にあらず。作者また、普通の婦人にはあらざるべし。

○夕立の後

下谷區　太田らく子

鳴る神もおどろ〳〵に、　地は震ひ草木はさけび、
世を暗に染めなしたる、　其驟雨、今晴れたり。
雲全く影をさめて、　肌に通ふ大氣冷か、
若葉に宿る名殘りのつゆ、日に榮えて美しくきらめき、
くれなゐに燃ゆる撫子、　花皆地にうつむけり。
涼風に風鈴鳴れば、　蟬の聲早聞え初むる、

うつし得て妙と云ふべし。

○文箱

横濱　小峰園子

浦の子が物語り、　玉の手箱のそれならで、
言葉少なき吾夫の、　思ひ秘めたる古文箱。
おのれ彼地のいくさにて、果てしと聞かばお身が手に。
披き見よやと宣ひて、　書き遺されし玉章の。
中に籠れる謎や何、　筥見るごとに胸の轟く。

着想妙。字句の精錬を欠けど。

○妾ののぞみ

羽後國　鈴木きさ子

空とぶ鳥のわれならば　み空高くもとびめぐり
この塵の世をのがれいで　君が住居をおとづれむ
空吹く風のわれならば　木末たよりにさわ〳〵と
君がめでますそのにはの　松ふく風となりぬべし
流るゝ水のわれならば　近き小川の水となり
日ごろこひつる戀人の　やさしのみ手にむすばれむ

頽欹多かれど、あしからず。

○朝の海

金澤市　大地なみ子

怒濤收まり雲晴れて　敵艦見えぬ日本海
西に東に往來する　御旗の船の舷を
靜にたゝく浪の音。
平和かざる雲の彩　希望にみつる朝日影
天地永久に幸ありて　歡樂謡ふ小浪の
又も靜に打つや舷

結句趣致あり。

○古城跡

信濃　帶刀きさへ

春遊かんとして雨蕭々　空は曇りて風啾々
落花空しく泥土にまみれ　麥秀萠えず炎は深し
殘壘くづれ濠は淺み　蓬植えられて礎蔽はる
五層樓臺空しくあれて　瓦は飛びぬ柱は朽ちぬ
昔月みし其うてな　今蝙蝠の住家とかはり
むかしの榮の夢やいづこ　劍戟の聲今やいづこ
春の暮方われ來り訪へば　路の葉に注ぐ雨淋し
哀れを止むる句碑一つ　只草の中にのこされぬ
夏草や武士が夢のあと。

○僧

磐城　佐川繁子

青葉蔭なす鐘樓に、　夕日は落ちて暮れんとす、
厨屋を出てし雛僧は、　ひとり鐘樓の欄に倚り、
何をか愁に沈むらし。
夕をつぐる安息の、　鐘を野に聞く人の子の、
踊りて温き閻浮の、　遊に醉はんと急くとき、
雛僧深き痛あり。
あゝ人の子は垂乳根の、　歸れば温き膝により、
常世の夢をむさぼるを、　花に蝴蝶の醉ふとせん、
さらば幸なき己が身は、　櫂なく漂ふ小舟かも。
あゝ日は暮ぬ夜となりぬ、　あゝ歸らばや歸らばや、
歸りて坊に待ちまさん、　深き情の師の僧に、
待るはわれの務めにて。

○斷琴

名古屋　中平ふみ子

朧月夜の春の宵、　散りしく花を茵にて、
我は小琴に君は笛、　調に醉ひし樂しさも、
あはれ胡蝶の夢なれや。
明星消えし秋の夜半。　奥津城深く君入りて、
我世の戀は醒めはてゝ、　笛は再び調なく
小琴の絃も斷れはてぬ。

○わが心

金剛山　備かをる子

安けかれとてむすぶ神　授け給ひ我運命
只いとはしと世をさけて　こゝ葛城の山麓
百合よすみれと狂ひしも　あはれしばしか春秋よ
詩人ならぬあゝ我の　いつまで白然の樂しきぞ
想冷たき胸抱きつ　仰ぐみ空に雁一つ
古巣につきやまつらんか　翼もかろく一文字
思いぞ出づる春の宵　情けあふるゝみことばを
きく我胞はとゞろきて　あやしかりしはわが心
みづからすてゝすてられて　浮世に恨みは殘らぬ哉
今更君の影戀ふる　さてもあやしき我心

敍事文

日本女子大學教授　鹽井文學士選

特別第二賞

○繪日傘

三河西鴨郡石下瀬村　白菫女史

坊やは良い子だ寐んねしな‥‥さても眞晝の夏の暑からんを、歌聲床しき子守兒の、小さき背汗に霑はせて、あかぬ色の花染かたびら、細帯の藤紫に結び、百合の花咲く里川堤を、描く紅の繪日傘、かたむけて辿れる優しき」眞白に清き麻の單衣につゝまれて、子守る乙女の背の上に、幼兒は安らかに眠れり、岩も石も溶けつくさん許りあらたけき日神のみ光は、繪模樣可笑しき日傘の上に輝きて、染めし紅も湧き流れんとすなるを、そが投げし小さき丸影は、豊かなる幼兒の夢を守りぬ、閉ぢたる眼、小羊の和げるまなざしつゝみて、紅梅の莟の如き唇より幽なる寐息もれたる、あはれその夢、紫にか紅にか、遊べる魂は傘のいづこぞ。

蜻蛉一つ繪日笠の上を舞ひぬ。

ふと乙女は止まれり、夏瘦せし流れひた〳〵と、野薔薇の緣り洗ふほとり、星の如き百合手折らんとにや。

やがて雪より白き花片、古代紫の如き花紛、ふくらかに開ける一莖は、嬉しげなる少女の胸に抱かれぬ、そが高き香の醉心地に、そと幼兒が羽二重の玉の頰に花片を觸れたる時、夢如何に香しかりけむ、花の精ぬけ出でて、優しき胸に通ふと思しく、小さき拳幽に動きて、豊なる含笑みの頰の凹み、少女は顧りみて、同じ含笑みをこぼしぬ、百合の香高うくゆりて、繪日傘のめぐり漂へり、移り香やいかに床しからむ。

かくて乙女は、百合の香の醉ひ心地に、野に群る赤き蜻蛉の數々を、右よ左よと傘の招きに可笑しう追ひて、そが紅の繪模樣の、柳に見えず隱るゝまで、里川堤辿り行けり「坊やは良い子だ寐んねする‥‥哀れ優しき子守歌の一ふし、そと傾けの繪日傘よりもらして‥‥。

（雨評）促りて其の材料、先づ趣味あり。うつして其の情景、また趣味あり。ゑがきて其の詞の色、また趣味あり。今回の投書中、殊に優れたるを認む。こゝに特別の地賞に選ぶ。

天

○家路

東京小石川區宮下町六〇、佐相方　室田　たもつ子

いつでも寄る中原の掛茶屋に、今日も休んで、例のお婆さんが、飾らない愛嬌と共にさし出すお茶に、先づ渇いた喉を濕した。店の前は、富士を一目の青田續き、赤い襷の娘達や、意氣な頬被の若衆連が、曲面白い何やら節に、田の草をとる所、宛で繪の樣な景色。そこを渡つてそよ〳〵と吹いて來る風、塵の都には得られぬ凉しさである。今迄こゝに休んで居た馬子が、手綱を緩く引いて出かけた。姿に似合はぬ優しい聲で、馬子歌一つ、餘韻を長く歌ふと、凉しい鈴の音が、之に和して、綠色濃き松原を彼方に、一歩一歩微かになつて消えて行つた。話好のお婆さんが、村の若衆の話やら、さる嫁子寮の噂やらに、思はぬ時を過した。



お婆さんのお世辭を後に、車は走り出す。今の松原を通ると、木の根に腰かけた草苅少女、松の葉もるゝ風に凉みつゝ、後毛を掻き上ぐる風情、中々にゆかしい。そこから二里程で、懐しい故郷の村境につく。道のほとりの草深い所に立ち給ふ地藏尊、そこゝに苔は蒸したが、何願うて誰が何時献げしか、新しい涎掛を召して居られる。こゝから家迄は二十分路。ゆかしい道、思出深き道、趣味多き道を、車で過ぐるは餘りに興がないと思つて、荷物丈は先にやつて、自分は下りて歩いた。あそこの森、こゝの川、鎭守の社やら、昔馴染の家やら、行くがまにまに見え、見えるまに〳〵感想は湧き出る。昔ながらのさゝめきを囁いてゐるいさゝ小川に沿うて、夏草繁き小徑を、右に折れて、橋一つ渡ると、三段程の青田の向ひこんもり茂つた森の中に、我が家の藏が白く見え、蜩の聲が我に急げと鳴いてゐる。近徑の田圃つたひ、裏から

行くと、表門の榎の陰に居た可愛い妹の八重ちやんが見付けて「アレ姉さん！」と叫んで、赤いリボンと白い袂をひらめかして、飛んで來た。

（雨評）筆路よく滯らず隙なくして心地よく、ゆかしき家路の情景躍如したり。天とす。

地

○十五夜

赤坂區檜町　森ふさ子

待ちかまへて居た三五の月は、やう／＼向ひの林の梢をはなれた。夕の俄雨は、程よく青葉をぬらして、心地よく晴れ渡つて、空には一點の雲もなく、恰も波靜かな海原のやう。今夜は、月姫の御食料のお餅も、下界に澤山供へてあるので、兎殿も休んで居るらしい。都で見た月と同じ月ながら、あたりの景の靜かなせいか、月色殊更佳く見ゆるのは、はた滿月のためか。あゝ、山里の月は特別である。近所近邊の草屋根の家々も、此の伯母の家も、皆昔の風にならツて、黑く光れる椽先には、白團子うづ高く積み上げ、其の左手の方には、すゝき、尾花など、雨晴れた此の夕、田畑のほとりで取つて來たばかりの、風吹けば露まだこぼるゝ勢よき草々、大なるかめに、あふるゝばかりさしこんである。庭つゞきに茂る柿の實の、まだ熟さぬのも、明らかによめる。仰げば、もう月は空の眞中に高く上つた。今は天も地も人の心も清く、何一つ汚れたものなく、我が心まるで別世界の詩人にでもなつたやうな心地。北の窓の月はと、戸をおし開けば、玉のやうな冷風が、先づ吹き來んできた。廣々と小波打つ沼は、果しもないやうに見え、あしの葉は、右に左にゆれて蓮の實の朽ちたのが、ふらふらと動くのも、哀れ深く覺える。明月の其まゝ水にうつつて居る樣、水中の天とも云ふべき又ない風情。戸を開けたまゝ、又東の入口に立てば、美しいかな。柳に黄金の玉をかけたやう。前の田、後の畑の千草に宿る虫の聲細く、身の哀れを告げて居る。家内中話に花咲き實がいり、夜の更けたのも知らなかつたが、だいぶ更けたらしい。月は小さく、屋根をこした。あたりは虫の音ばかりで、森として居る。近所の家々で、戸をとざしたのは、今しがたと思つたが、オヤ、あれは一番鳥か。

（雨評）文また、十五夜の月色の如く、涼しく氣もちよくおぼゆるものがある。オツトちと賞めすぎた。地とす。

人

○我が住家

牛込早稲田鶴巻町四一八　小島濱子

花を植うるには餘りに小さけれ、さりとて、吾が好める儘、雛鶏の數多くを放ち飼ひにして、餌をやる折りに、ひよ／＼と集ひ來る樣は、面白くもありて、此の十坪の庭、さのみ小さき思ひあらず。此の頃は、一本の梧桐の蔭深う茂りて、況て露の玉ちりまどふ朝、ゆふべ蛙聲しきりに聞ゆる時は、氣清くして仙閣のごとし。蠶かふ女の、日々、背戸の畠に、桑の葉摘みながらの鄙唄低くうとぎれ／＼にやさしう聞ゆる折りは、河鹿もこれに和するなり、學びのや休みの毎に、まづ來たりて父母の愛をうけ、弟妹に侍づかれて、樂しき中に日を暮らすときは、都に出でゝ苦しみたりし事も遺れ去る。あゝ實に樂しき吾が住み家かな。

八王子在、山深うして冬寒きところ、淸らけき多摩川に架せる長橋を打ち渡りて左、桑畑一里の原のかたほとり、さゝやかなる生垣を圍らして、雛鶏の聲長閑けく漏るゝ家、そは吾が住み家なる。

（評）あつさりとしたる筆に、のべたる事がらの順序に、一種の趣味ある文といふべし。入とす。

秀逸

○あはれ翁

相模逗子　濱の子

今しみちくる潮の千年のさゝやき聞くやきかずや、岸邊の白砂をしとねと座して、物おもはしげの翁ひとり。半幅と夕暮の色に包まれて。友におくれし孤鴉かなたの山に急ぐ影うすく、半幅は夕映火の如く輝きて、默せる翁の片頰を射る。さはれ、其の光りや、將に消えんとする最後の光りなれば、鮮なれども力なし。此の光をうけたる彼の翁の、骨いとたくましげにはあなれども、何處さだめず見つめし眼には、希望の光りまたく失せて、胸に魂の殘れりや否や、それだにいとおぼつかなし。

濶空の色を照り返して海の面。いつしかと薄らぎ行けば、早やも宿しぬ、さすかなる宵の星かげ。暗は總てを包みつ。

されど翁はたゞ默せるのみ。

やがて、山の端ほのめき出でし月姫、半ば耻らふ面に、

下界を暗より導きつゝ、み空の旅にのぼる。
されど、翁はたゞ默せるのみ。
月は中空にかゝりぬ。さきに紅ながしゝ海づら、今は銀波をおりて、月、海底に入り、波、天上にさやぐかと怪まるゝも、心地よき夜の樣や。
されど翁はたゞ默せるのみ。
いつしか月光おぼろに、波音かすかとなりぬ。と見る中間に霧うち渡りて、海をつゝみ月をのみ隱して、茫々たる夢の如き天と地との間に、忽然何ものか現れ出でぬ。暫しありて、やゝ濃く明らかになりしを。視れば、其處に不斷の花香りて、百鳥おもしろく囀る一大樂園！其の花の香、鳥の囀りを他にして、綠いや深き樹蔭に佇む青年あり。彼のうつむきて悲しげなるおもわの、よくも誰にか似かよひたる！
今まで默して眺め居たる翁、此の時蕭然たつて、何かたへか去りぬ。幻も消え失せぬ。月は天上に歸り、波は海上にありて。光りも音も共にすみぬ。

＊　＊　＊　＊　＊

煙もたゝず、鷄の聲もきこえぬ小山の上のひとつ家、後に、いさゝむら竹の茂りあふも、中々凄涼の心地せられて、他に眼に入るものとては、只雜草のところせきまで生ひてあり。一陣荒けなく吹き來し夕風に、草ぶきの屋根の、そゝくれたるが、一二本ぬけて落ち散れるなど、いとあはれにも見ゆめり。
かゝ家に誰か住むらんと、近きわたりの里人にとへば彼處には年老いし翁と、壯年のおの子と、ひと年ばかりあとより來り住みけるも、若き方は、さいつ頃西の國へと志ざして、横濱より船出せしを、間もなく、ひとひ暴風雨ありて、其の船はしづみしとか聞く、それよりは、翁一人わびしく住みなして、日毎濱邊に出でては、さまざま物くるはしげの樣なりと物がたりぬ。
あはれの翁や。

（雨評）老練の筆は敬すべきものあり。たゞ此の文、後半に翁の歴史たかたりて、あはれの翁やと結びたる。少しく組み立ての上に工夫の足らざる心地す。

○薫

三河西加茂郡石下瀨村澤田忠三郎方　霞溪女史

薫‥‥そは床しき者に候。
櫻の花は淡く、桃は濃に、百合は清く、梅は氣高く、皆とり〳〵の花趣あれど、その薫は床しき者に候よ。
春は花の香、聞くだに嬉しく候。机上の梅苑、ハラハラと筆洗にこぼれて、漂へる移香の、筆に止まれる、

いかに優しく候はずや。

夏なれば、若葉青葉の香。綠滴る樹蔭のハンモックに、誦ずる詩文字も浮び出でなんかと、そゞろ心行く者にこそ候へ。

秋は千町の小田に熟む黄金の垂穂浪の、豊に薫る稻の香、はては積める俵に、新米の香溢れたる、まこと心よき者の限りに候。

冬なれば、折たく榾に板戸洩るる焰の香、こはなづかしくこそ候へ。まして新しき年迎ふべく、搗き上ぐる白米餅の香は、樂しき者に候。

同じ雨の薫ながらも、春雨の香は優しく候、姿見に含笑む手弱女が、袖に蘭麝の移り香のごと。夕立の香は心地よく候、新しき座敷に啜る綠茶の薫のごと、時雨の香は哀れに候、老尼が墨染の袖に、沈香の香殘れるがごと、霙の香は淋しく候、古太刀の銹面に、失せやらぬ鐵の薫のごとくに。



面白きは、上巳祭の彌生の暮、歌女が微醉の薫、ゆゝしきは、軍服いかめしき馬上の士官が、豊に烟らす葉捲の薫に候。

紫衣長う引きはへし高僧の、聖燈かゝぐる佛のみ前にたきこむる靈香の薫、そは尊き者に候、さあれ、亡き人の新墓に手向くる香の薫は、まこと悲しき者に候。

文に詩に倦みはてし折り、庭池のほとりに立てば、親と子と打ち交る赤き錦魚の睦みさ、鰭にさゞめく萍の綠濃くて、搖ぐ藻の香はいと涼しく候。

夕餉の煙立ち昇る鄙の軒に、新芋煮る香のもれたる、心よく候。野の香とも申すべしや。

菅の根の長き夏の日を、漁りに暮らして歸る漁翁の、魚籠より出づる白魚の香、先づ心動くものに候。

かく認め終り候時よ、墨の香はあまねく紙面にみち渡りて候。

（雨評）此の筆もまた、雅な粹なかをりの浮動するもの〻候。

○歸省

三重縣津市
四新町三九 松尾潮花女史

樂しき歸省の途に上るべく私が乘つた一番列車は、今しも錦溥驛を後にして、徐々と搖ぎ出たのであつた。家に待つ御兩親、扨は、弟妹の事等を、胸に描いて微笑む内、山や川や野や家を送つて、軈て故郷ま近の阿漕驛に下りたのは、夕暮の五時。恥かしい樣な嬉しい樣な氣に滿たされた私は、裏道傳ひに門前迄來ると、「おや、姉さんが」と、直樣飛んで來たのは、弟と妹。其れに、母上も出迎へられて、共々書齋へと荷物を運び、弟妹に各土產をやると、非常に喜むで居る。父上は未だ他所から御歸りにならぬとの事に盡きぬ話は夜にと讓つて、私は只一人、思出多き阿漕ヶ浦邊へと逍遙ひ出て、潮の香高き松陰に腰を下し、徐に海上を眺めやつた。夕日の餘光を受けた油の樣な海面には、風を孕むだ眞帆片帆油扨は、欸乃面白き漁船が、滑るが如く港へ入つて來る。其の後へ浮び出た山口は、參尾の諸山であらうか。北方に黛を描いて海中に突出て居るのは、有名な鼓ヶ浦で、南方には香良州の松原が、綠色を湛へて遶つて居る。頭上なる松嶺、岸邊によする漣は、丁度天女の奏づる樣な琴瑟を調べ、偶々歸つた私を慰めて居る樣なので、幼馴染の此風景と、今更の樣に感ぜられた。軈て、夕榮の空も刻一刻と薄らいで來て、四邊は漸く夜の女神が黑袖に掩はれたので、やをら立ち上つて、家に歸ると、父上も既に歸いて居られたので、久々に一家團欒して、夕餉を終へ、一同椽端に座を占めた。廣い庭には、父上の栽培せられた朝顏の鉢が、何個となく棚に並べられて、やり水の綠涼しく、風鈴の高床しう響ける内に、學校の事朋友の事等盡きぬ話しに耽つて居た。空には十六度計りの月が、淸らかに訝えて、丁度此樂園を祝ふが樣に笑むで居るので、私は身、恰も天の宮居にあるの思ひがしたのであつた。

(雨評) 樂しい歸省のけしきは鮮に見えた。

○淸き夜

廣島縣賀茂郡
野路村字中畑 堀田溫子

蟬の羽衣身に重く、草木萎るゝばかりに、照りわたる夏の日の暑さも、さと吹き下したる嵐に、一しきり吹き來し夕立の洗ひつくして、空さりげなく澄めるに、十六夜の光は、水より淸く、月の宮は水晶の扉か、玉

の臺か、あはれたゞ清ききよき夕や、庭の木立は一葉ごと露を帶べるが、さやけき月の光を浴びて、きら〳〵とかゞやき、緑の色の溶けて流れもやせめ。そが木蔭に下り立てば、月光はさながら青き雨かとばかり葉の間を漏り。涼しき風にそよ〳〵と木の葉そよぎて、白銀の雫はら〳〵とこぼるゝに、わが袖はいと重きをおぼゆる。柳の糸のからみつとけつ、影はいたく地にみだれて、あはれこゝらは踏み分げ兼ぬる心地ぞすなる。

木蔭のひまよりは、隣家の火影、ちら〳〵とほのめき、白衣の人の夜涼語るがあり。開け放しに、わが家の奥のま、月さし入りて、青き蚊帳の波うてる裡には、今しがた、月を指しつゝ兎よ〳〵と云へりし幼妹の、はや母上の手枕に、まどろみの夢は、神近く遊びをらむ。外面の方眺めやれば、冴えにさえし月は限なく照り渡りて、白銀の波大地にたゞよへり。をち方は、薄もや罩めて、山々の峯裾をつゝみ。わが野呂川の流れの、月くさ吹く蹟をめぐりて、縱に細く、斜に白く、あるは綱の目にして、粗々流れまとひて、末は靄に入れる。土橋のほとり、螢よばふあどけなき聲して、藪の彼方より、二つ三つ六つ五つ、螢のちらほら飛べるがあり、その光おほかた月に奪はれてか、いとおぼつかなげに。虫の音しげき露草の、月影惜しげもなく散らしつゝ、門邊の小徑辿り來るは、少女と弟らしき少年。少年は笹竹振りかざし、少女の手よりは、一團の幽光、紗をもれたり。蛙の聲、虫の聲、いと澄みて四方に滿つ、彼れ等も月の明きに眠もやらず、一夜を鳴き明すらむ。われはつと歩みて井戸端にゆき、繩をたぐれば、月ゆら〳〵と釣瓶の水にあり、口づかち月光を吸ひて、あまれる水覆せば、惜しや、月影ほろ〳〵と滴り落ちぬ。空仰ぎ見れば、月はまさにわが上に來りて、ます〳〵さやけく照らせり。やがて臥戸に入らんと、椽に上りがてら、庭面の方見やれば、樹影の黑さと月光の白さと、鹿の子まだらに地に滿みて、月より流るゝ風の梢をわたれば、月光と樹影と相抱きて動き、白ゆらぎ、黑さゞめきて、われにもそゞろ人なつかしき思ぞ動くを、あはれ、芭蕉のさや〳〵と、月に何をかさゝやける。

（雨評）すなほにやさしき筆づかひの中に、優美に雅やかなる詞もまじりたる。其の人がらの思ひやられてゆかしと申すべし。

○夏の夜

長門國萩　孤菫女史

夕立の名殘を止めて、見るから涼しげな庭の靑葉がくれ、疊石を自然の凉み臺に湯あがりの身をもたせ、靜かに暮れ行く空を眺めてゐると、何處からとなく襲うて來た夜の幕は、見る内に、其の一ぱいを掩ふてしまつた、すると、何時の間にか、滿天に銀砂子をまいた樣な星が、急はしげに瞬いてゐる。折から露を含んだ冷たい風が颯と吹いて、木々の若葉から、綠りの雫が、ハラ〳〵と溢れると同時に、我頭へも冷やりと其一滴が落ちた。あゝ何と云ふいゝ氣持だらう、晝の悶えは奇麗に洗ひ去られて、自分は今、……ミューズの神に手をひかれて、中空を逍遙つて居るかと疑はれる。

やがて東の山の端が明るうなつたと思ふと、十六夜の月、今や出やうとして、靜かに下界を窺うてゐる。瞬もせず見てゐると、だん〳〵其姿を現はして、遂に全く山の端を離れた。すると萬物皆一樣にその光を浴びて、又何とも云はれない美觀を呈してゐる。折柄、天つ星が散つたかと思はれる樣な光りが、我が頭上をかすめて、前の石菖鉢の中へ落ちた、と見れば螢である。遙か遠方には、絕えつ續きつ、腹を絞る樣な詩吟の聲がする。それがやむと、又嚠喨たる竹笛の音が聞える。同じ人であろうか、或は高く或は低く、咽ぶが如く訴ふるが如く、我頰には何時しか淚が傳ふてゐる、其何故であるかは知らない。只何物かゞ我心に一種の悲哀を傳へてゐるのであらう。

暫くたつと、笛の音もやんだ。月は愈冴えて、冷風梢を渡る毎に、月光露と融けあつて相跳つてゐる。あゝ此の景、此の感どうして現はす事が出來やうか。

われを忘れて、只うつとりと、時のたつのも知らなかつた。ふと氣が付いて見ると、今迄聞えてゐた隣りの團扇の音も、いつしか止んで、太鼓灣の瀨音と、小田の蛙の聲とが、俄に耳立つて聞え出した。あゝ自分も惜しいながら、此の淸凉の世界を立ち去らねばならぬ。つと、立あがると、折りから流星一つ、東より西へ、長く〳〵餘光を引いて……

（雨評）涼しき夏の夜の景、先づ見えたりと申すべきか。

○夏の庭

福井縣立福井高等女學校　高柴小靜

晝過ぎから一息に『乳姉妹』を讀み盡して、疲れた眼を、窓の前なる合歡の花に注いだ。恰ど三時頃の夏の日は、銳どい光りを、滿庭の草木に一杯に投げてゐる。靑葉の木ぬれは、髮の如く垂れて、綠の色は滴るばかり軒

端を壓してゐる。一碧澄める空から、驀然に薫風が落ちて來る。机の上に何か書かうと披げた紙か、ばたばたと舞ひ立つ、私はやをら起つて庭に下り立つた。庭は四十坪あまりの雜然たる植込で、喬木灌木がうちはへて鬱蒼として茂りをなしてゐる。飛石を三つ四つ傳うて出ると、玉卷いてる芭蕉の下蔭に、苔むした井筒がある。但し、この古井は時折使ふので、釣瓶の竿が一尺斗り頭を井桁の外へ出してゐる。このあたり一面に、鴨足草が白紗を張つやうに咲いてゐる。庭の中程に、鼎足に樅と松と柏か亭々と立つてゐる。其の根方が小高になつてゐて岩石の配置面白く、鳥渡築山の形を成して、そのだらだらの勾配に、古樫や葉櫻や若楓や杏梅柊などが、不規則に生えて、凉しい色を盡してゐるのである。其の間に、柘榴の花が紅一點、星の如く燃え、枇杷の實が寶玉の如く梢を綴つてゐるのも、うれしい。足を運ばして、その向うへ下りる。そこには、日受のよきところを擇んで、猫の額ほどの花壇がしつらへてある。牡丹は既くに散つて、今は紅白の薔薇が、時を得顏に高き香を漂はして咲いてゐる。葵は高く伸びて、赤き初花のほのめける夏菊の蕾の綻びかゝれる。撫子の愛らしく美しさ。その他西洋種の草花の奇麗に咲ける、又秋待顏なのもある、垣越しに、隣の庭の赤い稻荷堂が見える、鳥居の倒れかゝつてるのが、氣になる。垣根のところへ行く



都筑眞琴君筆

と、一株茂つた紫陽花が、白い鞠を着けてゐる。花を動かすのは青蛙であつた。踵を返して、鋏の方へ廻る。若竹が十竿ばかり、花をもつた棕櫚が一本、それに交つてゐる。鋏はづれに、傾きかゝつた裏門がある。何だか此の門が『乳姉妹』の高輪御殿の裏木戸のやうに思はるゝ。そして、悲惨なる運命を持つた君江が、そこを開けると、瞋恚に燃える高濱が、凄い笑を含んで立ち迎へたのであらうと思ふと、全身がすくむやう、急に怖くなつて來て、何者か門の外に居りはせぬかと思はれ、匆々にして桐の花散る泥溝の側を傳うて、書齋の窓を過ぎつて、漸く椽側に來て腰を下ろし、ホッと息を吐いた。薫風がサッと鬢のほつれ毛を吹く。

（雨評）乳姉妹を讀み盡くしたるに筆を起して、裏門に其の高輪御殿の裏木戸思ひ浮ぶるにとゞめたる趣向、面白しといふべし。

○頰の笑

名古屋　中平ふみ子

村一番の學者と云へば、第一にそれと指さゝるゝ繁樣、此の夏東京の大學を卒業して、文學士と云ふ肩書を擔つてお歸りなすつてからは、村の人は、皆先生と計り、誰れも名を呼ぶ者は無い程の名望家。吁、幸多からずや、妾明日よりは此の榮ある詩人の新妻となるので有る。

若き眉、美しの瞳、未だ振分髮の昔から忘られぬ慕しの面輪、其の人と千代の契をと母上に云はれし時よ、我が頰の紅は如何程であつたらう。

戀しき人と二人、平和な田園の生活に、愛らしい菫や百合に涙を灑いて、詩の神の御手に縋りつゝゆく、ホームの樂しさは如何に！と思ふと、恥しき明日の日さへ、待ち遠い樣な心地がして、輝く胸の希望に思はず頰に笑み溢れた、刹那、暮の御空に聲あつて、

「初戀の乙女！汝は哀なる汝が姉を忘れたるか。」

あゝ然なり。戀に燃えた我が胸は、病める姉を……。花ならば盛なるべき二九の春を、我が姉は盲目である。そして、我が母とは繼しき中。今までとて、不具なる身を歎いて泣き暮らす姉を、朝夕に慰めてゐたのは、我一人であつたのに、我れ嫁かば、明日からは、誰れが……。

昨夜それと話した時、姉は我が手を取つて、

「私の事は決して心配して下さるには及ば無いよ。どうせ一生日蔭の草も同然で、花の咲く時はないのだから、私は只、靜ちやんの幸福計り祈つてゐるんだもの、

まア甚麽に私も嬉しいか……」と艶然して、珍らしく姉の頬には、血の色が動いたが……軈て又元の淋しさにかへつて「静ちやん！」

「私、明日一晩だけで宜いから、此目が開けたいよッ」聲に無限の怨を含んで、光りなき瞳から溢れた一雫！千萬言にも勝る此の一言！妾は終生忘れる事は出來ないのである。

嗚呼、明日はいよ〳〵、此の不幸の姉を捨てゝ、嫁くの日か……

若き星一つ西に飛んで、我が頬の笑みはあとなく消えた。

（雨評）面白き境遇の情、材料の工夫愛すべし。

○心地よき朝

駿河藤枝　石神　きえよ子

さ霧立ちこめて、麓の水車はさながら夢のやうに淡し。詩集手に、いつもの谷間へと。

暁の風、木々の青葉をぬけて、後から下げ髪を亂し、白ネルの筒袖、上半身は黒白の縞のやう。小暗き岩陰石地藏立ち並ぶ前の一本橋を渡れば、咽ぶ水の音、風よりも涼しい。刄のやうに長く、煙のやうに細く、花のやうに渦をまいて流るゝ、岸を辿る雪駄のひゞき、静寂なこの境に、こだまを生んで、清い谷まは、水と妾とで占めて居る、ほんとに清々しい。戀人を見るよりも樂しい、しやら瀧はちらちら木の間に、白い姿を現はして、晝夜たえまなき調べに、亂れもなく、清い清い音に、尊い神の教を說いて居る。巖を廻つて正面の、突出た一枚石の上に、腰を下した。こゝは妾の一番好なチェーアである。何と云ふ勇ましい水の勢であらう。高い崖から躊躇もなく、どーつと落ちて、岩瘤に玉と散て。ほんとに男らしい、妾は好だ、大好だ。こんないさぎよい心の方も、世にはあるでしようか。妾は此の水が人なら、祖母さんにあんなに言はれなくても、直に嫁くわ。

水の音と、どつちが美いと張りあつて、妾は聲をあげて、詩をよんだ、唱歌もした、疲れて默讀もした。さ霧かいつか晴れて、黄金の光りが射込で來た。露を帶びた石竹の花が、和らかにゆれて居る。そつと手折て、胸にまして、今落ちた瀧の水と、かけくらべでもする樣に、走つて歸つた。一緒にかけ出した水は、もうどこらへ流れて行つたらう。あゝ雛が鳴く、乳母がむかひに來た。今から髮を結つて、お化粧をするの。

（兩評）ホンニ心地よげなる朝です事。

○あさがほ

上總山武郡千代田村岩山校　十六夜女史

朝かほの花こそあはれなれ。日影待つまの露の命よ。されど、朝な〱に咲きかへて、色さま〲なるもなづかし。まだ明けやらぬ空、東雲の風しづかに吹きわたりて、身も浮くばかりに涼しきころ、ほの暗きまがきのあたりに、六つ八つおぼつかなげに咲きいでたる、あはれなり。

やう〱少しあけはなるれば、葉かけなりしも見え初めて、白く赤く紫なるは、目さむるこゝちして、咲分亂菊、牡丹咲などの、とり〲に咲きいでたるは、まゝなく麗はし。紫の赤を奪ふを憎むとかや、唐人の詞にはきけども、朝がほばかりは、紫なるが赤きよりも立ちまさりて、いとうるはしとおもはるゝも、をかし。ことに〱しき迄珍しきさましたるは、腰上とかやいふなりけり。花の中程の空さきにつきいでたる、いとをかし。瑠璃咲、空色の少しうすきに、景色ばかり紫の色添へて、蕊のあたりはうすくれなゐに咲きたるが、こぼるゝばかりの朝露にうるほひたる、さらでも涼しき夏の朝は、なほ目もさむる心地ぞする。七福、紅かすり、紅桔梗、白かすり、風鈴咲など、珍らしき花のうるはしくやさしきさまなるは、露にもえたへぬすがたなる、とり〲にをかしくあはれなれども、白うさきいでたるこそ、またなく麗しうあはれなれ。花色のさま〲なるには引きかへて、おく露だにもいと清らに、いと白うにほひたる、清人の心も忍ばれて、ゆかしく心なづかしく、見る目もすゞしうおもはる。あはれ朝がほの花こそ、またなく清くうるはしけれ。

（兩評）筆は整ひたれど、少しくふるきをゝしむ。

○脊戸の小川

周防　香烟女

サッと朝日が世の萬物に金色の幕を掩うて、二間三間と上る頃になると、毎もの樣に、脊戸の小川が賑はしくなる。九ッ、十、十二、十三の荒々しい男の子は、我れ勝にと、大岩小岩の間から深みへ、深みから淺瀨へと游ぐ、水掛をする、泣く、わめく、一通り騒々しさではない。夫れが一しきり續いて、後は、遊び疲れて、水玉の散つた銀光を放つ温い青草の上に、風引かせまいと、わざ〱縫うて予へた霜袢も何も、四邊に抛げ散らして、末賴もしい若松の優しい肌を、惜しげもなく炎天に晒らしながら、寐て居るのもあれば、小力のむく〱と角力とりはじむるものある。

毎も斯くの通りであるが、實に罪のない遊びなので、讀書の時間を妨げられながらも、何となく嬉しい樣で可愛いく。すると、向ふの蛙飛ぶ畔道を、十計りの女の子が、何か赤い花辮をむしふて聲張り上げ『天に變りて不義を打つ』と、小さい胸をそらして、得々と唱うて來る聲の優しい事。オルレアン城救ひの爲に顯はれた、ダンヌヂヤークの姿が忍ばれて、此の儕の一隅に、露を擊つ爲に暫し天使の天下り仕玉ひし樣に感じたのである。

川の魚が水面に躍つて、山の邊で蟬の鳴く音が烈うなると、何時か小供等の姿は消えて居るのである。さてば此度の遊びは何であろう。

短歌

佐々木信綱選

特別第二賞

○天地に一人の母をこふる君をおきてもこしよますらをなれば

越後栃尾町　内藤ゆき子

〔評〕萬葉集なる防人の歌をよむ心地す。

特別第三賞

○露ならば思ふ花にも宿らましはかなしわが身人の子にして

東京府北品川山ノ下二一五　橘しん子

〔評〕やさしくあはれ深き歌。

天

○刈りつめる眞菰小舟の過ぎ行きて花藻みだるゝ田中細川

福井高等女學校　高柴小静

〔評〕畵のやうなるけしき。

地

○なやみある胸をいだきておばしまに夕淋しき秋の雲見る

越後栃尾町　内藤晨子

〔評〕佳作。されど類想多き難あり。

人

○瀧の音に若葉ゆらぎてゆらぐ葉ににじ立ちわたる大那智の山

茨城縣稲敷郡阿波村　柳町さかえ

〔評〕壯大。

秀逸

○　上毛碓氷郡岩井村　花峯女史

舞扇入日にかざす京の子が
　ゑまひ淋しき水のおばしま

［評］艶麗。

夏の歌の中に　熊本　羽田すみれ

村雨は露をのこしてはれにけり
　琴の音すゞし夕顔の宿

［評］上下句のつゞきいまだしきふしあり。

○　盤城　中野櫻顔子

繪筆かみ暫し夕べの雲を見る
　人うら若く入相の鐘

［評］結句おちつきたりとおぼえず。

○　千葉縣　靜香女史

ほゝゑみてはかなくなりし姉君の
　奥都城所薔薇の花さく

［評］上句やさしき少女のいまはおもはれて。

○　淡路　杉野海棠子

亡き夫の愛でし夕顔眺めつゝ
　月待つ宵の寂しくもあるか

［評］結句さひしくもあるかな。

○　磐城　佐川繁子

筆置きて夕日の藁屋はるか見る
　若き畫だくみ何思ふらむ

［評］三句いまだしけれど

○　三河　澤田つき子

葉隱れに蜘蛛の子ひそむ葡萄畑
　夕淋しく雨降りすさぶ

［評］原作結句秋の雨降る

○　信濃　田川浪子

靑葉隱れかすかに見ゆる里寺の
　五重の鳩舞下る

春雨　日向　加藤せつ子

折々は椿花ちる音もして
　み寺の庭に春雨けぶる

［評］原作結句春雨の降る

百合　秋田　今立いま子

葉がくれに咲けどさゆりのやさしきに
　匂ひたづねて胡蝶とびくる

［評］原作結句妹がかざしに

○　和泉　美浪子

隣とち病あはれむ病院の
　まとの戸ほそに秋風立ちぬ

［評］かゝる上句かゝる想、雜誌『心の花』にかゝげし歌にありしやうに記臆す。暗合ならむにはよれど、もし知りつゝ然せられしならむには歌よむ人の行ひにあるまじき事なり。こは此作者一人にいふにあらず。此度の投書のうち、他の人の歌を一字一句た

がへず出したる人四五人ありき。さるたぐひはすべて沒書になしたりき。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

○　兵庫縣　梅子

八束穗の垂穗の稲の秋のみのり妻子やすかれ何かなげかん

○　大分縣　中内蝶子

大空の星を眺めて亡き君の靈魂の行方を思ふ夜半かな

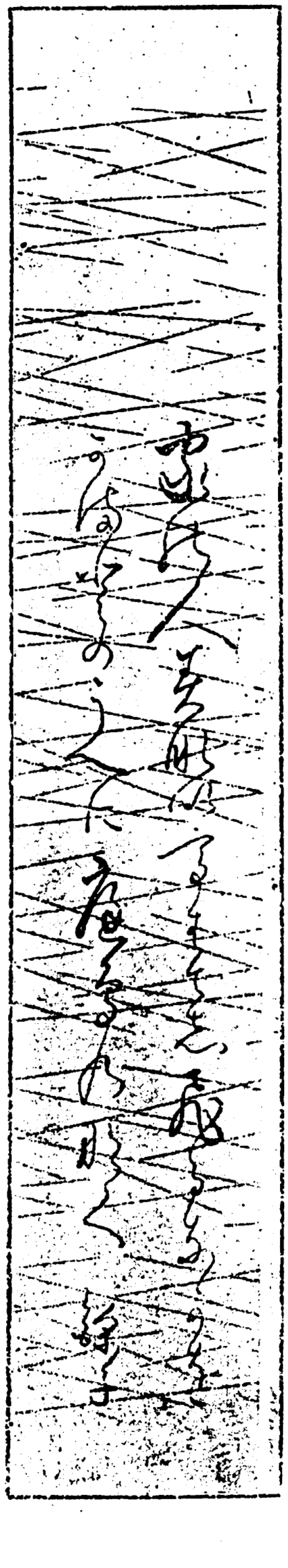
○　松江　白すみれ

楊貴妃の繪すかた匂ふ春の夜半小雨しつかに牡丹くつれぬ

○　青森　高橋優子

高木法學士夫人

鐐子筆



よき月と君も眺め吾れもまたその夜なやみのひとつとなりぬ

河鹿　神戸　吉田霞江

瀬殿の灯かすかにみ簀もりて千鳥の瀬に河鹿聲する

○　栃木縣　松本花童子

鷺の新巣にかへろ朧夜を門の紅梅そゞろ亂るゝ

千鳥　千葉　楢香女史

遠山に夕日沈みて金色の波うつ岩に千鳥むれ飛ぶ。

○　美作　門子

うたゝたに母の乳房に神のごとむかしはわれもほゝゑみにけむ

○　能登　池野いさみ子

若き人の書室もれくるともしびにほのかに見ゆる紫陽花のはな

折に觸れて　備後　伊藤波子

聖堂の鐘なり渡る夕暮を牧より歸る小羊の群

山百合　大阪　杉田孤泉子

山百合の薫ゆかしき谷川に有明の月浮きてゆらげる

○　筑前　向井とよ子

いかにせむいかにせむの我まどひまどひつ明けし夏のみじか夜

折にふれて　桂　月子

朝まだき吾駒の背にむち打って青葉の森の露にぬれたり

○　南越　植竹春讃

夏は來ぬ夏は來りぬ夏は來ぬ木蔭戀しき夏は來りぬ。

○　長野縣　中島白薔薇女史

蛙なく聲もかすみて月影の朧ろに浮ぶ小田の苗代

○　和歌山縣　柳本朝枝

かさぬ日に、山さへ見えす風荒く波間ぬいてそ千鳥飛び行く

千鳥　伊豆　尾崎あい子

濱なみとうけつる酒に霄月夜暇も千鳥にかへる磯みち

○　三つ葉

百合さきて夏はすゞしき越の山うらむ人の夢の香りてする

○　奈良縣　山吹女

ゆあがりを夕風吹きて凉しきに月きら〳〵と波に砕くる

○　兵庫　柳田春枝

短歌

若武者の駒に水飼ふ秋の夜や江堤く寒くあしの花ちる
在船橋　土屋重子

○

ほたる籠ふる袖ながき影一つ青田のあぜを行きてもどりぬ
三河國　北谷濱子

○

出征ませし夫は歸らで此年また庭の銀杏の散り舞ひにけり
東京府　桂　梅子

○

君と我花の園生に遊ひしはさめてくやしきうたゝねの夢
德島縣　大久保桂子

夏月

吹く風に動くも涼し呉竹の簾子にうつる夏の月かげ
磐城國　紫　女史

○

わが思ひ夕べのくもにのせやりぬいつとゞくらん西比利亞の地に
群馬縣　横田春子

○

都にてありしことゞも語らずや川添やなぎ風すゞしきに
釜山港　池田薫子

折にふれて

水近う螢迎ひよる竹の椽はし居涼しく歌によき宵
牛込區　松石治子

○

朧ろげに涙のしぶきのはれまより見ゆる舟人わか背ならんか
磐城國　鈴木玉子

○

疲れて思ひ起きては思ふ故鄕の母のみ病このころ如何に
周防　殘蘭女史

○

興そゞろ小百合にわきてさまよひの大野の末に月いてにけり
愛知縣　榊原きく子

寫眞

手をひきてふりわけかみのうつしゑはむかしのひてなつかしきかな
若狹　すて子

○

夕風に青田十里の匂ふかな今年いかなる富や含める
石川縣　たちばな子

遠征の夫を偲びて

城おちてみそ日立てども我背子の便はなくて我やせむとす
埼玉　岩井あい子

悔身

今更に男子ならはと悔ゆるかな我が亡きせこの仇を討たんに
神田　高村春子

朧月

高殿の歌會の灯ゆろぎ初めて花ほの白う月朧なり
相模　添田たけ子

○

打ち見れば山の麓に鳥居あり若葉の奥は宮居なるらむ
豐後　美津山濱子

○

木の下にさとり開きしみ佛のほゝゑむ顔に赤星の影
青森　寬琴女史

○

水澄みて白蓮香る朝の池沈めん我か身あまり醜くき
上毛　春子

夏草

幾度かゆめにかよひし母の御墓けふ訪ひませば夏草生ひぬ
茨城縣　鈴木たい子

螢

身にあまるひかりわれとも夏虫とはかなき日くらしとふにひそめに
本所區　村上幾子投

○

夕日さす浦戸の浜の末晴れて空よりかへる天のつり舟
麻布　春子

○

なつかしの花はさけどもいかにせんめてにし君のいまさぬけふは
小石川　近藤愛香

○

山門の朱顆くして葉ほろ〳〵こぼれてひく〳〵山鳩のなく
下總　岩瀬のぶ子

○

老熊やわかれに子等をよせまれて語のみ洞に五月雨のふる
岩代國　大中小牧子

ある夕べ

淋しげに野ぢらほゝゑむ夕堤物思ひつゝ時鳥聞く
能登國　杉下富美子

○

筆とれば心亂れてもの悲し今日の日記は書かずおかなん
石狩國　佐々木まさ子

○

夕ぐれのかねの音ごとにたそがれて磯の七村月となりけり
栃木縣　梅子女史

○

から國の人にも告けよ日の本の大和島根のさくらさきぬと
早稻田　小島濱子

夏宵

やり水にすだく河鹿も和するごと早苗にかをる風涼しとて
南多摩　武藤とう子

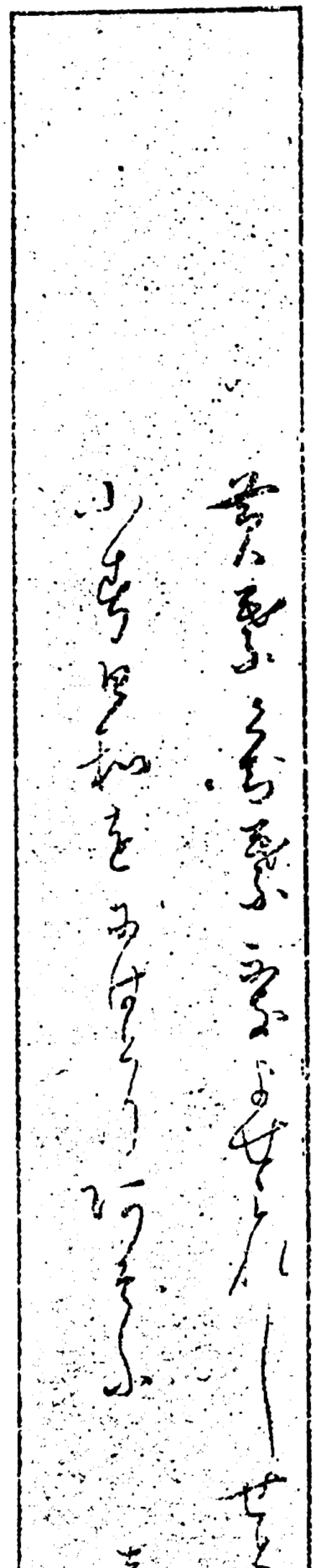
月の宴

夕暮をわれも行かばや筆持ちて風清からん君ゐますならん
紀伊國　はま子

○

川波の名殘の光砕くまを白帆二つ三つ川下りゆく
　　　　　　　　　　　　青森縣　新谷竹子
○
亡き友の奥津城訪へば草むらに虫の鳴く聲哀れなりけり
　戦死者　　　　　　　　長崎　桂枝
ふたつなき命もかろう武士の重きつとめに身を捨つるかな
　五月雨　　　　　　　　陸中　湘井松子
東の御殿もふこうさみだれて御前にはべる管絃の宴
　螢　　　　　　　　　　茨城　板橋あい
御簾あけて小琴引きます姫君の御衣に近く螢とぶなり
　旅宿　　　　　　　　　下總　結城女史

富田俊子筆



奥山のもみぢふみわけ往く僧が今宵の宿はいづこなるらん
○　　　　　　　　　　　利根の川上　津久井いくさ子
翠うせて汚れほろびて人こゝに天なる國の木かげに入りぬ
　出征の兄へ　　　　　　熊本　森水湘子
去年の秋見し月かげはもろこしの露營の暮をのぞきこむらん
　従兄の戦死を悼みて　　伯耆　美佐保
國の爲め玉と其身は砕けどもほまれは朽ちじ千代よろづ代に
　月夜に吟みて　　　　　秋田　松田政子
飛ぶ雁の翅かられど月見れば唐土までも行く心かな
　木枯　　　　　　　　　美作　國司惠美子
有明の月のかつらやさわぐらん露にこゑある木枯のかせ

○　　　　　　　　　　　飯田栄香女史
晴の月やゝ白う西にありて東のみ空雲やゝ紅き
○　　　　　　　　　　　常陸　錦水女史
松蔭の岩まもりくる苔清水むすふ袂に秋やかよへる
○　　　　　　　　　　　新潟　佐藤榮子
つれ〴〵の淋しき夜半を堪へかれてまきもどし見る君が玉章
　首夏　　　　　　　　　東京　大畑たづる
いつしかと春のなごりもうすらきてみどりすゞしき夏木立かな
○　　　　　　　　　　　大阪　西部楳子
亡き友がありしむかしの給すがたにもの思ふ夕べ五日雨のふる

　危篤の報　　　　　　　長門　下田きよ子
兄君の危篤の知らせ手になして後報いかにと待つはかなさ
　曉　　　　　　　　　　鳥取　堀介元子
山寺の鐘の音消えて月おちて朝風寒く小蝶のねむる
○　　　　　　　　　　　千葉　大河小松女
里川に夢流るゝにかくるゝに若葉の陰に時鳥なく
　夏のうたの内　　　　　肥前　こしう
城跡のくつれ石垣あやしくも蟹の住家や梅雨の頃
　松下泉　　　　　　　　静岡　たか子
一本の老松が下にわき出づるこの眞清水の玉にぞにたる
　田植女　　　　　　　　伊豫　すゝき

朝まだき田植娑のいさましく霧の石橋語りてぞ行く
下總國　中島ふじえ子

朝顔

うなゐらがあす咲く數の爭ひも露にとけたる朝顔の花
吳市　犬上クマ

折にふれて

乳母が家は川邊の宿の柳影の消く凉しく風のある家
大阪　田中常子

○

たらちれの惠もよそに思ひしをおもふのころはいまさとりけり
信濃國　横關とれ子

釣床

しばらくを風にあづけて來て見ればあるじ顔にぞ蛙なくなり
長野郡　筑紫子

○

田ともならず畑ともならで茅しげる昔長者の夢のあとかな
岡山　渡邊靜子

螢

夕ぐれを水ぎはにともすほたるこそなく虫よりもあはれなりけり
福岡縣　白石しづ子

○

磯寺の鐘の音ゆるく海に落ちていさり火ふたつ沖のかなたに
山口縣　淺井節子

○

うなゐらがまれく扇をよそにして空に凉しくとぶ螢かな
日本橋　山本とき子

○

朝月夜藻の花かなる大利根や四ツ手網上ぐるの音そやはらかき
上毛　曉星女史

○

曉の小雨冷たゆ山の宿蚊帳のゆらきに百合の香高し
本鄕　花山清子

○

夕立のはれて夏野のかゞ見草たまりし水に姿うつして
三河　山水さくら子

蓮

はちす花池の女神のかざしにや白紅の長おみじかう
吳市　木原梅子

故鄕

故鄕の夢をえがきてれむる舜微笑む人の姿おぼろに
周防國　矢田部芳子

博覽會

たゞ一め巡り見たれと百千たひ學ひ習ひし心地こそすれ
加賀　廉子

○

日は暮れて月ものぼらぬ小山田の水面さびし賤の男のうた
土佐　秋月麗江子

折にふれて

みだれ緒にみたれしらべをかきなして呑くれがたをひとり野にゆく
對馬　美津多蘭女

○

兄君の愛し白菊つゆおびて主まち顔に頰笑みにけり
名古屋　獅子海中

戰時の歌

共に立ちしいくさの友の别の水あすの今時量るべきやは
石見國　杉浦翠子

○

山姬か御姿うつす谷の淸水御化粧の料か紅百合の花
上毛　月岡芳枝

○

今は無き姉のかたみのヴハイオリン手に取る每に思ひ出多き
新潟縣　吉田影子

○

このむれのなやみのまゝに亂れ來しわれをもなづる磯の松風
下野　木村つゆ子

○

ゆくりなく君に逢ひたる夕月夜四つの袂のしめりがちなる
東京　若葉

○

月よりか吹きくる風のすゞしくて草木のほかは秋とぞ覺ゆ
岐阜市　日比舒子

螢

草折てば落る螢のかつ飛びて光りまばゆき水面瀨の中
長野縣　手塚とも子

○

亡き姉のかたみの小琴調べては十とせの前の夢に傚む
美濃國　田中たづ

更衣

いづれよき姉よ妹よ品さだめ絹たち縫ひて衣更へせぬ
陸中　北條香園

征旅の夫を偲ぶ

衣縫ふ針のみぞさへかよはじな霙ふる夜の夫を思へば
美濃國　千葉紫子

五月雨

かりしほの門の大麥ぬれ〳〵てくちもはつべき五月雨の空
岐阜縣　野村靜香

○

今朝はしも送り給へる朝顔の一花つみて栞となしぬ
駿河　石神きえよ子

夜富士登山

ほど近く燈は見えて行けど〳〵得はや至らぬ富士の雲むろ
巣鴨村　佐藤霞子

○

耳遠き里大川の渡し守月仰ぎ見て一人語りぬ。

牧場　　千葉縣　高地とく子

夕凪や牧場の鈴ぞ響くなる牛の子今や寢屋に行くらん

○　　群馬縣　上原芳子

夕烟さびしくのぼる賤が家に入るもゆかしき花うりの子よ

卒業生に送る　　紀伊國　矢田部つれ子

ひかりそふ螢も雪も一かたにあつめてみする窓のわか竹

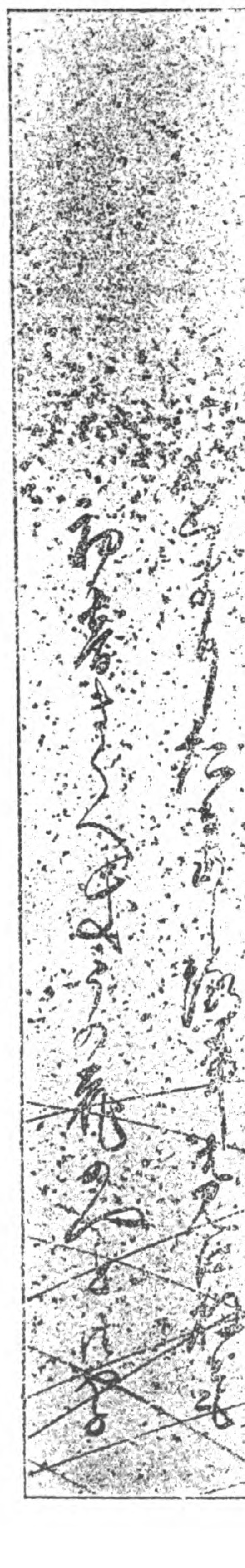
ほとゝぎす　　神田區　高橋清子

ほとゝぎすなきつる山の一ッ茶屋卯の花ちりて溪にながるゝ

○　　備後國　高杉みゆき

白岩龍平氏夫人

鶴子筆



五葉松水美くしき庭の雨後夕日傾き蟬啼し

蓮葉　　熊本市　井上つ子

さやかなる廣葉ひろげて蓮葉の池の濁りを見せじとぞする

ほとゝぎす　　金澤市　森井せき子

そゞろにも病む身かこちて窓をおせはうの花月夜ほとゝぎすの聲

○　　薩州　西操子

それとなくなき父君の忍ばれてねられぬ夜半になく虫のこゑ

○　　麹町區　重田春子

琴の音の夢さながらに細き夕暗ほの白きあぢさゐの花

折にふれて　　丹後　きさを女史

六月や夕立はげしく雷すごく戰地の兄上思ひ出づかな。

城跡　　信州　花月女史

今ははや訪ひ来る人の影たえて夕陽寒き城の跡かな

○　　淺草區　石原薔薇子

水清き小川のあたりイみてやつれしおのが面うつし見る

○　　美濃　大堅秀枝

夕霧のこき一ト羣靄いきて呼行く君の影見へずなりぬ

をりにふれて　　德島市　川和まさ

夕川に松のかれ葉の二つ三つおちてうかびてまたながれゆく

○　　廣島市　安達亘子

うれり〳〵大波寄せて絶壁にどと打碎け潮の花咲く

水邊の螢　　美濃　かよ子

淸き小川に光り浮べて二ッ三ッとび交ふ螢の影のさやけさ

逝ける妹　　下谷區　太田樂子

うつし繪を見てはいくたびか我れ泣きぬ笑みうつくしきわが妹ははや

○　　茨城縣　石塚靜江

詩の園の彩華にまぢる一本のわれよ小草の幸うすからず。

○　　小石川　服部けさ子

靈まつる灯のかげ淡くしてさゝげし花に虫のなきよる

夏月　　越後　花野てふ子

凉やかに木の間を洩れてうたゝねの枕邊照らす短夜の月

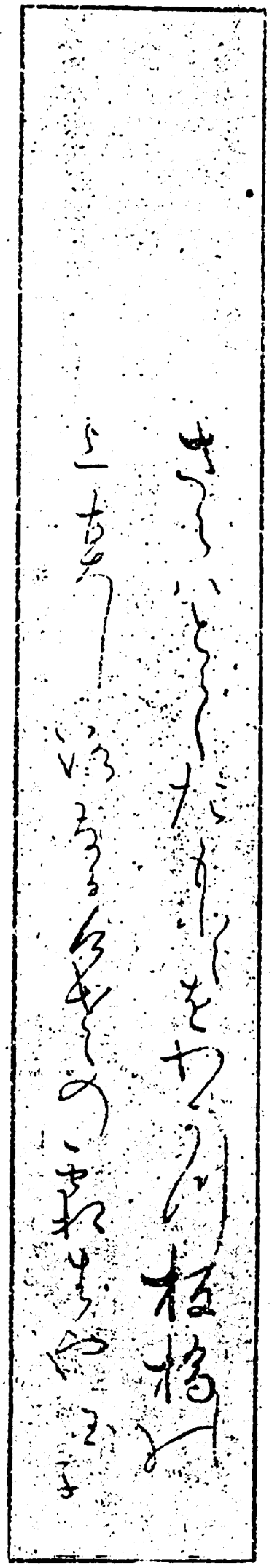
廢寺蓮　　横濱　岡千代子

蓮の花盛り宜しき寺なるを住む人やなき窓のとざせる
○　大和　峰畑節
さえ〳〵と並木に月の出づる時風送りきぬ笛の音幽か
折にふれて　横濱　むらさき
只一人雲の行へをみて居れはピヤノ聞ゆる夏の夕くれ
○　栃木縣　飯塚よま
月あかりたより庭面におり立ちて姿うつしぬ澄める清水に
○　磐城國　鈴木紫子
なき人のうつしゑ抱き今朝もまた城露ちる墓に一人なくかな
折にふれて　横濱市　小峰くすのその
いつはりの世とし忍べと偲ばるゝ君待つ夜半のかりがね聲
螢　神奈川　佐久間芳子
背戸ちかき池のはちすの葉をまるうたはめてこめつほたる姫宮
水邊螢　廣島　和知虎子
柴舟のゆく手ほのかに照しつゝ流れにそひてほたるとぶなり
鵜川曉　飛驒　ひさ子
漁りの篝はいつか消えはてゝ鵜川に淡し曉の月かげ
折にふれて　大阪市　二葉女史
見おくりし君が姿は森にきえてこし路にのこる杖のあとかな
○　愛知縣　平野俊子
山風のつめたき寺の朝あけや蚊帳にして聞く朝經の聲
蟬　小田原　竹内小よき
草も木もしほるゝほどのあつさにも枯れぬは蟬の聲斗りなり
雨後月　山口縣　峰霄子
雨すぎし庭の柳に風たちて月の光は玉とちるなり
○　大阪市　宮崎良子
兄上を乘せし御國の軍船霞の内に見えずなりけり
戀の歌の巾に　羽後國　鈴木きさ子
これなくばたのしからまし世の中をこひには人もうらむなりけり
螢　甲斐國　なてし子
消へて又流れてきへて里川をあるはなぎさに螢とぶ見ゆ

菊　酒田　池田紫楓子
絵かんか活けんかまゝよ蝶とめて淋しき庭にめでん白菊
○　横濱市　寺田光子
尺八の君まちわんずおばしまに琴ひきをれば月は出てにけり
納涼　甲府市　村松竹乃
風通ふ小川の岸の柳かげもるゝ凉しよ夏の夜の月
都に在る友の許へ　甲斐　清水りの子
古を忍ぶが岡に君は今宵すだく虫の音何ときくらん
○　東京　高橋鶴子
三尺の庭にゆらめく緋牡丹や太刀打つ鎚に紫電迸ばしる
折りにふれて　廣島縣　藤本藤枝
世に高き春殘るや五月雨の未の七日の海の御戰
春風　山城　松田秀子
春風よ菫の花のひしぐとも愛らしき蝶の睡り破るな
納涼　紀伊　松韻女子
冴へ渡る月を賞めつゝ終夜まとゐて凉む川添の里
○　岡山市　三村ます子
手を取りて樂しと語るゆめさめて有明うすみ月ぞのこれる
○　東京　百合子
月さえて木影まばらのえんがわに立ちて歌へる少女子二人
夏月　大阪南　小西奈良枝
夏の夜の月や浪間を出にけん凉しくわたるちぬの海つら
○　呉市　木原露子
若葉洩る月淡くしてかたむける戸ぼそに寄れる人うら若し
螢　千葉縣　桂華女史
芦の葉にほたるみだれて岸あらふ浪もすゞしき刀根の川面
○　和泉　紅梅女史
時鳥若變り鳴く山里の月の夜いかに靜けからまし
折にふれて　備後　市岡ます子
袖ふりし去年の別れの偲ばれて尙やる瀬なき今日の長雨
○　神田　大澤麗子

うみて落つる梅の實の音いとさびし病もだゆる五月雨の夜半
鷄　　　　神戸　尾崎みどり
には鳥里より·さとに啼きつれて長閑にしらむひなのしのゝめ
○　　　　佐世保　春野花代子
異郷にて月雪花も樂しめど忘れまじきは花の古郷
橘邊螢　　　　名古屋　熊澤よし
夕まぐれ風ふき渡る橋の上に涼しさそへてとぶ螢かな
寫眞を贈りて　　　　結城町　伊佐岡澄子
はつかしきうつし給おくる友垣はへだてなき身といみとゞめませ
○　　　　周防國　中村てる子

大澤氏夫人
國子筆



送り來し人うれはしき夕まぐれ思のこして君が船ゆく
○　　　　伊豆國　柴村蕙子
拂子手に白帆見送る人わかし初島へ二里の淡き夕虹
○　　　　牛込區　井山幸子
戀はびて思ひ勞れし手枕にうれしく通ふ君が面かげ
○　　　　周防國　國光きよ子
雨はれて風にゆらるゝ薗まより涼しくのぼる夏の夜の月
虫聲　　　　愛知縣　田島顯
出征の伯父に文かく筆おきてうつゝ心に虫の聲聞く
神風　　　　備後　伊藤波那
吹き起るすめら御國の神風に靡き伏しけむ露の醜草

きりぎりす　　　　美濃　渡邊うゑふ
あらの原若武者ひとりたふれけりやれし鎧にきりぎりすなく
春の旅　　　　福島町　磯村靜子
一人たび花よ雲よとうたひ來れは中山三里かすみにくれぬ
○　　　　伊豆國　加藤濯子
笑ふこう幼子ねむる木下影風になりなり露こぼる見ゆ
蓮　　　　金澤市　なみ子
朝ぼらけ小草の露をふみわけて訪へば花園蓮の香たかき
落雷　　　　尾張國　北脇柳村
はたゝがみこずゑに落て村雲の絶間に育し片われの月

秋　　　　赤阪　森ふさ子
音に聞きしこけむす岩根いづかたや落葉深うて鹿の聲する
○　　　　群馬縣　用所きよし
木枯しに散るや小萩の花の香も移せば薫る少女子の手に
○　　　　常陸　小泉拾紫子
波なあれそ風よ吹かざれ吾背子が沖の小舟に網曳せず今日
○　　　　逗子濱　の子
はしき人の逝きにしゆふべ星の國かゞやくかげのひとつましつや
○　　　　鹿兒島　吉川芳子
たへられぬ照日烈しきまひるにも大和男子はいくさすらしも
○　　　　下總　小島より

衣縫ふ手止めてわが子跳めては蚊やりやすらん烟立つなり　宮城縣　古河松江

戰死者に
君まさば語らん事のさはなるに御國の花と散りしかなしさ　三重縣　坂ふみ

○

寂として敵影もなしハルピンの柳にやどる夏の夜の月　津市　松尾花子

○

宵月夜白百合の香にそと乘りて空翔り行かむ詩のうまし國　鳥取市　上山千重子

ぬけいでし殼を梢にひぐらしの行方やいづらまだ歸り來ぬ　京都　岩瀨くに

梅雨
五月雨の今朝たま／＼そめづらしき晴間にひらふ庭の梅かな　下野　ことぶき

梅雨
里の子がかけし小川の丸木橋ふるさみだれにうきて流るゝ　芝區　三瓶花鄕

○

父母の御姿おぼろ浮び來ては涙に暮れぬ夕暮湖畔　栃木縣　秀子

靑田
千町田のみどりにそよぐ風の音にまづこそいのれみのらん秋を　上毛　河内とめ子

○

草刈りに行く村人が引く駒の嘶き渡るあかつきの空　長門　倉岡月代

○

綠野に夕日かきろふたえま／＼蝶々舞ひつゝ蜻蛉とびつゝ　都筑郡　小野ゆきえ子

亡き妹を想ふて
妹昔鑿もて書ける白壁の文字色あせぬ讀みえぬ迄に　丹波　柳原すゞ子

夏月
夏の夜の涼むたもとに風ふきて雲のたえまの月を見るかな　德島縣　浦上登志子

○

君とぬる花野に通ふ夢さめてわが血さわきて戀ひにやせぬ　紀伊　醫子

○

賤が家の垣根に香ふ朝顔の人待ちがほに咲ける床しさ　德島市　住友とき子

○

月のころ朝戸を推せばあさ顔の笑うつくしき小庭のまがき　富山　いうけふ

○

今朝もまた庭に胡蝶の舞ぞ來て二ひら三ひら桃の花ちる　靜岡縣　和田梅子

折にふれて
筆とめて月やいづくと跳むれば山の端ちかく時鳥なく　湘南　井上かつら

ほとゝぎす
行燈に古りたる針のあととめて妻戀ふ夜半をなく杜鵑　熊本市　菫花女史

戰死者の墓
ものゝふの眠りし跡を訪ひぬればたゞ松風に白旗ぞなびく　宇都宮　金澤保子

雨後月
夕立のすぎし名殘の雲晴れてやどるも涼し夏の夜の月　岩代　根本松江

○

數百騎のよろひの武者の行きすぎて駒越は夕霧のうち　富山縣　地崎ふさ子

露艦隊全滅
東風に吹きなやされて婆艦隊露と消ぬる日の本の海　福岡　渡邊綠

折にふれて
薔薇の花簪子の傷手に持らせは笑まいこほれて一二片と散る　千葉縣　落葉女史

○

あゝむしろ此世の中に生れずばかなしめもなく苦もなかりしを　長岡　仝榮子

友の上京するをきゝて
君が行く東の都花はあれど君と語らふ友やなからむ　武藏　岩田たか子

○

箏の音にそと笑み給ふ若殿の黄金の太刀に夕かほ白き　常陸　酒葉雫女史

○

君と別れかへる眞砂路月ふけてなゝめにうつる影あはれ淋し　奈良市　竹田菫子

○

別莊の姫樣奏ずる箏の音の又洩れきたる春の朧夜　吳市　大上くま子

折にふれて
乳母が家は青葉滴る松陰の清水の中の清き草屋根　山口縣　孤舟女史

○

君を戀ふる果てしもあはれ白浪の山にこそ鳴かめ磯千鳥かも　長野市　飯塚ぎん子

○

月さえて心もすめる秋の夜にれやのと近う虫のこゑする　麹町　加藤とよ子

○

郡なる君が面わの戀しさに配所の月をまた仰ぎ見る　横濱市　青木松江

負傷兵を想ふて

花とふり風ともなりて益良夫の白きベットに心ろおくらむ　大阪市　貴島波留子

○

小夜風に桐の葉のをつる暮秋聲たかう心細しやのきの玉水　牛込　たそかれ

○

吉野山かすみの衣かけしよりはなの面かけまたぬ日ぞなき　麹町　長田花枝

○

雪ふりて風は笵みて今日もまたかくて夕となりん山か家　羽後　黒丸とみ子

○

たび衣八重の汐路をはる〴〵と猶末ありと沖の舟かな　羽前　濟子

○

影二つ岸の邊近くほの見えて流れさゝやく誰れか面影　常陸國　川並芙美子

○

月影のすめる小川をかち渡る夏の夕べは涼しかりけり　加賀　勝子女

○

うれしくも己が手際の蕣草君が御影に今は捧げん　熊本　楢田萩子

山路蟬

石はしるたきのひゞきにあらそひて山路の蟬のこゑ〴〵になく　秋田　藤川季子

○

つれ〴〵に亡き君が影出し見るまどもる月に鳴くほとゝぎす　栃木縣　小西麗子

○

雨過ぎし御池の土橋褄とりて若き姫君螢追ひます　神奈川　中村紫翠女史

○

心あらは面影うつせ今日の月せめて此世になき戀人の　紀伊　萩園舎ひで子

折菊

一人みて歸るはをしき菊の花一本をりて家つとにせん　仙臺市　中川あや子

夕ぐれ山

薄すみの袖にこそにたれ夕ぐれの空にそびえて見ゆるとほ山　仙臺市　安進けさの

○

かりかれの聲きく毎に故郷の空したはるゝ秋の夕暮　豐後　矢野しづ香

○

幸なくてうらみの國に捕へられて一年餘り涙に暮らす　大隅　石田しな子

○

もえ出づる草より優る此の思ひ文に言葉にのべんすべなき　周防國　中村てる子

○

夕星の零くだりて地に落ちて匂ひいてしか白百合の花　羽後　大橋香織

未亡人

夢見つゝよみちの夫を思ふかな征討の門出男ましきけり　常陸　秋月女史

かへり花

年の内に再び春のめぐりきて櫻の古木立歸り花　滋賀縣　辰井寧子

○

み山路の草のもぐらに消えのこる雪の一塊百合花にして　伊豫　吉田須美子

戀

語られてさと赤らめしせ頰の色赤き心と君知し召さずや　能登國　杉下文枝子

○

痩せし身を哀愁の鳥を窓によせば思ひぞ迫る夕暮の空　周防　香畑女

○

思ひきや五里の山路を辿り來て花墓の友を見んとは　茨城縣　小貫芳子

雨後時鳥

雨雲は見なから晴れて夕月のさやけき空に啼く時鳥　神田區　吉田すゑ子

○

靜かにも世はをさまりて喜びの杯あげん時ぞまたるゝ　長岡　田中さい子

折にふれて

いつならんあらふ仇涙をさまりてよろこひの聲四方に聞く日は　三河國　榊原てい子

折にふれて

まいくるふ蝶をうらみて花すみれ水のまに〳〵流れゆくらむ　千葉縣　島海つる子

百合

せと見ればいつ生ひにけん白百合の一本きよく咲き匂ふかな

抒情文

日本女子大學教授　臨井文學士選評

天

○歌聲

京都市古川町西仁王門下ル佐野方　竹下季子

元は熊笹などが蔽ひ茂つて居た籔だつたのを、祖父樣が御慰みに刈りはらひなどして、平地になされたとやら、それでも二十坪位ひは有るらしい名ばかりの畑。今を盛りに胡瓜や南瓜の黄色花が咲きほこつて、折々可愛らしい「ぎす」の鳴く聲も聞える。こゝを斜に横切つて、山手の方へ行くと、わづか疊四帖半ばかりの小さい離家が一軒ある。嗚呼、この小さい離家、妾は此の弱い胸に湧き返る樣な苦痛や煩悶の起つた時、語る友なき悲しさには、いつも此處へ來ては、思ふがまゝに泣いたり歌つたりして、心の自由を得るので、妾が爲には唯一の慰藉場なのである‥‥とは言へ、今日ばかり此處に、悲嘆の涙にかきくれたことはあるまい。嗚呼不覺、恥多きことよ、最早泣かじな、必ず泣くまじ、と幾度強く袂を振り拂つても、淺ましくなさけなきことよ、熱い涙は自ら流れ出るを如何にせん。

今日から見れば、あれは父上が最終の御手紙だつたので有つた。今もなほ、一言一句胸にしみ入つて、どしては忘れることが出來ぬのである。

「わしは今夜、ひるの戰に勞れて、たはいも無く草を枕にして寢て居る可愛い士卒の顏を、日の光りにながめ乍ら、何だか家の事がなつかしいので、一筆書かう。照子、わしは御前が此の前よこした文で、どれ程安心が出來て喜こんで居るか知れんぞ。此の上ながら勉めてくれ、御年寄の御母樣への孝養は申すに及ばず、唯一人の弟彰の世話ぢや。千載一遇の今の時に、女の身だとて、茶をたて琴を彈くばかりが、本分では無いからのう。年は取つても田川大佐、決して人々に遲れはとらぬ覺悟、軍人が屍を野山に晒すのは、此の上もない名譽ぢや。君を思ひ國を愛し、其の上軍人の本分を知ればこそ、可愛い部下幾十の兵卒は、わしが目の前でいさぎよく倒れてくれるのだ。嗚呼、此の愛す可き我が子の親達に對しても、おめ〳〵生きのびて又故國

へ歸ろうとは、わしは思はぬぞ。だが、若し〱萬が一でも歸ろうものなら、其れは夢だと思つてくれ。よいか、照子、父の無い我が家だぞ。老寄の御母樣を助け、唯一粒種の可愛い彰を、立派な人間に仕上げるのは、誰れの務めぢや。照子、汝の他には、だれも無いぞ、よいか、賴むぞ、しつかりしてくれ、賴むぞ、照子。」あゝ、此の血と涙を込めたる父上の御文、妾は膓を斷たる、思ひして、其の當時は母上にも聞こえ上げて、只一人涙を呑みつゝ、幾度ならず繰り返して拜したのであつた、けれど、御心强い父上を知りぬける妾は、唯々御命のまゝに我が家の務めに骨肉を碎いたならば、總べては足るのだとのみ考へて、幾條かの悲しい文句が今日眞實に成ろうとは、更に更に夢にも思ひはせなかつたのに……。今朝情ない風の齎たらした唯一通の報知狀よ。母樣、あの弱々しい御年寄の母樣は、悲しみの涙一滴だに御こぼしなさらなんだ。が、然し又只の一言も仰しやらで、そして、長の年月櫛けづつて長いあの髮を、根元からぷつつりとお切りなされた、その御心、その御振舞、女々しいか知らねど、妾どうして泣かずに居られやう。が、其れはまだ〱あきらめる事も出來る。運命と思へば、分別する力が無いでもない、母上と妾とは。されど、嗚呼されど、一人の弟彰は、今學校の遊歩塲で此の悲報を夢にも知らで、愉快に遊び廻つて居るだろうに、彼れが大好の大好の御父樣が戰死と聞いたら、幼心のさてどんなに嘆き悲しむ事やら、と妾の胸は、今悲しみと可憐さに亂れて、千々に寸斷される思ひ。折柄、遙か彼方の街道の松林の中よりかすかに漏れ來る唱歌、中に、天眞爛漫可憐の弟彰が淸き聲も交りて……。



（雨評）筆に今少し花の欲しきものはあれど、しつかりとしてたるみなく言ひまはし整ひたる、文の骨を得たるを以て天とす。

地

◎寫眞

靜岡　たか子

紫紺の袴に小さき辨當さげて、春秋三年、うまで通ひ

し學びの庭よ。朝には文机ならべて人の道を學び、夕には袂連ねて歌ひつ語りつ睦み合ひにし我が友よ、あはれ思へば、それも四年昔のゆめなりけり。其の折りその頃思ひ出づるだにほゝゑまれつゝ友への便りいつもいつも此事のみくり返しても、なか〳〵にあかぬ心地のせらるゝぞかし。

今宵しも亦、業卒へける折りのうつしゑ取り出だしぬ。おゝなつかしき師よ友よ……。同窓の會もあれど、いかで此の師と此の友と、かく一場に集まりてまみゆる時のあるべきぞ。あゝ戀しくもなつかしきは、四年の昔よ。

なみ居給ふ師の君々よ、しばし拜し參らせねど、御變りはあらせ給はずや。おゝ變らせ給ふまじ、御壯健に妹等をいつくしみ給ふらむ。かの頃いたく老い給へりし靜野先生の御ひげの、いかに白うなりぬらん、己等の祖父樣と申し上げし方なりしよ。

五十一人の同胞中、第一の美人とたゝへられし花子の君、ふつくりとせし頰。よしや其の紅はこゝに漲らずとも、變らぬ笑みは、長久に己れをなぐさめぬべし。玉子・俊子・賤子の三君は、我がクラスの三筆よ。競技にはヒケとらぬ虎子の君、用事の外口きかぬ鳥子の君は、一幅對の奇人なりしよ。無邪氣に笑ひ給ふは、テニスの選手石子の君よ、常々ひきつめて結び給ひし束髮の、目に見ゆるやうなり。大人びてすまし居給ふは、末子の君よ。母か姉かと思はるゝ時もあれば、幼き妹弟の如く持てあます折りも有りしよ。今は敎の鞭を取らせ給ふとか。雪子露子瀧子君子の君々には、花の都に物學びし給ふよし、御羨ましき事よ、うつむき給ふは、裁縫嫌ひの貞子の君よ。されど今は故郷の裁縫所に通はれてありと聞きぬ、聲のよき民子、畫伯の清子、文章家の秋子、雄辯家の鐵子、いづれもものゝたまはぬが不思議なり。此君彼君と雙手にあまるばかりは、早や一家主婦となり給ひぬ。級にても丈くき方なりし松子の君は、秋頃母君になり給ふとか。なほ一人毎に書かば、夜も明けなむ。

あはれ、袂分ちし其の日より、誰れも彼れも戀しくなつかしく、行きあひにし折り、訪ひつ訪はれし折り、いづれ淚ならぬはなし。師友戀しき毎に、此のうつしゑ取り出でゝ、行末長く健康をぞいのるなる。あはれ、此の君等の唯一言なりとも、もののたまはゞ、いかに嬉しかるらんを。

(雨評)　感情はさして動くものなけれども、才華のにほひこぼるるも

のあるを以て地とす。

人

○散浮く花

神奈川 佐久間芳子

さまで廣からぬ流れ乍ら、源を十里の山あひに發して、此の村を西北より南へ滔々洗ひ去る鶴見川の、一碧深潭、岸の野茨の花の影を涵して、香を漂はす所を、戀が淵とよぶ。其の戀が淵に昨夜美はしい溺死者が有つたとの事髪の亂れもまだかきあへぬ、寐ざめの床に、ふと耳にして、あなやと胸を轟かすので有ッた。固より何處の誰とは知る由もないが、私に同じ年頃と聞くだに胸つぶれるばかり。まして姿かたちもよのつねならずすぐれて居たと云ふではないか。どんな悲しい理由が有つて、可惜美はしい青春の花を、慘くも淵に散らしたのであろう、それも、世にも人にも知られず、水底清うとはに安けく眠り得る事か。むくつけな里人の手に引き上げられで、路傍に芥を捨てる如く、遠野の末に葬むられたといふ。其の父母の世に在つて、我が子の果を斯と知つたら其の歎きその悲しみ、思ひやるさへ身も消ゆる樣、せめては其跡を弔つてやりたいやうな氣がして、忍びやかに家を出た。初夏の空は拭つた樣、塵一ひらの雲もとゞめぬ、朝風爽やかに袂を拂つて、踏む道芝のほろ〳〵と散る心地よさ。吾が足音に驚いて、側の水田に、どぶん〳〵と蛙のとび入るもうれしい。稻田の蛙のつきる處、一里の長堤目もはるに、咲きつゞき咲き盛る野ばらの浮く樣な花の香に、袖も裳も染まりさう。淵邊に立つて見下せば、扨も怪しいは水の心、昨夜の悲劇は何處の空を吹く風と云はぬばかりの流れは、ありし一昨日につゆかはらぬ。此の水此の川、有情のものならば、とはの安息とてゝに身を投げた人の、胸の秘密を語つて欲しい、胸の小琴の絶えぬ響きも、あらはには、世には人には打ちいで能はぬ、弱き女の私ではあるが、世にもあはれな其の人の上に、灑ぐ涙は持つて居るものを、此の水此の川靈あるものならば、美はしい花の姿をこの淵波に沈めた時、上と下とに流れを開いて。何故に其の人に恙あらしめなかつたであろう。

思ひつゞけて佇めば、其のかんばせも面影に立つやう。心ばかりの手向にと、岸の野ばらの花をつんでは投げ、つんでは投げ、茨の刺に我指先の赤むも知らず投げて

居た。永遠の秘密を囁やく樣な水の流は、夢とほの白い花びらをのせて、何處迄もゆくら〳〵に。あゝ口さがない里の童にうたはれて、いつの世迄もあはれを殘す美はしい人の其和魂は今いづこ、人の涙をそへても流す、散り浮く花のゆくへはいづこ。

（雨評）情少しくわざとらしくおぼゆる嫌ひはあれど、筆の進行よく統一秩序を得て整ひたり。且つ末段散り浮く花の趣向の工夫を取りて人とす。

秀逸

○胸の悶え（某青年にかはりて）

長門國萩　孤菫女史

あゝ不幸兒、不幸兒、吾は全く世に不幸兒の一人である。身は相當の資産家に生れ、然も幾多の兄弟ありながら、吾はやはり不幸兒である、其の身はたとへ賤しう生るとも、愛なる父母の懷に抱かれて、其の溫い情に浴することの出來る人ほど、世に幸福の者はあるまい。如何に身は貴く、財寶に包まるゝとも、此の愛の泉のかれはてた、沙漠の家庭に生て立つて、嘗て人生の溫かさを知らぬ者ほど、不幸の事はあるまい、あゝ、吾は家庭てふ者の、如何に暖かなものであるか、母てふものゝ、如何に愛あるものであるかを知らぬのである。世を皆冷酷、人は皆輕薄無情の者とのみ思うて、自からすね、自ら怨んで、心に煩悶の絕えまがない。あゝ、こはそも誰れの罪であらうか。

我が生みの母なる人を、われが未だ乳房を慕ふ其の頃に、故あつて我が家を辭せられたのである。其の後幾人か母は變つて、今多くの弟妹は、皆我が異胞のもの、しかも、是等の母は、皆其の傍にゐて、溢るる愛情を注ぎて居るのである、さるを、誰れに頭一つ撫でられた事もなく、冷として水の如き眞只中に育つた我れ、心中寂漠を感ぜずに居られうか。世の多くは、まだ母の袂にむつれ、其の出入に、附きまとふ頃から、我が心には一の蟠りがあつて、其のあどけない筈の顏は、憂愁の色もて掩はれたのである。それと共に、彼等の如く、眞の愛情を注いで呉れる我が母は、何處にあるのであらうかと、常に我が小さい胸を往來するのであつた。が、既に世にすねた我れ、誰れに問ふでもなく、只一人心中に悶ゆるのみであつた。

あゝ、多情多恨のわれ、茲に幾歲月、運命の神に飜弄せられ、世の辛酸の數々、悲風慘雨を嘗めつくして、滿々たる不平の念は、益々募り、身を立つべく學んだ

一片の理性は、徒らに我が煩悶を増すのみ、何等希望の光明をも認め得ず、懊惱、恨愁、年と共に、月と共に、日と共に、募りに募つて、今はた得堪へぬのである。

あゝ、吾は遂に此の憂鬱の境を脱し、此の愁雲を排して、清麗なる光に接すはことは出來ぬのであらうか、あゝ、我れは遂に煩悶に死せんのみ。わが母なる人よ、今何處に、如何に。われが如き煩悶ありやなしや……。

（雨評）胸の悶えは能くきこえ申して候。母をよびかけたる末段のうつり方、餘りに急にして面白からず。今一入の工夫を要する結末なりと思ふ事に候。

○み墓の前

福井市實永上町五四　榎並保子



一

青う〳〵苔むせる此のみ墓の下に眠りますか、とはに、君は、戀しき君は、五年目の今宵、不遇の妾の再び君がみ墓を訪ひしと知り給ふか、君よ、なつかしの君。み靈いまさば、聞き給へや、あはれ、浮世の風は、何處にても冷たきものにてありし、線香の煙ほ細う立ちぬ。

二

あはれや、ひとり此のあれにし庭に、君がたくつき殘して、一度は、あらき此の世の浪にも、さすらはんとて出でしは、そは五年前の今宵にてありし。――たゞ、ひたすらに樂しき空想にふけりつゝ、あらぬ幸とあらぬ光明とを願ひつゝ――されど、されど、そは、父なき母なき此の世に、かよわき女の身の、あまりに力よわくつらき業にてありし。あはれや、君。世にさすらふこと五年、たゞあらき浪にもまれのはて、今又此の目の下に、ゆられゆられて、うらぶれの一人淋しく悶えと憂へとを懐いて、君がみ墓を訪ひにし妾が胸は、……君、あはれと見給はずや、君。月の雫か、一滴冷かに頸を打ちつ。

三

許しませ、君。女心のたゞあさはかに、汚れし此の世に、あらぬ幸得んとて、五年が間、あれしまゝに、草

生ふまゝに、すたりしに君がみ墓を訪ひもせざりし罪を、嘗て君がみ墓に誓ひし言の葉‖‖世に富も思はじ、戀も思はじ、世にも出でじ、たゞひたすらに君がみ墓守らん‖‖に背きし罪を。

あはれ、今こそは、永く世と緣を絕ちて、並びし此の三つ――父上――母上――君――のみ墓守りつゝたゞ誦經に此の世を終んかな。

線香の煙はいつしかゆるう消えつ

(雨評) わが過去の夢をくど／＼と述べずして、あつさりとほのめかしたる意匠は、此の種の問題の作文としては、平凡をまぬがれたるところなるべし。されど、情熱のなほ足らぬををしむ。

○居候

神奈川縣都筑郡新田村新羽　中村三重子

どうしても寢られない。

　嗚呼、妾は何故、淸き山や川や小天地の幽邃な樂土を捨て、斯樣な塵の都に來て、斯樣な荒浪にもまれるのであらう。えゝ、何度繰り返して考へても同じ事早く睡てしまはう、又寢過してもして、叔母樣にどなりつけられると大變だから……。幾度寢輾りしても、妙に眼が冴え／＼して、什麽しても眠られない。暑くて寢苦しい故かと思へば、左樣でもない、戶の隙間から差し込む月は、靑々と蚊帳に宿つて、夜風は時折冷々と其の裾を波打たせる位だもの。

　およそ世の中に、居候程情なくつらい者はないと聞いて居たが、これ程だらうとは思はなかつた。ア、考へれば考へる程、妾は愚であつた、白痴であつた。何故母ア樣の仰る事を聞かなかつたらう。今となつて見れば、母ア樣のお言葉は、一々其の的に當つて、妾の必ずと放つた言葉の矢は、半分以上、否、まるではづれて居るてはないか。併し、妾が此家へ來た當時と云ふものは、今の樣に狂瀾怒濤の荒海とは感じなかつた。居候、成程妾は居候には異いないが、母ア樣と此の家の叔父樣とは、血を分けた兄弟で、妾は其の姪ではないか、叔母樣は何と思つて入らつしやるのだらう。只居候の食ひつぶし!! あまり情ないではないか。晝の內こそ學校へやつて下さるけれど、復習や豫習の時間は少しも與へては下さらず。せめて寢る間にもと思つて、少し遲く迄勉强して居ると、昨夜抔「竹や、油費えな、早く寢ておしまひッ」と、奧から響く叔母樣の聲。下女は最うとうに寢て、起きて居るのは妾一人なのを御存じてありながら、態とかう仰しやる。尤も昨夜斗りではない、いつも叔母樣のお言葉は、薄氣味の惡い謎の

樣な、舌に針がある樣だ。
昔の我が家ならばいさ、現今の家計は決して豊てない朝闇いから夜更ける迄、お父樣や母ア樣が精を出されても、定めの租税すら納め得られないと云ふのに、どうして學資を出して下さいと、云はれ樣か。どうして他人がつれないの、勉强時間が足りないのは、不平を訴へられ樣か！實に妾はそれが忍びないのである。故に妾は心を取り直して、只々忍耐の二字を守り、幾度か浮世の荒浪と戰つたが、運のつきか、刀は折れ、矢はつきて、征衣もしどろに、進退こゝにきはまつたのである。もう詮方がない、恥を呑んで歸らうか、くはしく手紙で申し上げ樣か……。けれ共、今更何の面目あつて故郷へ歸り、父母や友人に面を合せる事が出來樣ぞ。が……ア、何も彼も運命なんだ、運命の神業なんだ、只自分さへ張り裂ける樣な胸も押し靜め、縺れ糸の樣に亂れた心を押し隱して居さへすれば、又和氣洋々たる春の海の樣な處へ出られる事もあらう！お竹どんの能く寢て居る事。妾は胸がくるしくて、どうしても寢られないのである。嗚呼。

（雨評）「どうしてもねられない」と、突如として起したる冒頭は、面白し。結末もお竹どんの熟睡をとらへ來たれる意匠はよけれど、「妾はどうしてもねられぬのである」と言ひとめたるは、平凡なり。一層の工夫を要す。

○金太郎

三河　白菫女史

金太郎、金太郎、そは妹が愛でつる人形の名ぞ。五色を縫へる綾衣著て、くわゐ程の頭もてる、美しの男形、ぱつちりと涼しげなる眼、薄臙脂させる花の唇、「なめてやりたい程可愛いわ」と、如何に妹が優しの愛を身一つに負ひけるよ。

金太郎！。さても、春日暖き南の椽に、隣の淸ちやんと、おもちやの鍋竈に、妹がまゝ事可笑しき時、汝は花蓆の賓客とて、綴糸の敷物に、小皿に刻む若菜の饗膳を面白可笑しく受けしならん。「お乳お上りよ」と押し開く紅の襟に、優しく小さき乳首を、嬉しとなれば含みしならん。「お母樣になる稽古するの」に、「學校通ひの眞似するだわ」にと、汝はいかに妹がこよなき友なりしか。さあれ、そは悲しき夢と消えしよ。落葉はら〱と、其れより秋の暮「姉樣、わたい今度は迚も」……と、蠟より白き細い手に、妾の腕に縋りし時、いとほしさと悲しさに言葉もなく、せめて終焉の心遣りにもと、手渡せる汝を、嬉しさの胸にかき抱きて、哀れ妹は長き眠に入りぬ。涙とともに、汝が優しき主人

の手より、妾が膝に歸りし折り、汝は唯世にも悲しき遺身の品と變れるなりき。紫のさゝべり床しう、五色の綾衣縫ひし時、かくも涙の種なる運命をもちて、遺身になれとは言はざりしを、さても悲しき汝金太郎よ」あゝ、この金太郎！。眺むる度に、妾の胸は張り裂けんとするを、さゝ川の水に流して、悲しき思たゝんとせしも、幾度なりけむ。見るつど、いとほしの涙いや増さるを、妹が奥都城に埋み去りて、思出の種失はんとせしも、幾度なりけむ。さあれ優しき妹が愛でし汝を、流し埋めんには、妾は忍びざりき。かくて、心弱き妾は、空しく汝を、三年香箱の底に秘めぬ、さても汝にもやつれの影見ゆるよ。狹き小さき香箱の底にして、春は花咲く野邊に汝を負ひ、秋は暖かき床にかき抱きて、ひたはり深かりし優しの主人を、いかに心に忍ぶらん、哀れ金太郎。

（雨評）綺麗に作られたる金太郎とのみ申すべし。

○友千鳥

越後　すゞしろ

波静けきはその松原に月一つ、ゑがける手製の端書に、お暑さたへがたしと承はるを、こゝにはさる事もなう、日ねもすすが／＼しうて、病もよき方に候へど、契らせ給ひし御音づれ、未だになきこそ、つれなうもうらめしう存じ候へ。大事の大事の御一人子にて在せば、母様のケレウソート臭きあたりへはやらじと、いなませ給ひてにはあらずやと、氣づかはるゝ心の程、いかで汲ませ給はりたく候。つゝがなき身すら、契りし人のとはぬは心にくきを、ことはやめる人、しかも、不治の病に二とせ餘り、今は餘命もなき身、いかにおのれの恨めしうもにくゝも。血あり涙ある長き／＼水莖の跡、手に結びて、涙の種もつきよと斗り泣きむせびつゝ、近くにとはんといひやりしより、早くも廿日は過ぎぬ。其の間夢にも忘れしにはあらざりしが、いかにせん、餘りに母のいとはしうも恐れさせ給ふを。とてもながらへぬ友に、かく迄物思はしめしよと思へば、今更ならず身もよもあらでひた泣きに泣かれぬ。病はよき方と見ゆれど、よわ／＼しき筆の跡、露筆力のなきこの繪、あゝ心がゝりなるよ。いかにねぎまつるも、かよわき身とて免させ給はぬ悲しさ。せめて夢になりと逢ふよしもあらばと祈らるゝさへ、涙なり。歸らせ給ひしと、人づてにだにきかざりしを、ふりは

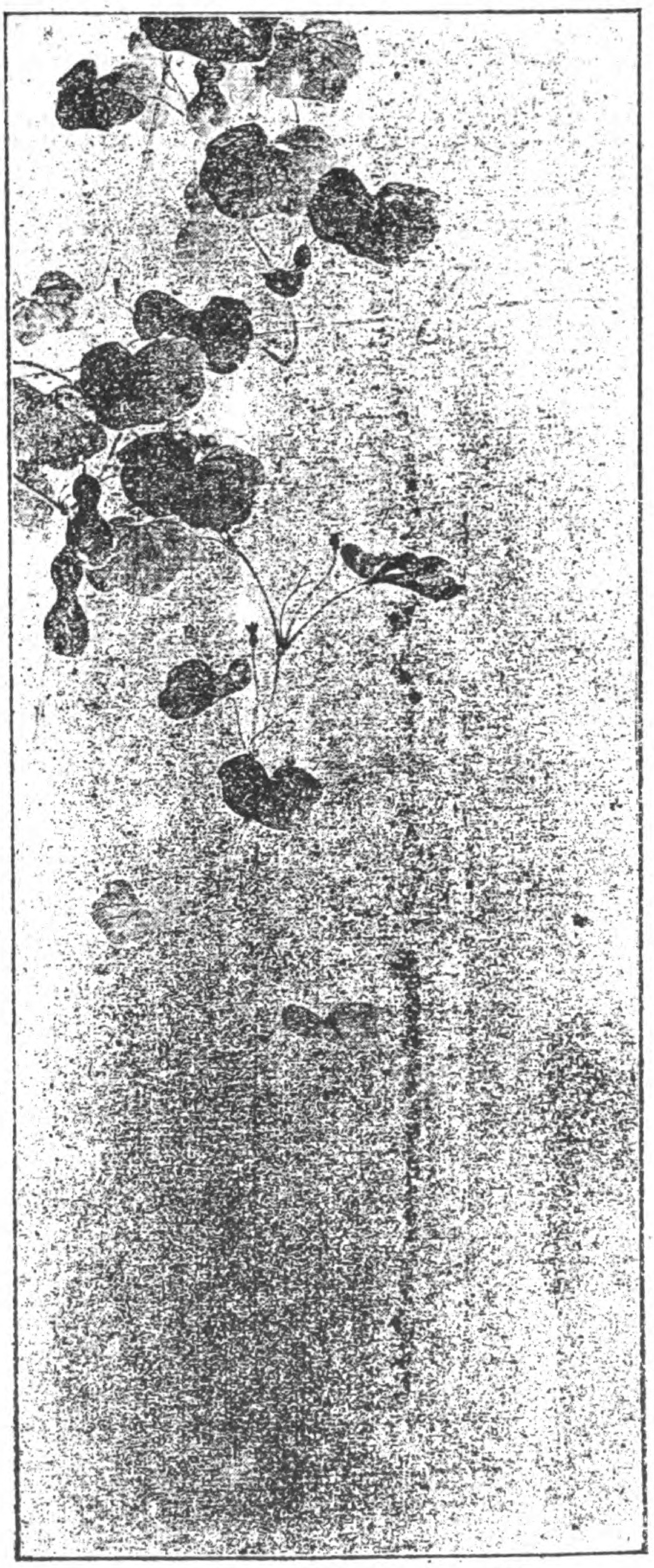
へての音づれ、夢かと斗り、たゞうれしさに走りいづれば、見覺えある御召に絽の丸帯せさせて、一しほほそりし肩のあたり、目につきてあはれなるに、お顔の美しきお色もゑくぼも消えて跡なく、たゞ淋しげにゑみつゝたち給へる、さながら別人のやう、この世の人とも見えぬに、そゞろ身ふるはれしも、なつかしさに近づけば、後の方へと。こはとはざりしを怒りてならん、いてわびまつらんと、走りゆけどゆけど、隔たりはそのまゝ。はては、つかれて見なれぬ野邊にたふれぬ。やがて心づけは、こはいぎたなき朝いの夢、身は汗にしとゝ。顔色いたくすぐれずと母は宣ふ、やがて届きしは、また友よりの便り。

とてもかくても、此の世にては、なつかしき御目もじかなはぬえにしと思ひあきらめつゝも、せめて寫し繪になりともと思ふは、うせやらぬ凡惱のあはれさ。いかで近き頃の一葉めぐませ給はずや。昨日今日は一しほはなちがたき友なるケレウソートの近くへは、置き申さじ候を、くれ〳〵もこの唯一の願ひゆるさせ給はりたく、餘ははかなげなる筆のはこびに推させ給へ、かしこ。

母の前に文もてるまゝ、泣きふしぬ。せきくる涙いとゝしうて、しばしは顔もえあげず、あれは、あゝゆめならず現なるぞうれしき母のみゆるし、午後よりとの仰せ。あまりのうれしさに、思はずふし拜めば、母のお目にも、玉かあらぬか、露の一滴。はやくもうつるゆめの面かげ、うれしさ悲しさ、千々にみだるゝ心のうち、あゝ。

あまりにも細り給へるみ手をとれば。

いかに涙のわきかへるらん。



田中桃園君筆

(雨評)其の友の境遇を、あはれなる苦しきものとして、少しくこれを語たり、それに對するの涙を添へなば、はじめて泣かるるの抒情文とならんか。

○雲の彼方

石見國濱田町　杉浦翠子

蒼茫の海を越えて、遠い遠い雲の彼方、夏の神が彩筆を弄してしたゝか繪いた帷幕の掛れる海の彼方の美し國、望めば杳然として果しなき、幾萬里ぞ、見よ、夕陽に漬つて、紅の雲の靉靆く其の境が、この俗界以外の神の聖地である。嗚呼、可愛いゝとしい妹の美いちやんは、乾度あの錦の帷の裡に……あゝ、永遠にゆかしき雲の彩、紫金色に輝く西の西の國、どうしたら彼處へ往かれやう。昔、太郎のやうに、龜に賴んだら、連て往て呉れやうか。美坊は紅い雲が欲しい〳〵と云て、白い襦袢を着て海水浴をして居るが、其の後、あの可愛い姿は見る事が出來なくなつた。私が想像するのに、魔の如き大濤が、善いちやんと呑まうとする時、金髮を垂れた優しい天使が現はれて、美坊をば、あの軟かい羽の下に於いて、頰ずりしながら、浪の上を楚々と渡て、終にあの紅い雲の裡に這入て了たのであろうと。善坊は母樣に別れて、ひとり異郷に居て幸福であらうか。聞けば、天國といふ處は罪ある者の入るを許さず、いつも春のやうに萬朶の花が咲いて、鳥は讃ひ蝶は舞うて、何れも無窮漠大な神の愛に浴して居るさうな。母樣どころではない。美さんは、最と〳〵深遠な愛を享けて天の父樣の寵兒となつてるのであろう。夫れでも、私がこんなに泣いてるのが、天國とやらに聞えたら、乾度美坊はあの彩雲の中から顏を出して、姉樣と叫ぶであらうと、私は久しい間、眤と海のあなたを眺めて居たが、一歩一歩橙色に黄昏に沈みゆくばかり、最早、眞紅の色殘んの影だにない、たゞ暮色靄然として靜かに〳〵。……私は落膽して美いちんと叫んだ。

今しも、紫水晶の山の端洩れて、現はれたのは、女神の御船なす三日月の纖影、想ひ起す、嘗て美坊が、御月樣の御船に乘るのよと、云た事を。

(雨評)今少しくしめやかなしんみりとした筆が欲しい心地する。

○あはれ亡き友よ

伊勢國四日市市大字濱田　丹羽たい

あゝ悔しきかな悲しきかな、散りにし花は春くれば、時をたがへず咲きぬるものを、末の松山すゑかけて、緑の色の變らじと、契りし君は、散り行く花に誘はれ、

行きて歸らぬ旅路に出でたゝれ、今は亡き人の數に入り給ひぬるぞ、いとも悲しききはみなる。

蕾の花の、夕の嵐におそはれて、果敢なく散り、あだし野の露の、朝風にさそはれて、空しくきゆるも、世のならひとはいへ、斯くまでも脆きものとは、思はざりしを。あゝ思ひ出づれば、長き年月、水魚のまじはりもたゞならず、ひかり長閑き春の日は、野邊に出でゝは、蝶にも羨まれんばかりも、むつれあひて、樂しく暮し、秋の夕は共に出でゝ、千種の花のいろ／＼に、かはる野のべの草村に、虫の聲を聞きながら、千草に結ぶ白露ふみしだきて、そゞろ歩きせし時、空にかゞやく月影よりも、虫の音よりも、さゆる氣に美しき理想を語りあひ、嬉しきことにつけ、悲しき事につけても、心の底までうちあけて語らひし友の言葉、今はいにし夢と消えにしか。あはれ、朝の雨、夕の月も、共に樂しく賞でんとこそ誓へ、一人殘らん身が、果敢なき思ひ出になれとは誓はざりしを。あはれ來ん年月の眺め、誰と共にか賞で語らはむ、あゝ幾度花はかへり／＼て咲き匂ふとも、戀しき友はとこしへに、歸りますべうもなし。あゝあとに殘されし身は。心のとも綱うちきれて、あぢきなき世を渡る、うらみのいかり綱、いづこにおろさん、寄るべなぎさに漂ふ捨小舟、取りつく島もなければ、いづこをさして漕ぎいでんすべもなき身のいじらしさ。思へば實に果敢なの妾が身よ。あななつかしの亡き友よ。君は今何處にいかに。

（雨評）筆すなほに文は整ひたり。唯だ平凡なるをいかにせむ。

○月の夜

上毛新田郡强戸村字北金井　河内とめ子

皎々たる月は、今し庭前の老松に懸れり。彼方の峯は淡烟に閉され、綠濃かなる郊田の稻葉には、瑠璃を連ねたらん如き白露の、風なければ落ちもせで、一夜の生命を葉毎に宿しつ、小川の水の岩にせかれて、やさしき樂を奏する、草葉の蔭に、熒々たる螢の、僅に夏の名殘を留めて、明日なき露の命を寄せぬるも、いと哀れに、人生の無常を示すが如し、思へば、我れも、夢の浮世を過ごせしこと此に十五年、爲すこともなき此の吾身、あゝ、父母は、今宵の月を眺めて、如何に此の身を思ひ出で給ひてならん、あゝ吾が同胞は、今如何に何にをして、皎々たる明月も、いつか村雲に蔽はれ、あたりはうら淋しく、更け行く空も、いよゝ靜に、遠く聞ゆる犬の吠聲に、身もしみ／＼に冷え渡り、轉た懷舊の情に堪へず、夜寒の床に打ち伏せば、彌やますものは涙のみにて、時刻を告ぐる山寺の鐘、早や三聲まで響き、杜鵑の哀聲かすかなるもいとゞ。

（雨評）文は整ひて出來たり。唯だ平凡をまぬがれぬををしむ。

俳句

巖谷小波選

特別第二賞

撫子や日本に生れ女の童

相摸國小田原緑二丁田　倉橋よしえ

〔評〕此句日本女性の眞面目を現はして誦去誦來いよ〱床しきを感す。

特別第三賞

羅や袂を透ける小短册

千葉縣山武郡千代田村岩やま五十石　小川芳枝子

〔評〕何等の巧緻、何等の優美、あはれその短册に此句染めて欲しき心地す。

天

洗濯の盥に落ちぬ柿の花

岐阜縣　華醉女史

〔評〕田園の趣味津々として而も野娘の却て愛すべき風情あり

地

橋番の家の低さよ雲の峯

美濃國山縣郡谷合村　碓井邦子

〔評〕その家には翁の[illegible]の夢閑なるべし、よき見付所かな

人

撫子を踏むに得たへぬテニスかな

北豐島郡王子村四三一小泉方　朴蝶子

〔評〕テニスを弄ぶ快活にして又撫子を思ふ優雅あり、新日本の婦人は正に斯くこそ。

秀逸

日くらしや午後の山寺閑かなり　神田　平田俊子
千両の鶯買ふて朝寝かな　紀伊　木村八重子
米をとぐ樵夫が毒や岩清水　常陸　小泉捨紫子
花桐や赤き衣ほす寮のには　信濃　帯力ささへ
秋の山町見ゆるまで登りけり　大坂　杉田孤泉
梅が香や十五城より此の月夜　紀伊　香蘭女史
五月雨や錆に消へ込む鐘の銘　神戸　萩野かの子
谷八谷和田門の田植へかな　伊豆　古見織女
奥百合や木立に深く籠り堂　福井　高柴小静
紅屋までつゞく小道や蓼の花　群馬　上原芳子
青嵐朝寝のかやを襲ひけり　茨城　柳町さとえ
夏やせの手にふれやすき鏡かな　神奈川　中村ゆかり
片雲の月走りけりかくれけり　安藝　中村東雲

涼しさや月のくゞりし竹折戸　下野　松本花蓮子
お前まで涼みに來たか影法師　紀伊　萩廼舍ひて子
汐風に涼しき金砂銀砂かな　横濱　石山ひて
女人塚新しう飛ぶ螢かな　磐城　鈴木玉子
公達も出てゝ四條のすゞみ哉　下總　古矢枯葉
石竹や破れし小舟の舳の錆　伊豆　葉村薫子
夏の月柳に雨の名殘かな　横濱　小峰園子
手のとゞく程の月あり夕柳　岐阜　田中悦子
から〳〵と俥曳きたすやなき哉　日本橋　かたばみ
詩に眠る顏に吹くなり青嵐　武藏　中村清
橘守の膝のうへ飛ぶ螢かな　紀伊　水蓮女史
逃げ所なくて湯に入る殘暑哉　山口　寺内つき子
藻の花にあぶなき蟹の鋏哉　越後　金帆女史
裏店や南瓜にならぶ古雜誌　長野　横關とれ子
遊子ひとりふらりと休むへちま棚　信濃　都筑薫子
蚊柱を斷て流れし白矢かな　本郷　金井すゞ
なでしこの記章や支部の婦人會　小田原　伊藤ふく子
百合の露こぼれてかほる清水哉　兵庫　柳田百合子
撮り袖の友禪かほる牡丹かな　八王子　大野ふさ子
貝拾ふ小女の足に春の水　神奈川　近藤まさ子
時鳥墨繪の様な京の町　高岡　木津すみ子
心置かせ給ふな叩く水鷄也　神戸　吉田霞江
日盛りや親に替りて渡し守　横濱　青木まつえ
嫁入の夜をつり初めし蚊帳哉　丹波　柳原いか
梅に落つる音も閑なる讀書哉　攝津　渡邊初實
菊の香や配所の日のひやゝかに　麹町　加藤とよ子
極樂の朝風ふきて蓮かはる　伊勢　米澤正子
和らかに風の生るゝ柳かな　千葉　佐久間しげ
燈籠の消へて靜かな月夜哉　名古屋　鈴木政子
お百度の人去つてなほ蜻蛉哉　仙臺　佐藤日吉子
賤が家の狹きをかこち門涼み　兵庫　梅子

水盤にうつりてすゞし夏の月　神戸　光子
涼しさや石蕗を動かす瀧の音　淺草　添田ふぢ子
紫陽花や雨晴れて猶うす曇り　北品川　花橋
玄海や怒濤の上の雲の峯　千葉　高地とく子
青嵐や虹遠山をめぐるとき　茨城　石塚靜江
五月雨や背戸の小川のさゝにごり　美濃　酒井安子
夕立に濡れて麥刈る男かな　美濃　宮部俊子
麥刈つて淋しくなりぬ段畠　美濃　大野秀枝
六月や風をむかへに橋の上　丹後　きさを女史
船納涼定紋の幕を張りにけり　羽後　池井清子
むき〳〵に七夕まつる山家哉　和泉　紅海女史
つり床や夢もならさる蟬時雨　羽後　小山久子
眞清水に百合の一ひら流しけり　周防　中村てる子
海を見ぬ三日の旅や閑古鳥　周防　末次もと子
夕顏や女主人の京な古り　三河　小町隆子
鷺か住むと噂の森や夏の月　福井　榎並保子
織下りて庭に水打つ暑さ哉　磐城　中野櫻顏子
撫子に砂美しき河原かな　陸中　黑澤みつ子
涼しさや松すり出し夏の月　陸奥　白百合
飼猫の裾にまつはる暑さ哉　越中　菊榮
虫の音も秋催すや二日月　岐阜　季子
相會ふて暫し言無の蛙かな　長野　白薔薇女史
鳴り蟬や憚りもなく御所の庭　紀伊　松韻女史
薔薇の香文す紫インキ哉　青森　高橋優子
とり散らす書齋の中の螢窓哉　石狩　佐々木まさ
顧みてひそかに笑むや衣更へ　上野　津久井いくさ
蟬なくや一本たかき神の杉　下野　つゆ
とぼ〳〵と瘦馬もどる夏野哉　信濃　田川須子
岩清水爪投げ入れし浮枕　石見　杉浦翠子
曉や蜩に飛びくるきり〳〵す　埼玉　みゆき

消息文

日本女子大學敎授　鹽井文學士選

天

○都の友へ

岩代須賀川本町　服部貞子

またしても田舎の自慢聞え上げ候。夏も眞盛りのきのふけふ、朝に星を戴いて靜かに運ぶ杉の庭下駄、又なう輕うて心地よう候、よべ數へ置きし朝顔の、見事はづれて、垣根の外に僅に二つ三つ。悄けれど、うれしう候。黒く光れる此の顔洗ふべく、溢るゝ井水に近より候へば、可愛の小雀三羽、しきりに何をかついばみ居り候。見れば、きのふ過ちてこぼしたる米幾粒、さてもよき功德になり候ものかな。うがひしつゝ、我が草屋根を見やり候へば、此の間の雨にてや、いたく草々延びて候。さればか、低き家も、何となう高き心地いたされ候よ。

父が丹誠の里芋は、きのふ初ものいたし候。コロ〳〵とまろび落つる卷葉の白玉、惜しき心地いたされ候て、いたくもくぼみたる硯に受けて、先づ今日の日記のはじめに、二日、晴れと書き入れ申して候。新しき手拭を姉樣かぶり、今日は胡瓜もぎいたし候。こは私の丹誠に候へば、味は二重もの、一籠おくりまゐらせ候。風呂たいて、畑の父君母君待つるを、小屋なる牛の鼻なでながら、そゞろ眺むる紅の雲、あすもまた上天氣にて候。眞盛りなる卯の花垣のあたりかしましと見れば、蟬取博士の弟のかへりにて候。鳥もねぐらに、父母おかへり、喜しさは母の右手なる赤き〳〵ほうづきの一もとに候。にごり池にて洗ふ父君の鍬、夕日に映えて、蛙も歌ひ出で候。やがて樂しき夕げのむしろ、そはいつも、弟の蟬の話にて、にぎやかに候。風鈴の音に耳うちすまして揉みまゐらする父君の御肩、いびきは早も高う候。かくて我れ等が樂しき一日はつくるにて候。これ自慢の價あるものと存じ候まゝ、螢の光りにて一筆ものし候。かしこ

（雨評）御自慢の價は天と定め申し候

地

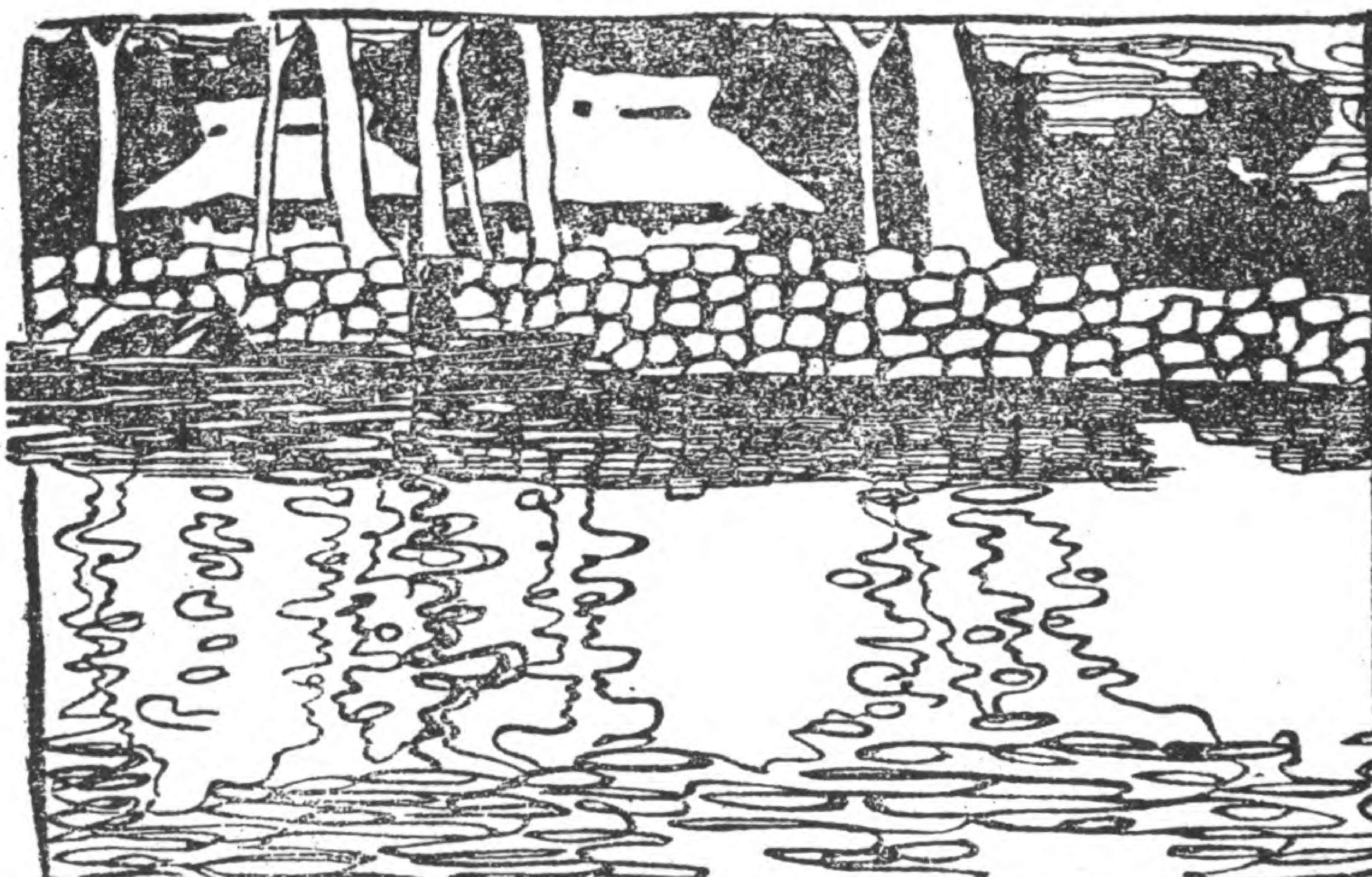
○兄を諫む

福井市寶永上町五四　榎並保子

兄さん、何卒、何卒お願ひて御坐いますから、人間らしい人間になつて下さい、此の妹が一生のお願いで御坐います。

兄さん、お父さまはお亡くなりなさるまで、兄さんの事ばつかしを、お心におかけ遊ばして、夢にも　定雄、定雄つて、兄さんのことを仰しやらないときはありませんでした。たゞ兄さんを案じ、兄さんを思ひ、兄さんを忘れないで、お父さまは、とう〳〵冷たいお墓となつておしまいなすつたのです。

しかも、兄さんは……それで人の子だ、人間だと云つて、み心に恥ぢることはありませぬですか。しかし、妹は今更、過ぎ去つた事を、くり返しは致しますまい、たゞ兄さん、此度は、み心をお直しなすつて下さい、而して、お墓の下のお父さんに、喜ばしてあげて下さい、笑はせてあげて下さい、安心させてあげて下さい。兄さんの母と、兄さんの妹は、此の田舎に、お父さんのみ墓を守りながら、ひたすら兄さんの御改心と、兄さんの御立身とを、祈つて居るので御坐います。



夏の川　〔天賞〕　府下荏原郡品川南馬場五四八　杉浦しづ子

（雨評）理に訴へずして一向情に訴へたる趣向面白し。簡にしてしかも熱情のこもりたるも面白し。地とす。

人

○鄙の友へ（都の友へのかへし）

三河西鴨郡石下瀬村澤田忠三郎方　霞溪女史

花は褪せ蝶はやつれて、さても怨

ある春の淡夢、漸く覺め申ししに、憎らしと思召さずや、五月雨の足の音。まして、詩人の胸や、いと〳〵なやみ候べし。げに梓弓春立ちしより暮れ行くまで、射るが如くに思ゆれども、落花流水止めあへず。ひと日〳〵に若葉の緑いやまさりて、さては詩しらぬこの身ながらも、美しき佐保姫のみ袖の後や追はまほしく候。さても懷しき君の玉章は、今宵庭の藤棚の下に、繰返し拜しまゐらせ候。巻きこめ給へる花片、詩人の君が風雅の手すさびならんと思ひ侍りしを、思ひきや君が悶えこめて、故郷の春忍べよとのみ心ならんとは、色も香もあせたる花を見るにつけ、み言葉の端を伺ひまゐらするにつけ、うたゝねの夢にも忘れかねつる故園の空や一しほ忍び出でられて、そゞろ思出の花片、人しれずひしと胸に抱き申して候。それにつけても戀しきは、管の根の長き春の日を、心長閑に里川堤打ちむれて、白手拭の姉樣冠りに、赤き裙をひるがへし、今日は芹つみ、明日は蕨折りと、歌面白く歌ひてし早少女の昔にて候よ、哀れ青春の若き血汐の湧くにまかせ、理想などにあくがれ候ひては、なか〳〵に憂き事の多く侍るを、まして失望てふ魔神のみ手に抱かれて、悲しき運命味ひ給へる君のみ心、推しまつるだに、涙のみに胸ふさがり申して候。さあれ宵の明星は曉の明星と申し侍るを、夢み心落し給ひぞ。おゝかくしたゝめ侍れる時、紫房三つ二つくづれ落ちて候、行く春の名殘と申すべくや。池の鯉に投げやらんも、流石に惜しうて、其のまゝまきこめ候。せめて君が紫檀のみ机の上に、床しき薫傳よとの願にこそ候へ、草々かしこ

（雨評）練熟せる筆のあとを愛して人とす。

秀逸

○山里の避暑地より都の友へ

長門國萩　孤菫女史

其の後は如何に過させ給ふにや、御地は今、夏酣の頃と存し候。紅塵萬丈の都を立去り候てより既に一ケ月、自然を友の深山住居は、眞に妾が理想に叫ひて候。曉に起き出て、星うつるまゝ清水に口を漱ぎ、手拭片手に、冷たき朝風を袂にはらませ、草露ふみわけて、そこはかとなく逍遙ふ其の心地よさ、あゝ君にも味はせ度く存し候。妾が今の假住居、固より數寄をこらし都のそれに、比ふべくは候はねど、縒はぬ庭は、自然の青苔朝毎に色をまし、やれし籬にまつろひたる朝顔

の、二つ三つ露ながらに笑み溢れたる、中々に得がたき風情に候。風は絶えず軒の風鈴を音づれて、聞くも凉しく、前を流るゝいささ小川、終日心の底を洗ひ、掬べば晝猶暑さを覺えず候。あゝ此處は眞に夏なき里とこそ存じ候へ。

又或夜は、水鷄に叩かれ、時鳥も音づれて、妾が小さき詩嚢を動かすなど、見る物聞く物一として、わが慰籍ならざるは無く、妾の命は慥に十年五年は延びて候。質樸なる田舎人は、よく妾を慰めて、又あかぬ思ひのせられ候。昨夜は里の小供と共に、程遠からぬ處へ螢狩致し、殆んど文も讀まれん計り得て歸り候。

あゝ此の快を、君と共につくさんには、如何に樂しう候はん。妾が今の不足は只是れのみに候。君よ、君がのぞませ給ふ、み歌の御料さ、必ず提げて歸るべく、やがての御目もじを樂しみに餘は何もくかき殘して候。

猶この凉味半ばをさきて、君が御健康をいのりまつり候。まづは右近、ゑのぷの露を硯にうけて、



女學生 〔地賞〕 淺草八幡町境內堀方 松浦あや子

（雨評）綺麗にすなほに整ひたりと申すべし

○海べの友に

東京小石川白山御殿町百三〇 服部けさ子

墳水のしぶきに、暑さの三分は消され候へど、堪へがたきは蟬の聲。なれてはいと耳障りにて、木深きがなかなかのうらみとは、病みます祖母の獨りごちに候。「暑い時には誰しも同じ事、左樣のことでは長者に成れませぬ」と幼きよりきかせられし此人にしてに候へば。其心の內も推し計らるゝに候。轉地をとて進め參らすなれど汽車に乘らずはゆく事ならぬ世の中。便、

不便は時によりての言ひ草に候哉。かゝる折り羨しきは、君が御わたりに候ぞ。去る四日附の御手紙、細引の聲えんや〳〵と箏さら〳〵認められしを見て、日毎汀のあたりのそゞろありきのおもはれ候よ。ましてけふは望の夜さぞなと涼しき夕磯の月影を獨りしむる幸多き君のさてはにくうも相成り候ぞかし。近づく夏の休み、夜の目もあはぬとは青森産れの松子樣よ。のみならず、皆勇みて海べに旅行にと出で立たすなるべけれど、私は此の夏はてうでもお留守ゐ役、冬物の仕末も付けたら、又殊には、　祖母のお伽に、蚊帳の外より風參らせんの心。……先日の如く今にも來給ひなどの羨しがらせは、今の處、おあづかりをねがはしう。草を置けば夕立の雲の黑うかゝりて。

（雨評）才筆なるかな

○繪葉書（花便り）

三河　白菫女史

第一信

明日と宣ひにし、よべの雨つれなうて、輕き風だに崩れんかと危う。哀れ園の牡丹の麗しき袂、今暫しだに待たじと、心もとなく候。落ちては枝に歸らぬもの。何をおきても疾う〳〵入らせ給へかし。

第二信

霧の絲に手弱女のえならぬ風情したる、雨のなごりも深き朝顏は、千種の花の彩、千草の露の色、床しき者に候、朝の間にいざ玉へ。み裳の濕れんが惜しとならば、庭の眞柴生の露はらひて、若竹の片折戸に出で迎へ侍る可く候かしこ。

第三信

正行寺の蓮麗しと聞くからに、今朝池にまかりて候。清き香薫る葉隱れに、誰れを待つとて汀によりし、美しの人を見候ひにき、花月卷のおくし清う、紅の袖口、目も綾なる後ろ姿、いしくもお許樣に似通へるは、如何ならん、亡き母樣へ御通夜の歸り路と推し參らせしは、僻目に候か、かしこ。

第四信

裏山の百合、殘りなに咲き出でて候。虹立つ夕、星の清き輝もてるけ高きを、手折らんはすげなら、罪深く候ふべし。夢まゐらすが惜しきに候はねど、剪まば露の落ちんも惜しう、唯手短き一莖のみ送りまゐらせ候。古代紫の花粉、雪ほど白き花片、いしく思召さば、雨の朝にこそお使てし給へかしこ。

（雨評）綺麗に巧みなる筆と申すべし

○梨に添へて

靜岡　たか子

かねて父事自慢の梨、例の通りによく熟し候まゝ、昨夕のまどゐに、一つこゝろみ候。夏姫が御手よりもりし白露のこりか、はたまた天つみ星のしたゝりかなど云ひ合ひつゝ、頬をおさへて食べ申したる事に候。今日しも向ひの姫の、町へ物うりにまかるほどに、何なりと御用をなど申すに、こはよき折と、少々ながら御目にかけ候。御味ひの上、もしも御口にかなひ候はゞ、母君のおゆるしを得て、御とまりがけに、御姿をお見せ遊ばされずや。夕月のもとに四つの袂をつらねて、打語らひながら冠を正すも、又立食の宴を開くも、をかしくは候はずや。裏の清水に筆しめしてかくは一筆きこえ上げ候。あなかしこ。

（雨評）氣のきゝたる文と申すべし



少女〔入賞〕　門司市楠町四丁目　小國敏子

○靜岡なる友の許に

靜岡縣小笠郡掛川町　武井鈴子

賤機山の青葉にそゝぐ朝の雨を、學びやの窓に、雲にかくるゝ富士の根を、夕の窓にながめ給ふきのふけふの君が朝夕、さこそ故里の空おぼしいでゝ、袂しぼらせ給ふ折りもおはしますらめ、學びの道に御忙しきはさる事乍ら、あまりに打ち絶えて御便りなきは、もしや御身につゝがのおはしてかと、そゞろ心にかゝるまゝ、拙き筆もて御左右伺ひ参らするを、あはれうるさしとゝがめ給ひぞ。まことや露置く袖を停車場に別ち參らせしは、春まだ寒ききさらぎの頃に候ひしを、流るゝ月日に關守なく、いつしか青葉しげり。若葉萠えいづる頃と相成り候。まして、昨日けふは卯の花くだし五月雨の、打ちしめりてのみ暮らし侍るものから、ありし昔の事思ひいでゝは、君います方眺めやらるゝを、あはれませ給へな。實に花咲く春を、野川の土手に、すみれつみつゝ、か

たみにもゆる希望を語り合ひしも、はや一年の昔と相成り候かな、紅葉かつ散る秋のみ山に、四つの袂つらねて思ふことなく歌ずしたるも、過ぎつる夢となりしよ。去るに、君には、日頃の御望みかなひて花の都に登らせられ、妾は草深き野末の里に、うもれ果てゝ暮らす身にて候を、あはれと思召して一片の御かへしたまはらば、わびしき夜半に、時鳥の初音きゝ得しそれにもまして、よろこび候ふべし。今しもみ寺の鐘の音あはれにひゞきて、軒端に小暗き櫻若葉に、一しきり雨の音づるゝ、物うきこの夕を、なつかしき君には、いかに過し給ふらん。ともし火明きみ机のほとり、御心長閑に文しらべ給ふやさしき御姿のまぼろしの如見え候ぞや。さらば。

（雨評）結末の意匠此の文の結びとして。妙を得たりと申すべし。

○病中より

東京麹町區飯田町六丁目十番地　董田春子

なつかしき御文、只涙もて拜し上げ候。御別れ申してよりは、北の空のみ戀しう、月澄めばとて、虫鳴けばとて、只涙の一字と化しては、君忍ぶが、常にて候ひき。くす師の言葉違はで、當地にまゐり候てより、未だ二十日に候を、漸くに肉付き來り、この分ならば、今二ヶ月も保養致し候はゞ、全快すべしと存ぜられ候。さすが溫泉場の事とて、不自由もなく、日に日に事馴れて、里の少女とも親しう相成り、山に川にと靜かに遊びて、折にはヴィオリンすさぶ程の勇氣も、これ有り候、幸ひに御心安めたまへ。

今夕、母と二人、溪の徑道、そぞろあるきいたし候ひしが、道の曲り角にて、ふと出て合ひし二人の君、そは學びやにありしころの友、かの高橋の君、丸髷姿の奥樣風なされて、若き紳士の御手にすがりたまひたる目出度き新婚旅行とは、二人の君の御めまひにもしるく候ひき。暫し立ちて、幸多くましまさんことを、心ひそかに祈り候ひしよ。人はこの愛をうたひ、畫家はこの美をうつすべく、詩材たる物、天の月と星と、地の山と水のみにはあらずと、つく〴〵感じ申し候。あゝ、この細き腕に、やさしき御名かゝれしこの幸なき文の、やがてぞ明日は、あたゝかき君が御手に握らるべしと、そゞろ我が文ながら羨まうし候。かしこ

（雨評）先づ難なき文と申すより外なく候

○出征軍人の家族を慰む

越の國　すゞしろ

いみじき御暑さの折からは、一しほ御兄上樣の御上、さこそと思しやり給ふ御事ならん。げにや滿州の野にほてとりて、此の暑さとも戰し給へる御辛勞のほど、いか計にか候ならん。こなたにてさへ、打ちより御噂のみ致し居候處、承はれば、この程は拔群の御偉功あらせられ候よし、御兄樣の御愉快さはもとより、御老母樣にも、何よりの御慰藉かと、幾重にも、目出たき御武運の程、祝ひあげまゐらせ候。

さても、夏毎、うらやみまつりし名古の浦はの御住居、去年に變らぬ凉しき海の景色、今年はいかゞ御覽せられ候か。まほに片ほに行かふさまを眺めさせては、空しく沈し吉野初瀬のはかなき御思出も、今は空前絶後と迄たゞへられ候ひしうれしさに化し候御事と推しあげ候。いその松風、波の音に、通はせ給ひし妙なる御琴の音其後はたえてきゝしとい人も候はぬは、世をはばからせ給ひての御事にて候か。御老母樣には、わけても好ませ給ふものを、さらでも淋しきこの夏の御家庭、とかくは沈みがちにもなりゆき候ものを、波のよる／＼ならずとも、折ふしは、やばしきしのび音なりと、洩させ給はゞ、いかばかりか、御母老樣の御慰みとなり候はんと存ぜられ候。例の隔てなきまゝ、聞えあげ候を、悪からず思しめし給はりたく、別封は兼て申し上げ置き候もとのしづくに候まゝゆる／＼御覽ぜさせられたく、なほみづからものせしにて、いといと拙なうは候へど、御ふだん〆にもと、帶留つゝめにかけ申し候。末筆にて失禮には候へども、御老母樣へ宜しく、かつ時節がら、一きは御身御大切に、御孝養のほどねんじあげまゐらせ候。かしこ。

（雨評）先づ整ひたる文と申すべし

○古里の母の許に

酒田下內　池田紫楓

先日は懇なる御玉章に添へて、御手づから織らせ給ひし美しき夏衣、早くも賜り、誠に有難、只々御恩を返さん折りの早く來れよかしと思ひ暮らし居り候、日々の務に追はるゝ身の暇なく、心に雲とかゝりつゝも、久しく灘波のよしありを承り申さゞりしを、皆々樣恙もなき御便に、心も秋の頃の如澄み渡り候。私事も、常々御さとし下さる御心を仇にせず、身を大切に致し居り候まゝ、御安神下され度く候。

馴れし都の住居ひながらも、只々古里の空のみ慕しくて、よくも心强くと思ふ事も屢々に候が、母君の門出にのたまひし御詞を思ひ出しては、心弱くてはかなふまじを勵まし居り候。げに年月は早く、本年も過ぎて、又くる年のやよひには、學び終へにし證し文を家土產

に慕しき古里の土踏まんかと思へば、書く事も怪しく踊りて候。其の折こそ、心の限り仕へまつりして、受けし御恵の萬分の一をも報い奉り、涼風たゝぬ樂しき團居に暮さんなど思へば、人は流るゝ月日を惜しめど、私は今年のみは早く暮れよかしとのみ思ひ居り候。小包にて御送り申しし菓子、皆々樣御風味下され度候。筆末ながら、御身大切に遊ばし、ゆめ過度なる御働きなされ給ふなと願ふも、千代もおはしませと祈る子の親の爲にて候。先は御禮かたく〳〵、月影爽けき夕、寄宿舍の燈の下にて、かしこ。

（雨評）先づ〳〵難なき文と申すべし。

○避暑先の友へ

能登國輪島町字河井町　杉下富美子

なつかしき君が御玉章、今宵、むし暑き四疊半にて、くりかへし〳〵拜見致して候。僅か七日の間も、はや三日もたちたらむ心地して、いと戀しう候もの、五十日のあひだ、いかにして日を送らむと、今より心もとなう候。君には母上姉君と共に、景色も空氣も清き地に、都門の塵を避けて、夏の日を送らるゝこと、いと御うらやましくこそ。紫の霞、朧の裳をひく伊豆の島山は、君に御歌をすゝむべく。天津乙女が奏つるが如き松風濤聲は、君に得意の彈琴をうながし申すべく。これまた、いと〳〵羨しう候。オゾォンに富める、白砂青松のあたり、櫻貝などを拾ひ給ひつゝ、御散歩とやら、いと心地よく候はん。涼風に裾を吹かれながら、貝を拾はれ、島山を望みては、歌を詠ませ給ふ事の、いとも〳〵のぞましく候かな。今しもさやけき月影、君が上を夢路に辿りて、その美景に憧れ居る妾の面影を、「馬鹿」と叱咤する如く、するどく照らしぬ。あはれ戀しき君よ、此の月を如何におぼしてぞ。

（雨評）今一層の奮發を要する文なり

◎戰地の夫に近況を報ずる文

朽木秀子

日増に暑さのいやつのり候事とて、ひれもす籠り居て扇とる身すら、いと堪へがたき今日此頃、わきて、血なまぐさき滿洲の原野に銃とりまさん御身の、久しく御消息承はれねば、いかに凌がせ給ふらんと、遙に案じ申し上げ候。留守宅にては、一同無事、父上の如きは、例年の避暑旅行も、軍國の事なればとて見合せられ候。一郎もこの頃の暑さに、いさゝかも弱りたるけはひなく、頗る成長いたし、玩具なども大人めきたる劍や小銃など、いたく喜び申し候。殊に貴方樣の愛犬イスをば、よき遊び相手として、愛するさまのいぢらしさ、えも言はぬ心地いたし候。されば、日頃病がちなるこの身も、今年のみはいと健かにて暮らし居り候まゝ、御安心下され度候。折しも夕立の雨、あとなく晴れわたりて、草葉に錦の玉ちろたそがれの態、ひぐらしの聲をきゝつゝ、かくなん。かしこ。

短篇小說

廣津柳浪選

天

○花水饅頭

岩代須賀川本町　服部水仙子

「己が孫めは、はあ曹長に進みました」白毛頭をやつとチョン髷に結ふた六十許りの大柄な爺様。

前は小川、後は菜畑、左は岩山の岩に續いて、その岩から生へてる大松を屋根に脊負つた、茅屋葺の小家、すぐ右手は縣道なので、前の川の橋‖花水橋を渡つて是非とも此處を通らなければ村にも町にも出られない至つて賣れさうな店である。即ち名物の花水饅頭は此處。だから誰れでも此道を通る旅人は此小店に休んで名物饅頭を一つか二つ頬張つて行かない者は無い。

それも此店の爺が自慢話しの面白くて話好きな故でも有ろうが、また見晴が宜くて味もまた格別とやら。今菜の花は眞盛りである。小川の末は遠く薄墨繪の樣で、蝶々が一羽ひら〱と舞つて行く。小店ではまた爺が饅頭燒きながらの孫の自慢話し、客は一人、四十許りの商人躰。

「一昨日手紙寄越しやしたがな、何でも其中隊が危險かつた時に、それ孫めが隊長樣からの命令で大隊長樣の處へ書面持つていつたゞそうで、それでやつと中隊が救かつた、さあ首尾よう任務を果したちうかどて曹長に進たゞそうでがすよアハヽヽなあに是許の事でがすが隊長樣のお役に立つたかと思ふと此爺の鼻が高いてがすよワハヽヽヽ」

先程の蝶は何處へやら、今し花水橋を渡つた二人の農夫、何か聲高に語らひながら來掛り、

「やあ爺どんまた始まつたゞかアッハヽヽヽ」

とばかり肩の鍬を光らせながら過ぎ去つた。

「ナール程そりや……そして現役かね豫備かね」

煙管をポンと一つ

「なあに豫備でがすよ、去年三年勤務て歸ると間もなく召集られたてがす、普通ならはあ童の二人も有る年

てがすのよ」
何處の家でか雞の鳴聲、ア丶と欠伸一つ後の畑から聞えた。
「丈夫で歸つてくりや、直に嫁貰つて呉れべいと思つて今から探してるのでがあすアハ丶丶丶」

客も笑つた、饅頭を食ひながら、
「婆さんにや早く死なれて頼むは彼ばかりでがすが誠にはや宜く出來やしてな……なあに親は無えでがす今は生きてんだか死んでんだか判明ましねえだ」



日は餘程高くなつた、客は風呂敷包を取つて立ち上つた、と爺の鼻の灯提危險と見る間にポタリと火鉢の縁に落ちてヂリ。
「ワッハ丶丶丶是こそ眞の鼻水饅頭でがすなあハ丶丶丶」

僅にこれだけの事、然かも筆に神あり、躍然として情景が活きてゐる。一つのむだもなく、いきに讀ませて其人を目前に現はす、確かに至れるものであるが、只小説としては餘りにあッけなく、結末が少し、わるおちしたのを難とする。（選者評）

◎村の名物

三河　紫琴女史

（一）

己が村中で名高ものは、
一に石塚辨天まつり
二には笛吹く馬かたお花
三に酒屋の酒呑三太。

滿林の夕陽、木々に燃ゆる岩卷山の紅も僅であつた。消えて行く夕の光にお花は愛馬、夕雲の脊に乘りて、金襴の袋につゝまれた母の片身、若葉の笛を取り出だして辨天島の方へ吹き鳴らして行く。これが今では村の名物となつた

（二）

姬島のほとりが黑づんで、辨天樣の鳥居の赤いのが分らなくなつた時座翁山の麓の邊を鈴の音がした闇のひろがるにつれて夕雲の足は次第〱に、鈍るのであつた。

馬の鈴の音ははたと止むだ、お花は腰の邊から金襴の袋を出して頂いた。そして其の美くしい唇をあてた。餘韻嫋々として寂寥の夜を響いた。夕雲は勇むで嘶た。鈴の音がいよ〱近くなつた時、お花は靜に笛を藏めて、その美くしい手で馬の鬣を撫でた。

（三）

お花が夕雲を勞はつて居ると、馬の先に黑い人影が動いた『三さんぢやアないか』『お花さんか』『あゝ』『今日は遲かつたのう』『ホヽヽ、ちつとも遲かアないわ、常と同じ樣だ』實際お花がいふ通り、別に遲いのではなかつたので三太は『ハヽヽヽ』笑つた。

『そんな事は什麼でも良いけど妾ほんとに心配だわ』『何がへ』『何がへつてあの事よ』



初夏　［賞外］　神田千代田町　白菫女史

『何だらう』と首を傾ける。『嫌だネ知してるくせに』と立添ふ。『わからん』『夫れ〳〵あの事』『何だらう、言つてお見』『ホヽヽ、だつて言ひ憎いもの——』と赤くなつた。『言ひ憎い事があるもんか他人じやアなし』『だつて』『それとも己れに言へねェ樣な事をしたのかへ』『そんな事が』『ぢや何だへ』『あの』と言ひよどんで『妾とお前の事』『妾とお前の事』と鸚鵡返し。『妾何時嫁けるだらう』『あ其事か、夫れなら夫れと、初めから言やあ良にそれなら心配は入らないよ、翁も來月の廿五日あたりが吉日だから、お前の心を聞いて見るつて言つて居たァ』『そりや眞實かへ』『嘘なんか言つた事はない』『二十五日つてもうぢきだわ』お花はさも嬉しげに指を屈つた。

二人の會話の吐切れたとき、三太の家はもう目の前であつた。馬の鈴に目を覺まされた、店番の翁、お花を見るより。

『お花さん遊んで見かんせ』

お花は一寸會釋して、

『最早今日は遲いから明日御邪魔しましよう』

『そうかへ、ぢやア氣をつけていかんせ』馬鈴の音は次第〳〵に遠かつた。翁は呟やいた。

『麼什見ても美くしい、辨天樣のやうだ、あれが末には忰の嫁めになるだかと思ふと勿躰ないやうだ、何でもいゝ、早く初孫の顏でも見てェもんだ、鶴龜〳〵』

＊　＊　＊　＊　＊

山は青葉、山不如歸初音を洩らす頃、豐ケ岡の小さき家には、美くしき人の影を失ひ夕雲の跡をさかぬ樣になつた。同時に、酒賣る三太の家に夕雲の嘶きが聞える樣になつた。月淸き夜には若葉の笛の嫋々たる響が三太の家から洩れるとのことだ。

所謂光明小說、お花は何處か神々しい處があつて、人間の戀を語るのでなく、神の戀を語るやうで、配合された馬士の三太や翁までが純樸太古の人のやうである、只お花と三太との會話を今一段蘊蓄ある文字を以て光彩を添へたなら、出色の小說となつたであらう。(選者評)

人

○日かげの花

伊豫新居郡神鄕村　天野八重子

如何して私は恁う意氣地が無いのでせう、この栗野村て屈指の財產家で、父は村長、夫に五日經ば、若い優しい、美しい嫁樣は來るのであるに。一日〳〵と、近

よつて來る、此の目出度い日を私は、悲しい〳〵日として待つて居ります。元より嫁樣を嫌ふのではありません、常なれば喜んで迎へます、イヤ私は、むしろ望んで居たのです、夫に私は何成悒鬱いて、嬉しく無いのでせう、吁、私は何故悒意氣地が無いのでせう、笑ふて下さるな。

凡そ世の中に、年頃な女の、醜容程、哀れな者は有るまい、だけれど又美しいからとて必ず幸福であるとも云へない。男女間の幸福は形骸の醜美に由るので無くて、愛情にあるのです、夫に男は醜い女を相手にせず、却つて踏つけにして、そのやさしい心立を汲まないから、健氣なる眞情も埋もれて了ふ。例へば寳石の襤褸に包まれて土にまみれて居る樣だ。容色の美しいは年と共に衰へるが、愛情は年と共に濃かになる、愛情、夫が無くては女としての資格は有るまい。



松島　［賞外］　陸前氣仙沼町　小野とり子

世間、大方の人は、これを承知しながら、何事であらう、當節の人士の浮薄な事、私は是を思ふと涙が出る。

お豐と言ふのは、私の宅に今年で三年、奉公して居るが、その心切な事は、到底、今の女の眞似にも出來ない位で、容貌は普通以下、如何に優しい表情も彼女の面に現れる時は、人を喜ばさないのみか却つて異樣に感ぜしめる、勿論戀の愛のと浮いた沙汰もなく己れも諦めて居るとの話、哀れ早世に望を斷つて居るのであります。若い人達が彼を嬲りものにする度、私は懇に慰めてやつたです。平常罪の無い樣子であるから、嘸氣樂な事であらうと思うてゐたが、矢張彼にも人に知らさぬ

秘密は有つたのです、實に意外、彼女は二年前より、とても叶はぬとは知りながら、私に焦れて居たが言ひ出さなかつた、今度の婚禮に付て二年ぶりの思ひの丈を私に告げたのです、もとより私はお嫁にして下さいとは言はぬ、只果ない心情を掬んで、忘れずに居つて呉れよとの事である、吁、何たる可憐の事であらう、私は曾て片思ひの戀を哀れと思うたが、吾身を戀る人有とは知らなかつた……私は泣きました。吁、彼れは人並より別して苦しかつたらう、彼自身の鏡を見ても差る程、己が醜を慚んで居るのに、吁、神樣は何故、この優しいお豐を苦めるのであらうか、可愛相に、その優しい心さへ有ば、私は充分である、何の身分も容貌も有ものか、と咄嗟の間に考へ、大いに決心しやうとした刹那、私は、言ふに言はれぬ感がしました。

＊　＊　＊　＊　＊

その翌々日の新聞に女の死躰が海に漂着たが、顔は何で毀つたのであらう滅茶苦茶にして誰とも譯らず、この裏には必ず何か、一大事件が潜伏して居るであらうと記載してありました、夫を讀だ、私の胸裡、何でこの優しい、美しい嫁樣の來るのを喜で居られませう。

主人公がお豐に同情せる如く、讀者も亦お豐に同情するであらう、文辭は稍圓滑を缺いて居るが、着想は正に今回の應募篇中第一位に居る、美人を描いた小說は天下滔々として皆之れであるが、單に醜婦の心情に波瀾を起させた作者の着眼、決して凡でない。（選者評）

秀逸

○女渡守

東京　藻の花

「出舟ますぜ」。グイと一竿突いて船を出したのは、まだ二十四五の女盛りの渡守。客は一人ぎり、歸國の兵士であらうか、この暑いのに所々繼の當つた黑い軍服を着て、左手には小さな包みを抱へて居る、右手は如何したのであらう、肩から袖がブラリと垂れて居る。もう竿は屆かぬのかしらん、二三間進むと渡守は艪と取りかへた。

「旦那さ、村へ歸るのですか。」

「こんな樣になつたので御國の役にも立たねえ所から此度免役になつたのさ。」「ハアそんてすかね、いらア大負傷したゞなア、何處の戰爭でそんなにやられましただ」。

軍人は寂しく笑ひつゝ「奉天の時にさ。」と簡短に言た

「彼奉天の時に。」と渡守は鸚鵡返しに言つたが、「矢張さうでしたか。」と此度は思込むだ様に首を垂れた。

「奉天はいらい激戰だつてね、私のやうに手を失した者や、足を飛ばされた者、それから遂々戰死した者、數へたらいくらあるか知れねいだ。お前さんの所でも誰人か出征てますのかね。」

「ハイ良人て出征てたんでしたがね、それが其……奉天で……。」

「どうなすつたえ。」とのぞき込むと、女は艪を握つて居る手甲に眼を押當て丶一寸ふいたが「其奉天で地雷の瀨踏の決死隊の中へさア這入つて、とう／＼貴方ネ…………。」後は淚で聞えなかつた。

「フム、さうですか……それはどうも……。」現に自分も其戰爭て腕を一本失つた者て、軍人は同情に堪へざるもの丶如く、寂しい片手で眼を覆ふた。



祝捷［賞外］　陸奥八戸町　七尾千代子

「そんで此報知が來たは先月の末てしたが、貴方出征てたつた四月目でさア、妾はまるで夢でも見た様な氣がして瞠若にとられてしまいましたゞ、そんでも子供なりとあれば、又そこに幾何か樂みもあるつちうもんだが、唯の一人もねいだでねえ、妾は二夜さ泣き明しましたゞよ、併し幾日泣いたとて仕方もなし、先づ後葬ひが肝甚と妾はこうやつて、良人て今迄やつてた職業を始める事にしましたのさ、女にや、いら荒いことだが此渡守は生涯止めねいだ、主が握つた此艪は妾ア死ぬ迄はなさねいだよ。」

女の手の顫ひは其軋る艪の音にも知れる。軍人は此話をしみ／＼と聞いた、そして彼は心の中で幾度か泣いた、あゝ己はこの渡守の夫

の樣に戰死はしなかつたもの丶、戰死も同樣の斯樣な不具となつてしまつては、今更何を爲やうたとて出來るべき仕事もなく、なせるべき業もない。今歸國を許されて、然も其途にある、さて顧みれば自分は妻子を養ふことも出來ぬ、すれば勢い妻の手を借らねばならぬ、あゝ吾が妻も此女の樣に渡守にせねばならぬのであらうか、此太の艪を握らせねばならないてあらうかと深い思ひに沈むであつた時、船は岸に着た。入りかゝつてた夕日は既に山に隱れて、夜の帳はやゝに降り先に發して對岸の船出塲はもう殆ど見えない位になつて居た、

軍人は岡に上つた、女は引返すべく再び艪を取た。

短篇を成すに心得ある人の作と見える、女渡守も軍人もわざとらしからず、有り得べき人物を點出して是丈の詩趣ある小品を作られたのは手柄であつた。(選者評)

◎奥樣

下谷　太田蜻蛉女

今し方迄うと〳〵していらつしつた奥樣、遂々眠つてお仕舞ひ遊ばした。日が強く照つて輝々するお庭の木の茂りさへ暑いのに、油蟬がじい〳〵と鳴き出すと尙暑さを增す。看護する身の兎もすれば眠くなるのを自分で堪へて扨も暑い日。今年四月からの御病氣、お惡かつたり快かつたり、此四五日は又お惡くて滅切お瘦が目に立つ。根の拔たお髮の亂毛がばらりと頸やお顏へ掛てさもうるさ相て、自分の櫛を拔き密とかいて上げてもすや〳〵と御存じが無い。頰の肉がげつそり落ちたお寢顏を熟と見詰た妾は、其樣な事は有は仕ないけど若も奥樣が御死去に成樣な事が有たら何せうと厭な思が沸と共に淚が我不知頰を傳ふ。

妾の爲には大恩ある方、未一昨年丁度妾が十六の春、不圖奥樣に救はれてお實家に御奉公、只一人のお祖父樣が安く暮せる樣に成たも皆奥樣の御蔭、其年の暮、定まつて御出ての事とて御當家へお嫁入り、其時も是非にと妾迄も御連れ下さつた其御恩、有難くて一日も忘れはせぬ、だが解せぬのは旦那樣の仕打、優しい奥樣に情なく計り當つて、夫故奥樣は前に見上げた美しい御笑顏も早ついぞお見せに成ず、御心勞が積り積つて此御病氣。奥樣のお胸をお察し申せば悲しく成て、種々の思に淚は止度もない。能鹽梅に少し風が通ふて來て軒の風鈴がチリンチリンと優しい音を立てるけれど未奥樣は御目が覺めぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

夏も終りに近くお庭の萩も咲き出したのに、奥樣は段

く〱お惡く成計り。此二三日は別段氣を付よとお醫者の言葉、心配でお傍に付切の妾を、奥樣少し話が有故と外の者を遠ざけ、白蠟で鑄た樣なお顔に微かな血の色がさして心なしか常よりは晴々と花や御前にも隨分世話に成たがもう今度は永い御別れせねば成らぬ樣に成りました。妾死ぬのは本望なんだから妾が死んだとて歎いては不可ないよ、お前の事も實家の御姉樣にお賴みして置いたから安心して死ねます、妾も隨分不幸なのねへ、母樣には小さい時別れて仕舞つたし、當家へ來てからも今迄辛くつて幾度か出樣とも思つたが遂々今日まで堪へ通し、此家で死ぬるのが妾は何より嬉しいの、妾は旦那樣も恨まない、皆自分の不運だと諦めて居升。妾が死ぬと必と或る女をお迎へになる、妾は譯が有て知て居ます、だから妾が死んだらお祖父樣の所へお歸り、夫して時く〱お墓詣りをして下さいよ、此は妾が御願だからねと明瞭仰しやつて、一滴ほろりと涙をお落しに成たが、早御話は之切とくるり向へお寢返を。

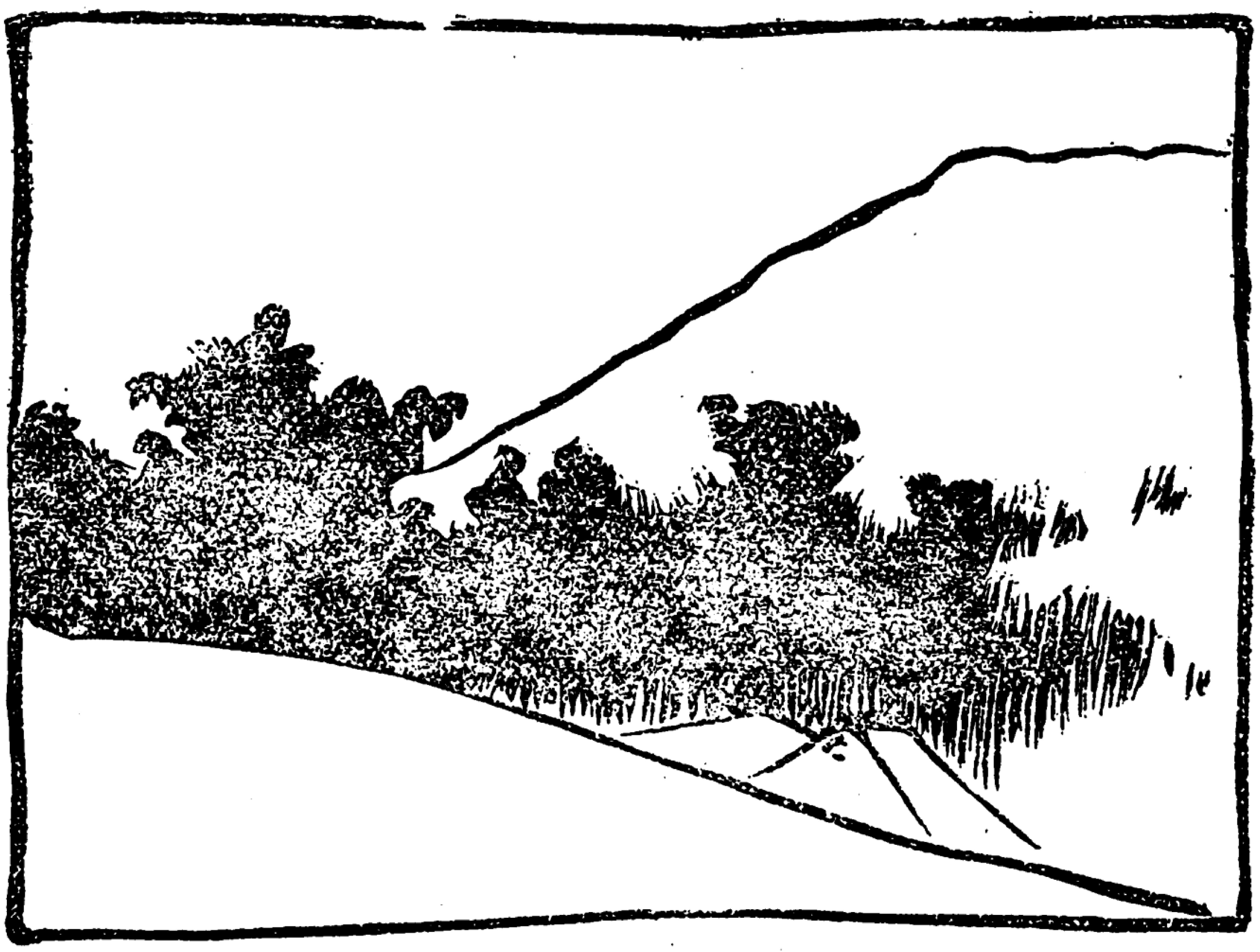
妾は只悲しくて泣いて〱。

＊　＊　＊　＊

悲しい御話が有た二日後、奥樣は御年二十二で遂々永い旅路へ立たれた。歎くなとの仰せだけれど、どうして歎かずに居られよう、一晩泣明しても足らない、死ぬ迄も忘れられぬ此悲しさ、噫未奥樣の淋しいお顏が目に付て……

＊　＊　＊　＊

當坐氣拔がした樣だつた妾、漸初七日を濟ませてお祖父樣の所へ歸つたが、間もなく奥樣の御遺言とてお實家から澤山のお金を戴き、お祖父



山家〔賞外〕栃木縣眞岡町淺野しげ子

樣は其を資本て小さい乍ら小間物屋を初め、每日奧樣の御佛名を口の內に絕えさず、妾も遠くはないお寺故每日御墓詣りを朝のお勤めにして居る。

話の筋は例の通り、別段斯うと云ふ山もないが、女中の心は能く描かれてある、殊に親切な書きなし方で、やりッぱなしの疵のないのは、文章に忠實な方と思はれる。(選者評)

○孤子

東京　ひばり

吁、淋しい事。何故今晚、母樣はおそいのだらう、早く母樣の許に行きたいわ。あの新しい母樣がゐらしつてから皆が私を瞰むんだもの、一寸花ちやんが泣いても直ぐ私が叱られるし死んだ母樣は父樣にしかられると「いつも、私がわるうございました」とあやまつて居らしつたが、私も自分がわるいのかしらん。

あゝうれしい事、母樣はきつとあの紫の星樣よ、母樣は誠に優しい方だつたから。母樣、私隨分待て居たのよ、何故母樣は晚遲くでなくつては御出にならないの？私さびしくつて、母樣、私今日また、父樣に叱れてよ、私ね御墓で泣いて居たら、父樣がおいやからでも聞いたのか、「今は戰爭ぢやないか世間には御前より最つとかはいさうな人が澤山ある、母樣位が死んだとて、いつまでもめそ〱なくな」つて、でも私‥‥。

母樣あのおばあさんも、ばあやも私ひとりぼつちにして何處かへ行つてしまつたのよ、だから叱れてもあやまつてくれる人がないの、だから早く母樣のとこに行きたいの。

母樣なんだか今晚は淋しいのね、こんなに風がふいて母樣、私御琴ひきたいが、この間も叱れたからよしませう。

「チンチン〱〱、、、、。」

今打つたのは八時かしら、もう御床に入らなくつてわならぬ。母樣さよなら、あしたも早く出てね、私、淋しくつてしやうがないから。母樣御願ひだから早く御迎ひに來てね、母樣、御先へおやすみなさい。

「百合、早くねないか」と奧から不意に怒りを帶びた聲がひゞいた。

外は風一しきり强くふいて、木の葉がざわざわと音をたてた、其時母樣の星が、紫の色一入きら〱と輝いた。

神秘小說としても存外無邪氣に、且眩耀の點がない。自然と人間を結びつけて、其間に作家の胸の溫みを充分に發揮したるは、此篇の生命とする處であらう。(選者評)

○おぼえ書

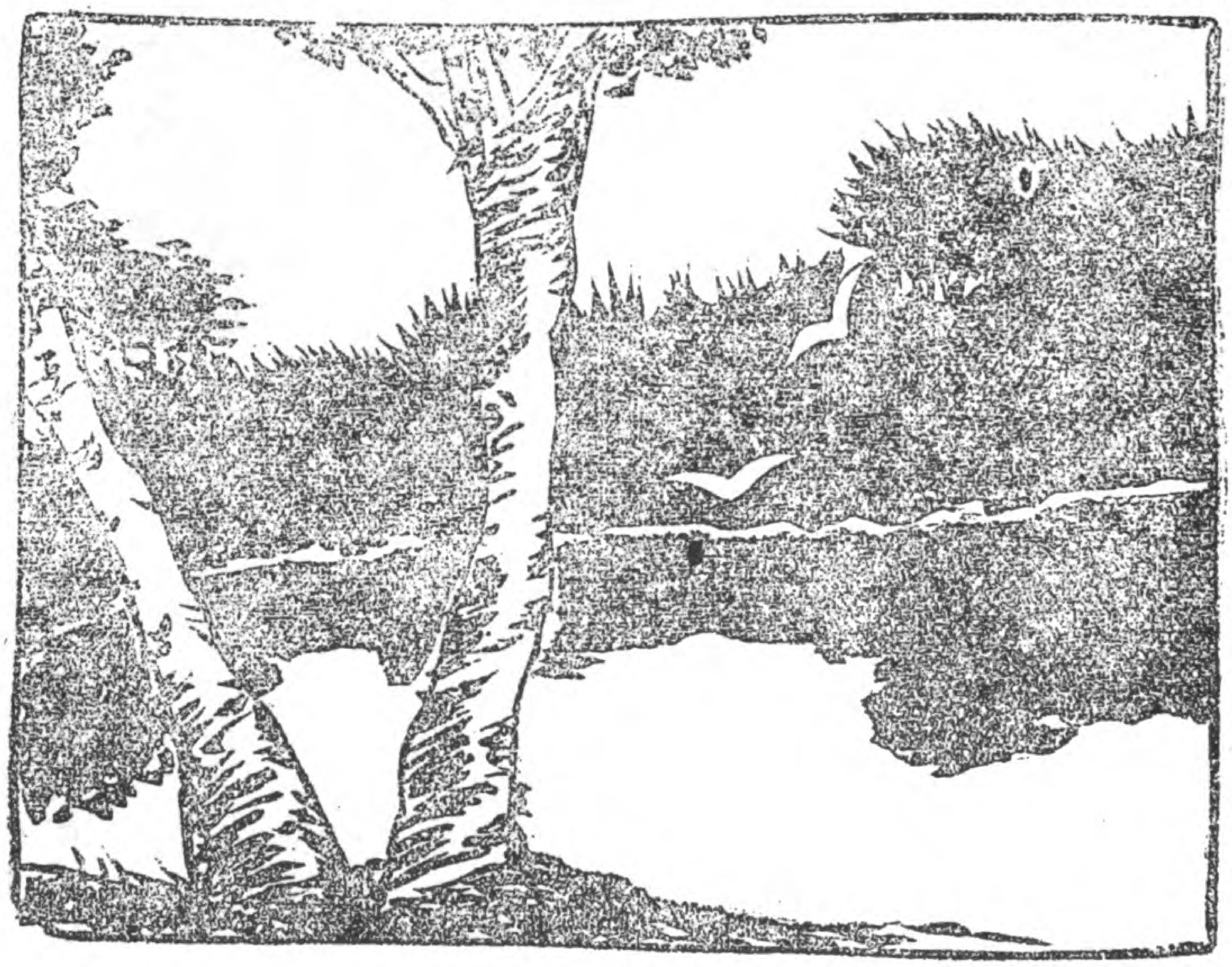
麻布　松本せい子

一

『を、も七時になるな。どれ出勤ると仕様よ。必然あのお花さんも可愛らしい聲で、詩を唄ひながら牛の飼料でも造らえてるだらう』

自分は毎日午前八時を期して東雲寺前の下宿屋を飛び出して、すぐ足下に涓々流れる目黒川を超て、青疊を敷きつめたやうな増穗の小稻を、棕梠竹のステッキで撫ながら、日野村田圃の彎曲つた徑を通り超て、……牛乳舍の門前を横目で見ては隣の役場の門を潜るのである。

『乃公は役場の書記と云ふ低い身分だが。さりとて又果報者の一人ぢやあるまいか。神々しい玉玲瓏な、東京を草鞋ばきで探したつて目着からない



湖畔　〔賞外〕　神奈川縣新田村　中村三重子

あの百合のやうなお花さんの姿を見、やさしい詩を聽いて、そして歸へんには彼の子の手に世話された乳を一ッ盃仰ぐのだ』

足は稍々早く駛足歩調で、日野村田圃を通り超す、

『オッ今日は横面だな……それに襷も昨日とは違つて紫だ』

足は鈍る。

『お早やう』

お花さんは花月卷の漆のやうな頭をやんわり擡げ、自分の顔を見ると直ぐ莞爾として

『お早やう御在います』と鈴のやうな聲音。

『あゝ彼の子を持つた牛舍の親達は幸福者だよ』

自分は怎ふ呟いて、歩を移した。

（二）

『お早やう！』徐に靴を引摺つて怎ふ聲を掛た。

『オヤ〳〵今日は怎ふしたんだらう、美しい姿も見えないし幽雅しい詩も聞えない……、はて怎うかしたのかしら……』

自分が此の役塲へ通ふ事になつてから一ヶ月間、風が吹かうが雨が降らうが、只の一日でも休んだ事のない花子は、今日怎うしたことか詩の聲さえしないので、自分は少なからず不快を懷いて役塲の門を潜つた。

『あゝ詰らない〳〵實に詰ない日だ、それにしてもお花さんは……さうだ二階に行つて見やう』

自分は毎日約束のやうに欄干に寄るのだ。

『見えない〳〵……あゝ見えないな……』

自分は矢も楯もたまらず直にも爰を飛び出して、花子の家に行つて安否を聞きたくなつた、が辛ふじて足を踏み止めた、さて之れから午後の四時までの待ち遠しさ。

やがて歸の鐘がなつたので逸早く飛び出して來て見ると、生憎に若者ばかりで父爺の姿も婦さんの影も見えないので。

『皆樣は怎うしたんだい』

と自分は若者に向つて口を切つたするとと『さア怎うしたんですかお花さんは昨夜あたりから見えません！』

と之れを聞いた自分は驚き樣『えゝ昨夜から』と繰返して一合の牛乳を息も吐かず一盃仰つて、口もきかず戸外に飛び出して下宿に馳着けた。

（三）

薄暗い四疊半の一隅に兀つちよろの一閑張の机にベッタリ凭れて須臾く居た時、二階下でお女將の聞で『高野さんお手紙！』、手早く受取つて見ると驚いた——。東京神田にて花子より、自分は嬉しい樣な懷かしい樣な慕はしい樣な或は戀しい樣な。突然に封を切て三尺斗りの手紙を、二三度繰返し讀んだのを慥に覺えて居る、此時人あつて傍に之れを見るならば正に活人形のやうてあらう。

『あゝ花子さん……あゝ』

＊　＊　＊　＊　＊　＊

自分も同じ神田の水道を飲むで薄給い勤務に同じ日を送る事になつたが、それにしても二年前のお花さんはさて怎うして居るかしら、矢つ張り詩を唄つて詩を作つて居るかしら、あゝ夫れにしても、も一度あの優美い聲が聽いたいな。

お花は何の爲に去りしか、それを說明せざりしは點睛を忘れたるもの、筆は達者なり、稍筆が廻り過ぎて輕浮に流れやうとするのは弊、但し之は注意すれば正し易し、猶に將來の造詣に俟つ。（選者評）

○後影

名古屋　中谷文子

上

春の夕、不途病み初めてから早や幾月、其頃朧に櫻花の梢を照らした春の月、今は澄み渡つた夏の月となつて青葉木立を照らしてゐる。

精神の病に、騒しい都では、と行屆いた親の慈愛に、與津の別荘に轉つてから、最う五月、吁何時迄お年召した兩親に心配を掛ける事やら、是も皆彼の人の爲と、清い月を見れば思ふまいと思ひながらも、つい愚痴が出て、雪子は氣晴しにと彈いてゐた、小琴の調を止めて、又も悲しい思に沈んだ。

下髪にリボンの蝶を狂はせて、嫁樣ごつこ爲る時分から大の大の仲好で有つた兄樣、今から餘りお睦じくて、夫と定めぬ前に若しや間違でも起つてはと、乳母が蔭で眉を顰めた程親しかつたのが、如何した事やら此春から、がらりと變つた我への仕打、男心と秋の空とやら優しい兄樣に限つてはと、固く〳〵信じてゐたのにさりとては餘り酷ひでは無いか、此頃は自分に向つては、優しい言葉は愚、一つ家に有りながら、言一つ滿足には謂ひ給はざる他家他家しさ、自分に何樣程の落度が有るか知らねど、其にしても餘りな仕方、あゝ是が未來の我良人として、終生を倶に爲べき人かと思ふと、謂知らぬ心細い樣な恨しい樣な、悲しい思が一時に胸を突いて涙は止度なく玉の頰を傳ふのである。



風　〔賞外〕　陸奥八戸町　石橋てふ

下

「あれ姫樣は又泣いてお出遊ばす」と乳母に聲かけられて、はつと心附、強いて涙を拭ふて、庭傳いに枝折戸開けて濱に出

た。

月は今や中空高く懸つて、恍々と下界を照らして、遠く三保の松原が墨繪の樣である。

磯松の蔭に、男女の人影あり、何れは燃ゆる戀を月下に歌ふ青春の人で有ろうと、今の身の雪子は嫉ましいやうな氣がして思はず其方に歩を進めたが不意に立止つて二人をすかしみた。

白絣に麥藁帽、杖木を後手に持つて立つてゐる男の後姿が何うやら彼の人に……胸に痛手持つ雪子は若しやと、忍び足に進み寄つて伺へば果して其人である。扨こそ讀めたり日頃の仕打、我より外にかゝる人が有るかと思へば、口惜しさに波立つ胸の亂心昵と鎮めて、暫樣子を伺はんと、木蔭に身を隱して、耳をすました

「じア什うしても、お前は僕と斷れる心なんか」男の聲は怒氣に含んで居る。

「ハヽイ、華族の若樣には、小間使の私風情はとても……」と何處か涙を帶びて顫ては居るが、女は冷ヽかな云振、

「馬鹿な……那樣な事が何樣して……幾！お前は僕が先日彼れ程堅く誓つた事を、忘れたのか？てなきア僕に心變りしたんだな」

「エッ……」女は暫答が無かつた、軈て屹とした調子で、

「若樣ッ私は貴郎が厭に……厭に成りましたのですッ」

「エッ何だつて……失敬な……宜くも此僕を侮辱したな……善し……お前とは今日限り他人だッ……一怒心頭に發したる如く男は杖を小脇に疾風の如く松原を走り去つた。

昵と齒を喰ひ縛つて見送つて居つた女は堪らずなつて「若樣、お許なすつて」と聲立てゝ泣き伏したが……暫、やがて奇麗に涙をぬぐつて

「あゝ之で姫樣への義理が立つたのだ……」鬢のほつれ毛搔上て、清い月を見上て艶然。

軈て覺束無氣に身を起したが吁と吐息ついて

「併し明日からは、私什うして暮そう……」

首垂れて、悄然と渚辿りゆく少女の後影を、木蔭の姫は何と見送つたて有ろう。

小間使お幾を點出する件が、少し唐突て、結構を聊か變更すると、面白い小說になる、還般の複雜した戀愛小說は數十行の文字に埋めるには困雜てあらう、作者は其割合に能く整へて居る。（選者評）

○墓まゐり

赤坂　森落葉

彼方の森に蜩鳴き初めてから右側に茂る松林を通して冷しい風がそよ／＼と吹いて來て初めて人心地にかへると、もう日は沈んで西の山々は美しくきらめいて見つめる事が出來ぬ程まぶしい、向ふの松林の下道や田の畔道には早や馬に草を積んで歸る田舎娘もちらほら見え、村の若者の唄も聞えて來た。すると、此田舎には珍しい海老茶袴を附けた十六七の女が二人何か沈み勝に話して行く。やがて松林の裏手の大きな古びた門の寺へ入つた淸水湧く古井戸で水を吸み袴のすそを高く上げ、一人は右手に一人は左手に手桶を下げて、無言のまゝ墓の間を通つて、やがて笹の葉茂る下に立つた石碑の前で手桶を下した。髪を花月巻に束ねた方が先づ口を開き「ねー山田さん！こんなにおそいと折角來ても無効だと聞いてたけれど、こないよりいゝわねー、島村さんに通じるかしら」と云へば山田と云はれし、マガレットに髪を結ひうつりよき水色リボンを附けた女は「遲いからつて露子さんは知つてるわ、だけど夕方は淋しくていやだわねー」と語らひつゝ懇ろにあたりの塵を除り小聲に何か唱へて石碑をぬらし持ち來りし夏菊の花を手向け、さて二人は生ける人に物云ふ如うに「島村さん誠におそくなつて申譯ありません、今日はあひにく日曜にも土曜にも當らなかつたものですから如斯におそくなつたのよ、こんな所にあなたさぞ淋しいでしようね、先生も皆さんも宜しくつて傳言つてよ」と云ひて目をうるほして暫時石碑を見つめて居たが「それでは今日はこれでおいとましてよ、左樣なら」と二人は名殘り惜しそうに見返りて行く。寺の門も遠く小さく見ゆる所まで來た、花月巻の女は「山田さん常々云ふやうだけれど、露子さんは實にお氣の毒だつたわねー母上樣の御死去を戰地の父上樣にお知らせにならないで一人で只父上樣のおかへりなさるのを、せめてもの頼みにしていらしたのが、其頼みにしていらした父上樣が御戰死、あゝ何と云ふお不幸でしよう餘りのお歎きの末とう／＼あんな事に」と後は云ふに堪へられぬのか無言つてしまつた。花月巻は又言葉を次ぎ「山田さんあの栗本さんねあんな柔和な島村さんをいぢめていぢめぬいて此度こんな事になつて定めしねざめは惡いでしようね。どうしてあんな意地惡い事を云つたのでしよう。あの方は佞み心があるから、島村さんは始終一番でしよう、で島村さんには如何しても勝たれないものだから、やれ紙を借りに行くと何時もないないて一度も貸してくれた事はないの、やれ高ぶるのつて實に他で聞いて居てさへ堪まらなかつたわ」とさも口惜しそうに語へば山田は「だけど此節は大變後悔して今日は是非墓參りをすると云つてたと云ふ事を楠山さんから聞いた事よ」花月巻ははるか何者を認めた如うで、矢庭に友の袖を引き「一寸山田さん彼方に來たのは栗本さんじやあなくつて」、「ほんとにそうねー」云ふ問もなく走せ來る女學生、色白く品よき娘なれど目にけんがある。彼は息はずませながら「私急いで來たんですけれどお當番だつたものですからこんなにおくれたのよ」山田は「まあよく來たのねだけど一人では淋しいでしよう二人でさへ隨分恐わかつたんですもの」と恐ろしそうに振返る「いゝ事よ其では行つて來るわ」と馳け出した、二人は見送つた、入相の鐘がボーンと一つ、哀れにひゞいた。

まだ多く文章を書きなれない筆には相違ないが、實情が籠つて、小說と云ふ程の事はないにしても、人を動かす力は充分有る。（選者評）

はがき文

編輯局選

特別第二賞

○朝

靜岡　たか子

薄くなつた御月樣を見ながら私は例の通り裏に出て深呼吸をする。御日樣に五度、富士山に五度、大きないきをふつかけて、そして傍の蓮池から小さな卷葉を一本とつて、せつぷんした。

萬千の氣象を一呼吸に言ひ盡くす、ハカキ文の妙、神に入るもの

天

○緣談

東京　宮田淸子

暑中休暇で歸省してから三日の朝奧にてお父樣とお母樣としきりに妾の名を被仰りながらお話しをして在しやるからふと立とまつて聞けば、あら妾どうしたらいゝでしよ、緣談のお話し。

立聞はわるいが聞いても見たく

地

○めでたい國の夏

能登輪島町勝田方　池野いさみ子

川の名は花捨川、山の名は舞袖の山、言ふ可からざる詩趣にうたれてさて村に入ると平和な優しい女の唄聲に和してきこゆるのは、糸を取る車輪の音、あゝ目出度い國の夏である。

如何にも目出度たう

人

○水車番の爺

鳥取市鍛冶町　上山千重子

今年取つて七十の水車番の爺、媼が死んだ三日目に四十二に得た一人の息子が戰死して全くの一人者。戰功賜金扶助料を合して五百金受領した彼は悉皆村の小

學校に寄附して、僕はハー幸福者だ。

野の聖人

秀逸

○御挨拶　大阪　杉田孤泉

家に歸つたら丁寧な御挨拶もしやうと思つてゐた妾はお母様が妾を見るより愛子、マーよく歸つてくれたねと仰有つたので、モー何も御挨拶することは出來なかつた。

出來ないのが眞情の挨拶

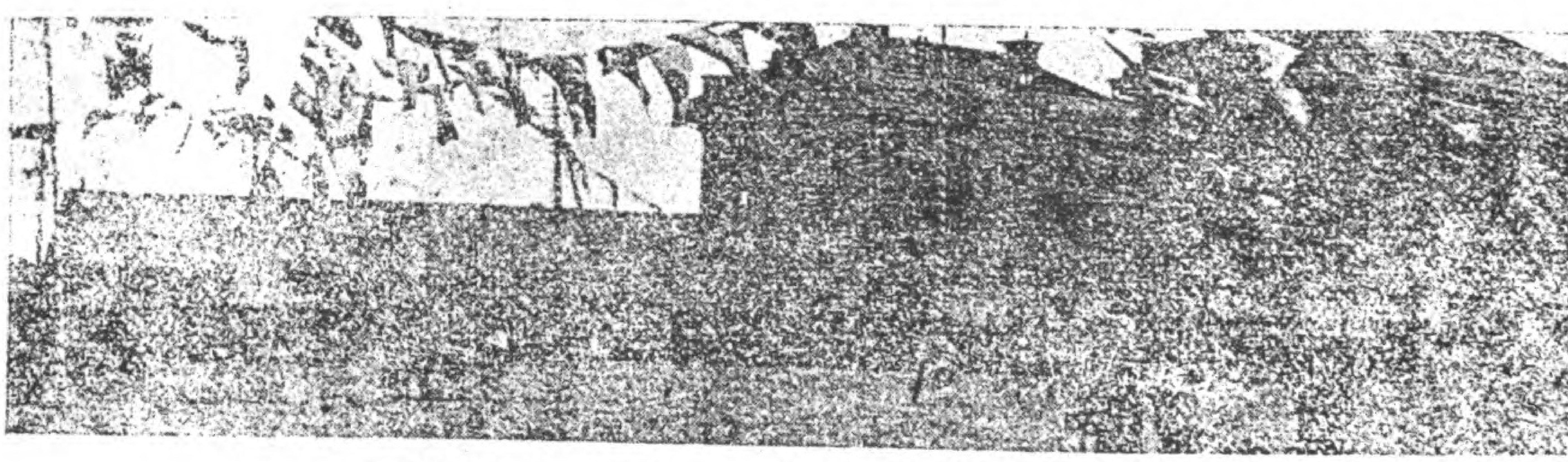
○お虫干　越後　花野てふ子

今日は衣裳の蟲干。先綱張りに忙しい。家内惣懸りで廰て座敷の中は蜘蛛の巣の樣に引渡された。內の衆者は向鉢卷でエンヤ〳〵と倉から簞笥を運び出した。姪の琴子は姉上の嫁入着物を指さしてアレ奇麗。

我家の歷史展覽會

○故郷の人　撫子

他郷に居て故鄕の人に邂逅つた程樂しいことはない御無沙汰勝ちの御詫もそこ〳〵に＝父母の安否＝友達の消息＝國を出てから



新橋停車場に於ける米國使節歡迎

の身の上話＝それからそれと話も長く迚もハガキ文位で書き盡せるものではない。

花いばら故鄕の道に似たる哉、それは自然、これは人生

○稻田の期　備後　高杉みゆき

妾は今稻田の間を廻り居り候、高く低く、早く緩く、田の面を縫ひし燕の一羽、いつしか朝霧の彼方にかくれ候て。後にそよ風は、綠り波を次第〳〵におし送り、稻葉のそよぎサラ〳〵と、靜けく響き居り候。

寫實文の上乘

○私の人形　長崎市　粟田すが子

丈は三寸にたらず、頰は櫻色、紫のお袴つけた、私の人形の美ちやんを、私は傷病兵士に、あげる慰問袋に、入れました、あゝ、あの可愛らしい美ちやんは、きつと〳〵傷病兵士を、慰むることが出來ませう。

軍國の好文字、新聞以外に此美擧あり

○枕だに　信濃　帶刀きさへ

基督逝きて二千載、會堂の鐘低くサタンの呪を齎し釋尊入滅して三千年清寺淨地葷酒

の香に汚る、宗教は安心立命を與ふときくにそれすら已に墜れたり、人は終に枕だにすべき處なきか狐は穴あり鳥は塒あるに。

論文の談を得たり

◎親のなさけ　松江市　白すみれ

此樣に家が忙しいのに、私もう學校は止しても宜いですわ、父上は只默して居られた。所が此頃或人に娘も折角此所迄仕上たものですからと、仰つて居るのを聞いて自分は障子の陰で窃に涙をのんだ。

勉强もおろそかには出來ぬ

◎手毬のありか　陸前　鈴木鎣の香

庭の隅に深さ四五寸程地を堀つて其の底に滑かな石盤石を埋め四邊は奇麗な小石で築き上げて五色の糸で括つた毬を入れ其の上に澤山の草花を盛る。

（さあ姉さむ這の中に何か這入つて丶……）

あゝ紹手毬、再び蘇生せよ

◎德利と足袋　大分縣　森野みさを

消え殘つた夕日が薄暗い路次に七歲許りの女の子を照らし出して居る。手は冷たさうに燗德利を握つて凍えた素足は洒板に力無い音を立て丶居る。噫此德利に入れられる物が世に無かつたならば此子は足袋を穿き得たらうに。

筆法に一癖あり

◎午寢　三河　北谷浪子

何物か妾の顏を撫でたと思ふと夢が破れた、傍に一本の百合の花が美しく咲いて、蝴蝶が一つ花に止まつて居た。此百合が風にゆれて、妾の夢をさましたのであらう。

知らず、百合の夢なりしや否

◎どちらが苗字　失名

文ちやんは、どつかへ遊びにゐて居ましたが、やがて走て歸りまして、つかくとお母樣のおそばえ來てよ、母樣大阪では神鳴さんと云ふのに此所では鳴神さんと云ふがとちらが苗字なの。

鳴神さんとは事實、何れの地の方言か

◎坊の紀念　群馬　美津多摩海女

姉ちやん今日何處占領したのと弟の愛聲、ふと見れば手に杉苗を持つて居ました、妾何かと思てたづねると太閤樣は戰に勝毎に目記しの瓢簞を増したから坊は紀念に杉苗を植ると云ひました。

坊やの紀念植林

◎妾の樂　伯耆　美佐保

晨に星を戴いて出で、夕に月をふんで歸る我等百姓娘は、一日營々として働いて歸つて、弟が漁つて來た魚で晩餐の卓を圍み、裏の葡萄棚の下で、月を燈に微醉の父の昔話を聞く。

所謂女學生の知らざる樂

○春の一夜をよみて　備後　静子

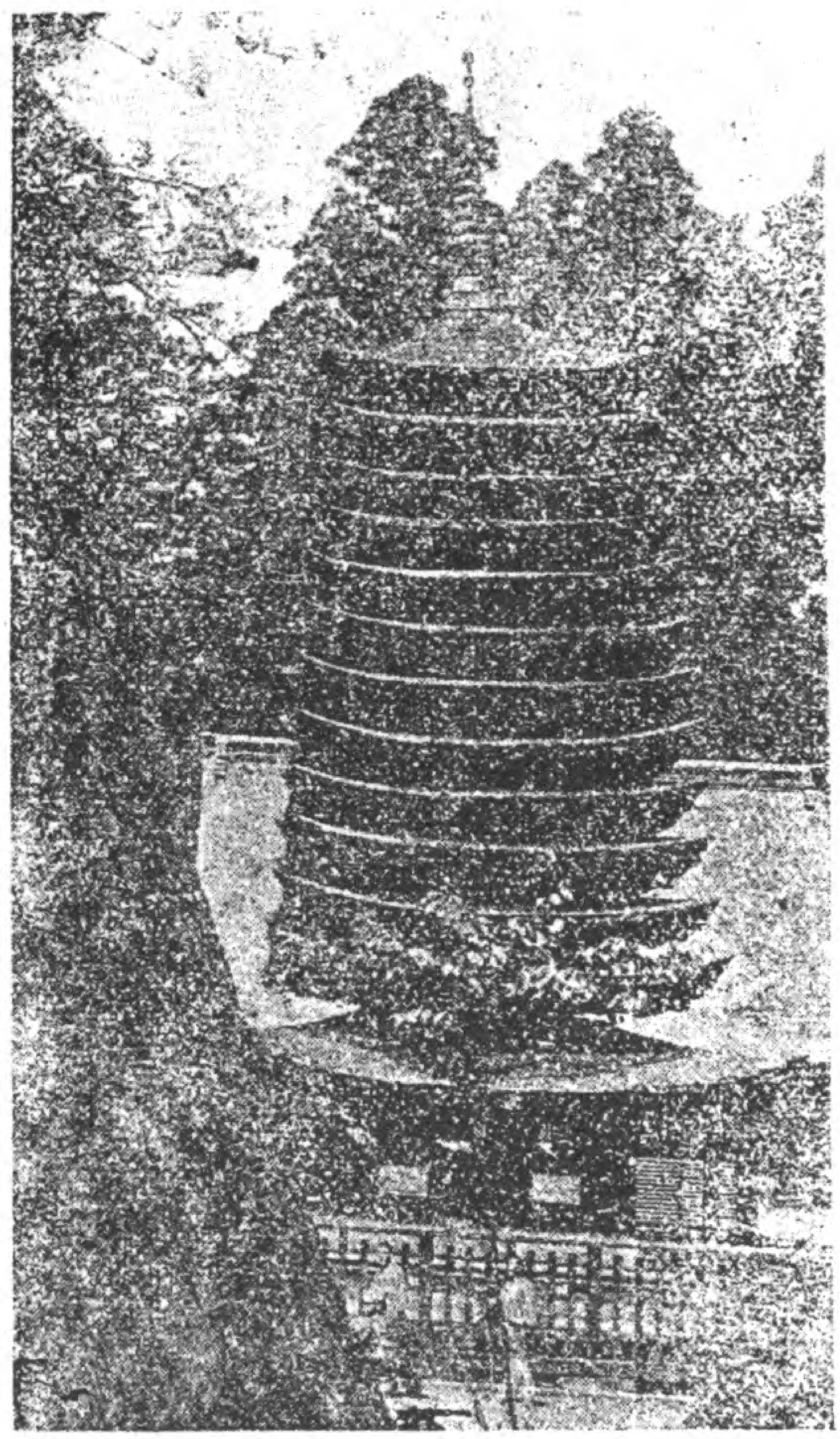
女子文壇前號の小説「春の一夜」を讀みて餘りよく私の身の上に似て居るので、もし自分の事か知らと思ひ、そして夏休に歸つたら、第一番にお母さんと敬さんの前で、之を讀で聞かせやうと思つた。

「春の一夜」の作者、知遇を感ず

○夏　伊豆　加藤溜子

今日初めて蜩の聲を後山に聞きぬ。一聲さやかにして銀鈴を振るが如し。白日山に入り、涼は夕と共に生ず。外に出づれば、川に釣る人あり。談笑の聲あり。笛聲あり。花火を揚ぐる小供あり。夏の季は始まりぬ。

爽快、文も夏の來るが如し



大和談山神社十三重塔

○休暇問答　牛込　小島仁子

新らしき學期は迎えぬ、師は暑中休暇中の感慨を問はれければ、妾は怒濤と戰ひたりと答へしに、黒髪のいや濃くなりたるよと笑はれたりき。

心憎き錐つきたり

○金魚鉢　いさ子

清らかな水に金魚が泳いて、大輪の朝顔が水面に映つてまあ美しいこと、それ千代ちやんの顔もうつりましたよ。

透明

○病身　攝津　植田今子

我はいつも九月十月の頃より病氣す一度二度病らひし此身今はやう〳〵宜しけれど全快とまでは行かずいつ

も鏡臺に向ふたび、こたび病氣になれば三度なればと思はず涙ぐまれた。

精神上には涙子たれ、身躰上には雲岳女史たれ

○箱庭　　上總　紫揚花子

五重の塔、橋、旅人、白鷺、釣師は山に池に鳥に、配置せらるゝや、甚だ妙、而して、魚は鰭を振うて、世界の小を疑ひ、蟻は所謂堂廻りして、太平の樂を稱すげに〳〵樂しき小樂園。

眞面目なるが却つて滑稽

○農の人　　姫路市　入江愛子

今日しも稻田に小雨晴れて、村里は人氣立ちぬ。何處よりか粉引く車の唄の節。眞夏日にぬるみ稻田に田草拔きしも早、田ふむ兎を御山に追ひしも何日か過ぎ、今宵は田五作招きて田の實りに酒酌みて醉はめ。

農家年中行事の一節

○失敗　　備後　曾川秀子

お庭の池に蓮の初花が一つ咲きました折らないでよと仰有つた母樣の目を忍んで折らんとする途端、ずるりと泥の中に滑り込みはい上らんと藻いてる所に母樣が來て「何をしたの」、母樣は私がなさんとした事をまだ不知てせう。

結句あつて平凡ならず

○日比谷公園　　神田　森竹葉子

鶴の嘴からはき出す噴水の飛沫虹の樣に涼しい竹叢や、美くしく咲き連ける鷄頭花や、綠の築山などで圍まれた廣い青い芝生には可愛らしい花ちやんや太郎さんが赤い袴白いリボンひらつかせて、無心に遊び戯むれて居るのが恰ら天國の樣。

文必ずしも妙ならず、日比谷公園を寫さんとせしは殊勝なり

○失望　　いばらかに

もし私のが見つかつたら赤い點をつけて一冊は戰地の兄樣へ外の一冊はばあやに送るつもりだつたのに！ああ、幾度くり返へしても〳〵はがき文には見えませんてしたもの、くやしくつて。

此の如き失望者は毎號幾百人あらう

○蜘蛛の巣　　神戸　梅子

木の枝に少さな蜘蛛が、一生懸命に、行つては歸へり歸へつては行きして、とう〳〵美しい立派な巣をこしらへた時、ふと膝の上を見た。諳記しかけた歴史の本はやはり以前の處が開いてあつた。

蜘蛛は何を敎へたらむ

○女敎師　　彦根　奥居叢子

筒袖袴に身をやつし田舍道狹しと通る女教師あり、餘念なく遊び居りし五六才の童三四人、其れ先生よといひ樣走り行き頭をたる、あゝ天眞爛漫。

先生の感果して奈何

◎はてなき思　　若狹　井上艶子

たまゆらの間も、忘れ難なの希望を捨てゝ、永久此片山里に、小學敎員て朽ち果てなければならぬかと思ふと、月に對して夕野路に立たる我影の、哀れにも瘠せたる事よ。

◎眠られぬ　　靑森市　鶴琴　女史

あまり稼苦しいので雨戸を一枚開ると黑濃き山に女神の眉のやうな三ケ月は懸つて萬象は何の悶もなく眠つてゐるそよ〳〵と風が吹いて一疋の螢は戀の使のやうに飛んでゆく。

◎姉より　　陸中　佐藤いよ子

姉樣何日御歸り、離家の机の上に文子文壇は待ッてゝよ、おかへりの時は良ちやんと、停車場へまゐりますから、御土產を澤山頂戴な、れー姉樣、

◎病後の友より　　奈良縣　山吹　女

昨日お阿母さんのお手を頼りに椽先まで步けましたて家内中は大悅箖に峰ちやんなんかは姉ちやん步いた〳〵と走り廻りますて私も大變嬉しく椽先まて二度も出てゆきましたいづれ二三週間の內には全快して出校致します。

◎友の寢顏　　陸中　黑澤美江子

久々て歸省した友と蚊帳にはいつて小學校時代の夢の樣な昔がたりに耽つて居る中いつしか友のことばか鼾と變つた、大分夜ぶ更けたのてあろう、松の梢より月は銀糸の如く流れこんで寢室に滿ちた友の顏を照して居る。



◎變遷　　小石川　服部けさ子

今日は六月天王祭り！初なりの胡瓜廣前に積んて山のやう……手造りの繭の簪かざして練り行きし韶少女の群!!誇張すれば其も、一世紀前の事……今や歸省とかいふなるゑび茶袴の影さへちら〳〵と見えて……。

◎花賣　　石狩　と　く　子

お花やお花活花にさし花!!細い高い聲に晝寢の夢を破られて蹶立まぎれに外の窓を開けたら！年の頃未だ二十前後の女背なの子を一ゆすり花の積んだ車を置いて一禮してどうぞ一針と木綿と白糸とを出した。

◎傳令使　　麻布　西村　露子

月淸く、荒原を照らし、天地靜かなり。時に、前方林間に黑き影、六七十顯はる。突然左方の木陰より、飛出たる人影。報告前方に敵騎約七十名顯ました終りッ忽ち指揮官の聲「散れッ三百メートル急擊かかれッ」忽ち起る銃聲、忽ち起る白烟、忽ち起る突擊の聲。

◎孝子　　能登　杉下文枝子

お母さん藥上げよか早よ癒ッてよ。お父さんわどうしてゐるだろー。今日先生から聞いたの、滿洲は暑い暑い所だつて、だから兵隊さんに學校から扇を送るつて。あたしも、氷を賣りて扇を買ふ錢貰つてこうか。

◎百合舟　　上毛　梅園　女史

ノ里遠い山の中から流れいてたいさゝ川に浮んて來た玩物の帆舟のような、白百合の一片そこに水遊びをして居た、妹が見附て、あら姉ちやん舟が……。

◎子雀　　野州　桂　子

庭に迷ひ入りし、翅もきかぬ、子雀を、弟は可愛がりて、飼ひ居れり。親雀は、いとし我子の、行方を尋れて、さぞや、心配せるならん。子雀よ、翅を強く養ひて、一日も早く、巢に歸り、親の心を慰めよ。

○子供と鏡

大阪　品部　幸枝

三歳の子に子守がなくてちつとも用事が出來ないおもちやもあちのけて五分と遊んでくれないので何かよい物がなと鏡をやりましたら、だきあげ顔をあて接吻しそれは〳〵縫ひ行く針の糸も長くつゞきました。

○朝の泉

備後　伊藤　波那

二三日降り續きの雨で水は濁つてをるから金魚や鯉の姿は見えぬ。水莢の葉が風に靡いて夕べ宿つた露を濁つた水に逃んでをる。其度に下の葉にすわつてをる蛙が「キヨロリ」とした。

○ジョンの命

岐阜縣　臼井しげ子

哀れや、我れのめでつるジヨンは姿いたくもやつれて、そこゝのくすしもそのかひなきを言ふ、とき〳〵のうごめきはものこそいはれ病ひの苦しみにやあらむ、こよひを限りのジヨンの命、あゝ。

○林檎

山口縣　常松千代子

父上の在世の頃植えて置かれた林檎の木に今年始めて一つの實を結んだ、弟の茂さん木の下にいつて姉さんも一林檎が熟れてよとよろこんで居た其翌日茂さんがいつて見ると大切な大切な林檎は影も見せなかつた。

○蜘蛛の巣

牛込　たそがれ

れーさんあれ〳〵と聲は萎れて目に涙を宿して蜘蛛の巣を指さす妹、見れば今世に出てしかと思はるゝ白銀の樣な柔かそーな羽根を苦しそーに動かして居る。

○我が家

紀伊　声　まさ子

我が家は小高き岡の上にありて前には淸き小川が流れ、圍りには杉の木松の木老いたる若き所せましと立ち並べり、此頃は每日蟬の聲を聞く。

○溫泉宿

陸奥　小笠原　紅蓮

溫泉宿の二階で、本も持たないで、只、欄干に身をよせて、山を眺めて、ふさいで居る時、何處もなく鶯が歌を歌つて、妾を慰むるのでありました。

○初夏

伊豫　入　重子

病氣を慰めやうと小高ひ丘に立つて眺めると若葉は住家と小家とて十戸あまりの里を取り圍んで夏の來るのをまつて居る樣である。

○白牡丹

石狩　山家しづ子

アラ母樣、お庭の白牡丹がこんなにきれいに咲きました、オゝ見事にれ、富士子や、お前も此の花の樣に遠慮なく、日本婦人の天性を發揮しておくれだつたら母樣はまあどんなに嬉しい事でしよ。

○留守居

陸前　凉風女史

何と云ふ淋しい晩だろう、それに空があんなにぼんやりして今にも雨が降り出しさう、早くお母さまがかへればよいに、女一人と思ふてもしや盜人でもはへりはしまいかア丶心配なこと。

○好い月

名古屋　獅子海　なか子

夕立の夜雲と逆さまに走る月、泥水を透して映る滿月、望の月東の浪間出づる時、正に西山に落ちんとする三日月、並木松の間透して差し込む淸き月、圍ながら窓から眺めらるゝ澄んだ月、野邊の逍遥う歸る時の友の月。

○夏紅梅

周防　みち子

七月十三日の朝餘り眠いので昨夜のお菓子がある筈と思出して母樣に知れたなら何時まで小供の氣でと叱られうとそつと床の間に行くと昨日活けた夏紅梅が殘らず散つて盆を埋めて居る。

○泉

武州　中村せい

涼しき木陰の岩に尻打ちかけて、泉の淸水掬べる子あり、やがて飮みあきしと見る程に、如何に思ひけむ、忽ち泥にまみれし足をば其中に入れて、心地よげにひとりほゝえめり。

○舊師

牛込　市來こと子

五月廿二日は、何といふい丶日でしよう、先私がいつてをりましたところの、先生から懇篤な御手紙の中に學校の紅葉をそえて、送つて下さいました、私は紅葉をふところにして、先生の御健康を祈りました。

○可愛二人

紀伊　柳本　朝枝

大雨のふる日でした、私はお孝さんのお宅へお喜悅に行つてゐますと。

雷のなる最中のことに、薄やら路やらわからない、あの大水の中を跣で來たのらしい、秀ちやんも、純ちやんも、濡鼠のようになつて震ながら姊ちやんと兩方の袂に縋るのです。

○朝顔　　土佐　秋月廣江子

大輪の朝顔が淡紅色を帶て咲た、で寫生しやうと思うて、摘みとつた時、何處から來たのかきれいな蝶が其邊を尋れてゐるの、私は大な罪を犯したやうな氣がして……ふと見ると、朝顔もはや萎れてゐるの。

○茄子　　麴町　加藤豐子

美いちやんは緣日で買つて戴いた茄子の木に可愛らしい實がなつたもんですから大喜びてこれが大きくなつたらお父さんとお母さんと姊さんと皆なに自分で料理して御馳走をしますつて。

○姉樣へのお手紙　　岩代　ひかる子

姉樣何程かお暑いでせう此方は夕方になると涼しく其上螢は天地を飛びかひ軒の風鈴は涼風に誘はれチリンチリンと每夜何曲かを歌つて居ります姉樣よ一日も早く御歸省遊して此美しい夜景をおほめ下さい。

○夏の或る日　　長野縣　中島白薔薇

そよ〳〵と涼しく吹く夕風に、紅蓮白蓮の香、ゆかしう、浴衣の袂に薰りきたり盃の樣なる靑き大きなる葉の上にて、白玉のやふなるつゆのゆらぎ浮葉のうちにて、靑蛙の凉しう唄ひし。

○朝の樂　　肥後　鈴木たち

姿が每朝の樂しみは、花園を見るのである、今朝も起きるなり行くと、栗百合が咲いて居る、で机の一輪生にさそうと思ひ切りかゝつてふと目に留まつたのは小さき蝶のねむつて居る姿である。



京都上加茂神社

○無邪氣　　三河　白菫女史

姿が隣のかよちやんに、此所へ片目の人を百人連れて來たら目がいくつありますかと聞くと、優しい首をちよいと傾けて、分つてよ、それは五十でしよふと答へました、ほんに子供は無邪氣なものですこと。

○弟より兄へ　　函館　星子

今年七ッの弟兄への手紙に「兄サンヤ失敬此の間は押花を入れて上げたから今は兄サンの大好なカステラを入れやうと思ひましたが姉樣が手紙に入られないと云ふたから粉ばかりを入れます、何卒御食へ下さい」。と

○かしわもち　　小倉　安藤なか

五月の節句も今日、お隣のもち屋でうなつ居るから何んだらうと行つて見たら、女學校の生徒樣らしのが二三人てしきりにかしわもちをのどへつめておいでだ、みつともない事だ。

○歸省　　相州　伊藤ふく子

應と曲腰のべて祖父樣の。母樣は笑顏もて迎へられつ。畑の方よりは父樣の鍬を手に出で來られしが。傍より土產ねだるは實に妹とし子。されど在はさゞるは兄上の、只いかめしき軍服のみ姿のみぞ目に殘りて。



誌友倶樂部

○諸孃と記者

○記者先生私は第五號からの愛讀の一人になりました、投書など思ひもよらぬ事で御座ひますが投書せよとの御說を相見しまして勇氣を起して投書しましたからどうか御直しを御願ひ申上ます（野菊）（記者曰、其勇氣何時までもお續けなさい）○妾は修業致したい考から、每號の「選評餘談」を、數回熟讀するのです、成るべく委しくお書き下さる樣に願ひます、尙、記者諸先生の御健康を祈ります。（記者曰、結構です、餘談は勿論詳しくお書きになります）○記者樣妾は奉公の身で書を學びたくも學ぶ事が出來ません然るに此神聖なる「女子文壇」發行になりましたので妾は誠に嬉しく思ひます朝夕のつとめの御暇には師と賴み友と親しみて愛讀して居ります尙拙ない文でも勉强して投します故宜しく御願ひ申します（小林松枝子）（記者曰、わが誌友諸孃の中に、あなたの樣な特志の愛讀者を得ましたのは誠に光榮とする處です、本誌の記者はハイカラ流の、輕薄な女子の友人たることを好みません、眞面目な愛讀者を欣びます）○ことしやうやく小學をおへし身の拙き節々數々あらんも唯文に勵む妾の心をくまれて御掲載の榮を賜はらば此の上なき幸にこそ（淺利さだ）（記者曰、御發達はこれからです）○投稿は各欄とも、一人佳作一章づゝとの事でござゐますが、若し二章を一封にて投書すれば如何致しますか、又一ケ月間に幾投書してもよろしいのでございますか、何卒敎へて下さい（上毛新田の里ゆふ霞）（記者曰、二章を一封でも、又一ケ月に幾度でもかまひませんが、御自分でも成だけいゝと思ふのをお出しなさい）○俳句の投書は之れで宜敷しいのですか駄句ですが是れからは熱心に投書致したう御座います（葭江）（記者曰、よろしいです、だうか御熱心に）○妾は文章を作り初めました頃は日に數文をつゞりますも（無論拙劣）さほど難儀とは思はなかつたですが近來は非常に苦心經營しましても一文が難しい位です是は思想が涸れたとか言ふ樣な惡い徵候なのでせふか（三河つま子）（記者曰、惡いしるしでなく好いしるしでせう、文章はさう幾つも續けさまに出來るものではなく、殊に思想の優れた、文字の練れた、文章となると、なか／＼其苦心經營が入るので、あなたが文章を作るのが、むづかしくなつたと仰るのは、第一段の進步を意味して居ます、其處を奮發して、むづかしい處を忍んで好い文章を作るやう工夫なされば立派な文章家になれるのです、よく御考へなさい、それから今一つのお尋れは文意が少し解しかねます、今少し詳細にお尋れ下さい）○本誌は月二回發行にはならんのですか、妾は月二回發行になるはいつかと待ちあぐんで居ります、（霞溪女史）（記者曰、當分月二回には致しません、一回の方がなほ樂んで待つ間が長いじやありませんか）○私は當地書林より御誌をもとめ愛讀いたし居る者ですがお恥かしさを忍びて短歌を御願ひいたしました、此通りでよひのですか御誌上で御知らせ下さいまし（むらさき）（記者曰、半紙半分に一首づゝ認めて下さい、あなたのはよいです）○夏休みを幸ひ是を初めに投書しますが（イ）投書は同じ封筒に二人はいけませんか（ロ）變名にしても妾の封筒には本名を要しますか（ハ）投書の名宛は何と書きますか（ニ）投書は返して頂けないですか（白菊）（記者曰、（イ）二人にてもよろし（ロ）本名は必要（ハ）矢張女子文壇記者宛（ニ）返しません）○ハガキ文を半紙半枚に書いてはいけないでせうか、ハガキに二十四字詰に書くのはむづかしいですから（磐城愛讀女）（記者曰、半紙半枚にならよろしい）○記者先生樣**私等は姊妹で二人共至りてつまらないもので**ございますがどうぞ末ながくお願ひ致します（白水、正子）（記者曰、御姊妹なら猶更はげみ甲斐がおありでせう）○記者樣よこの女子文壇のやうに妾の理想に適した雜誌はありません、この雜誌のために妾は淺野しげるさんのやうないゝお友達を得る事が出來ました寫眞の交換もしましたのよ妾の方で愛讀して居る者は妾一人てしたが皆樣に御すゝめしたものですから今では愛讀者が四五人ふえました、猶これからもこの文壇の爲に御盡力遊ばして下さいね。（常州叫月女史）（記者曰、女史の愛顧や亦深いものです、大いに謝します、記者も亦誓つて理想の雜誌にしたいと思つて居ります）○敍事文と抒情文との區別が能く分りませんから敎へて下さい（秋田白妙女史、田舍女）（記者曰、敍事文は事がらを主としたもので景色を敍した文の如きもの、抒情文は感想を主としたもので、悲喜の情などを抒べたもの、實地は本誌の文例に付いて御らんなさるのが一番早くわかります）○記者さま一つ御敎示を願ひたいのです。あの圖畫は實物を寫すのですか又は本にあるのでもいゝですかな。（薩州　菊女子）（記者曰、本にあるのては困ります）○誌友倶樂部へ通信しますにははがきてしてはいけませんか又投稿と共に封じてもよいのですか、ドーゾ一寸御答を（靜岡縣鈴木ちとせ）（記者曰、どちらでもよろしい）○記者樣次の件々御答を、（イ）俳句は短歌の樣に半紙二ツ切に一句書いても宜しいか、（ロ）はがき文は例へば論文の樣に半紙に書いても宜しいか、（ハ）圖畫は半紙二ツ切或は四ツ切の中央に二寸の三寸の線を引き、その中に書いても宜しいか、そして姓名は何處に書くのですか、（ニ）論文は論文、敍事文は敍事文と原稿に書いて置くのですか、（ホ）原稿は一枚何行に認むのですか、（ヘ）投書〆切は發行前幾日ですか、（ト）論文や敍事文や抒情文は規定の行數より少しぐらい多くとも構ひませぬでしよう、どうか次號の本誌で御答を願ひます（尾張愛讀者）（記者曰、（イ）（ロ）、お尋れの通りでよろし、（ハ）は一寸と二寸に寸法が變りました、姓名は繪の寸法以外の處へ書く、（ニ）其通り（ホ）行數に制限なし、只餘りつ

めて書かないやうに(へ)約四十日(ト)成丈け多くならないやうに、已むを得ぬ場合に二行三行や延びても致方はありますまい)

○記者先生私は此度始めて投稿致しました規則に違反した點は御座いますまいかどうぞ次號までに(はなはちす)(記者曰、違反して居りません)

○記者樣本欄へ投書するのは他の投書を一まとめに出してもよいですか(イヤ子)(記者曰、よろしい)

○記者さん、私は性質が活潑で、字を書くにも何だか男子の書いたように書きますが、男子と思つてくれてはいやですよ(手賀沼のほとり中村よしえ)(記者曰、承知しました、女性だと信じて居ります)

○記者先生樣御親切に御教へ下すつて有難う御言葉に甘へ御笑ひぐさに御訂正をねがひます、何卒澤山に沒書なすつて拙腕を練磨させて下さい、何時までも落膽に打勝ますから次に投書を送るには此通りで宜しうございますか(伊具二少女)(記者曰、決して何時迄も沒書ばかりではありません必ず出ませう、投書も此通り規則に外れて居りません)

○記者さん私は此度はじめて投稿したのですが貴方はこれて宜しいのですか(美作一少女)(記者曰、よろしい)

○記者樣私は女子文壇が大好きよ、早う送つて下さるし口繪がとれる樣にしてあるさし繪がきれいなのばかりでも今月は二日につきました又口繪ははづして壁にピンでとめて居ます。殘念な事には、私は、まだ、高等科一年で、無學で投書する事が出來ません。ちと無理てですが、これから繪はがきをつけて下さいませんか(伯耆榊原松子)(記者曰、繪はがきいよ〱つけますから別項編輯だよりをごらんなさい)

○本欄への投書は罫紙ではいけませんか、又畫は規定寸法が變りますが其時の通りにするのですか紙はほくたん紙や畫用紙ではいけませんかそして水彩畫ですか毛筆畫ですか(伯耆榊原貞子)(記者曰、罫紙でもよろし、畫の寸法は其時の通りにするのです、紙は雁皮紙或は灕葉の類、毛筆畫)

○用紙は此紙ではいけないでせうか妾は投書が始めてゞすが初めへ叙事文と抒情文とかと書ひてをかなければいけないでせうか紙上てお答を(野菊)(記者曰、投稿用紙此紙では大き過ぎます、**普通各地で用ゐる半紙形がよろしい、叙事文、抒情文は是非初めへ書いて置くと)**

○今月の圖畫は一寸と二寸との角としてありましたが小さい方か今までの二寸と三寸版のかわかりませんので大きい方と小さい方と兩方書きました(加藤豐子)(記者曰、一寸と二寸に定まつて、二寸と三寸のは廢したのです)

○記者樣に伺ひます、投書の仕方、こうゆう風ではいけませぬか、――私製はがきにははがき文や、俳句などを書いて、他の半紙投書と同封すること――、如何ですか序に御願ひ致します、私は初號から愛讀して居りますが、まだ投書したのは二三回に過ぎないのです、が、文の未熟かまだ出たとはありませぬ、第六號のはじめの社說で大變勢ひが出て、それから二回投書したが、文字の未熟も大方です、どうか、御直し下されて、拙きはどし〱沒書して下さる樣。(獅子海中子)(記者曰、封筒へ入れて下さるならハガキ文などは半紙へ書いて下さる方便宜です、但し私製ハガキでも不都合はありません、御投書は今に紙上へ出るでせう)

○記者樣私は此度初めてなので勝手が分りませんが之れでいゝのですか、又私は至ツて文字が下手なのです之れでも分りましよか(中村ちか)(記者曰、之れでよろしい、文字は下手でも能く分るやうにさへ書いてあれば何の差支えもありません)

○記者先生私は田舍の無學者てすが六號から本誌を愛讀して居ります恥かしながら別紙御目に掛ます投書は是でようございますか(伊豆國えさ子)(記者曰、是れて不都合はございません)

○記者樣淋し訪ふ人もなき田舍に詫びしく日を過して居りますので御座いまして「女子文壇」こそ妾しがたゞ一の親しき友なんですが今後少しづゝ不出來ながらものせしを投書さして載きますからどうか宜數お願ひいたします(みわ子)(記者曰、永くお友達となりたいものです)

○妾は初號からの愛讀者でございまして今迄數回投書しやうと思ひましたが引込思案に止して了いましたが六號の社**說を拜讀し大に感ずる所がありましたので今後は不文ながら投書いたします　文も拙つく字も下**手ですがど―ぞ記者樣余白があらばのせて下さいまし次に投書は皆これて宜うございますが御伺ひ申します(つゆ子)(記者曰、これで宜うございます、勉めて投書なさいまし、屹度能くお出來になるやうになりませう)

○記者樣妾は田舍に住む一少女でございます田舍に生れた悲しさには思ふ儘に學問も出來ず遺憾に存じて居りました處去一日本誌を得ましてからは優美なる思想を練る事が出來且つ廣く天下の諸名家及愛讀諸姉の玉文を拜し之を無二の師友として居るのでございますど―ぞ記者樣此後も益々善美に導いて下さいませ(紫翠女史)(記者曰、誠に地方に居らつしやいますと好い雜誌を購讀なさるのが何よりの樂みでもあり且思想を開發する助けとなりませう、本誌も決して諸嬢の愛顧に背かぬやうつとめます)

○私は初號からの愛讀者ですが、嘗て投書した事はありませんが六號の社說と記者樣の御熱心とに感じ。御耻かしさ。腰折れ、作文など投書致さうと。存じますから。記者先生宜ろしく。願います(佐世保いし子)(記者曰、左樣な方は外にも澤山ありますから、いッしよに本紙上で御勉強なさいませ)

○記者樣私は女子文壇を第七號から愛讀して居りますお耻かしながら初めてこしらへて見ましたどうぞ、おなほし下さいませ(はる子)(記者曰、玉稿はたしかに拜見、それ〱諸先生へ廻しました、何れ紙上へ出るでせう)

○記者さん短歌や、作文が、一定の規則に、違反してなかつても、余りまづいと、御掲載ありませんか。一寸御伺ひ致します(佐世保いし子)(記者曰、勿論餘りまづいと選者先生の方でお選めになりませんから紙上へは出ません、何うか餘りまづくないのをお作り下さい)

○記者樣毎月〱愛讀者の多くなる事は非常ですわ今に幾萬人と云ふ程になつてよ社は樂へ皆さんは御上手になり實にたのしみですわ(上毛美津多摩海女)(記者曰、皆さんの樂みは記者の樂み、社の欣び、今に十萬に達したらお祝ひでも致しませう)

○記者さんに申し上げます私は高等小學校中途位の者ですから規定を讀んでも充分わからずに居りますが早く投書して見たいから心得もせずに投

書致しましたが圖畫の分は何寸に何寸ですか御數へ願ひますすべての投書は普通半紙では可けないのですか又他の愛讀者の諸君私も八月から愛讀者になりましたから御交際を願ひますす(安藝國山縣郡八重村今田石田ときの)(記者曰、投書規定を讀んでもお分りにならぬ處は遠慮なうお尋ね下さい、圖畫は横一寸縱二寸と云ふ事ですが、たてよこは何うなりましても宜しいから、一寸と二寸の大きさの紙にさへ描いて下さればよろしい、投書は普通の半紙で差支えありません)○女学の文學雜誌では無論我が「女子文壇」が第一等です其の表紙口繪寫眞の淸麗なる拾錢の雜誌で何うして斯う立派に出來るか不思議で只私の本誌に對して遺憾とするのは川柳の無い事です何うか本誌でも川柳欄を設けて下さい(秋田出羽雪子)(記者曰、少し考へがありますから川柳は置きません)○記者樣、私は六號よりの愛讀者でありますが、第三號より英文を加入の由、只今三號、四號、五號の三冊賣りのこりが御座いますなら、一寸知らせて頂戴な、(千葉縣小林壽江子)(記者曰、三號は僅かばかり殘つてゐますが四號五號は賣切れました)○今私は高等三年です。私はなるだけためになる本を愛讀して自分の智慧を發達させやうと思つて本誌を愛讀して居るのですから私は投書するだけの力はありませんがぽつ〳〵投書致さうと思ひますがかまひませんか(神戸市諏訪山大島ちき)(記者曰、愛讀なされば何よりです、投書は必ずしもお急ぎなさるには及びません)○記者先生に伺ひます私は十五才ですけれど未だ一度も投書した事はありませんけれど此度は投書して見たいと思ひます如何で御座いませう又しばらく本名を知らせたくありませんが名はどうしたらよう御座いますか此二ツを御答へ下さい記者樣(長野縣一少女)(記者曰、外に初めの方も澤山ありますからお出しなさい、名は花の名でも何でも假に號をつけてお出しなさい、當分本名は承はりますまい)○通信には別に字詰や行の規定はないのですかこれでもよろしう御ざいます(埼玉みどり子)(記者曰、**別に規定はありません、これでもよろしい**)○

私は片田舍の者ですが初めて栞がき文へ投書致しました何とぞ御批評ねがひます外の雜誌にも見ましたが出す氣に成れませんでしたが御誌にばかりは動かられましてお恥かしいのですが御目にかけます(萱野ゆかり)(記者曰、特に本誌にばかり寄稿すると云ふ方も澤山あるやうです)○和歌はハガキにて投書致してもよろしきや又一ケ月內に何回ら寄贈致して差支之無く候や(愛讀女香花)(記者曰、何回にてもよろしいが成るべく半紙半枚に一首づゝねがひます)○俳句は端書でなくとも半紙へかいて外の叙書文などゝ同封てやつてはいけないのですか紙上でも御知せ下さい願ひます(上毛新田、汀柳、柳月)(記者曰、よろしいのです)○拙い文が饒倖にも推撰せられ今月賞をさへ御惠與被下誠に有がたく頂戴致しました。姿が此樣になつたのも皆記者閣下の御かげと深く謝し參ります。尙之れより一心になつて投書しやうと思ひます(越後小柳まく)(記者曰、皆御修得の結果です、此上ともお勵みなさるとは何より、記者も欣喜の外はありません)○記者先生第八號の(綠陰)ほんとによろしいのね百合の花を持つてゐらつしやつる方もいゝわ又花もいゝわ此後も澤山おねかひ申ますよ(大阪南區白萩女)(記者曰、澤山出しますよ)○記者樣私は今年高等小學校卒業して女學校に入學しました無學なものですけれど之から色々投書しますから直して下さい女子文壇は發行が一番早いから本當にうれしいわあのどうぞ記者樣方の御寫眞をお出し下さいまし御願ひですから(當時下關にて大和きく子)(記者曰、寫眞は當分出しません)○記者さん私は漸く八號より愛讀者になりました私は何も知らぬ者ですのに投書したくてとうとう新體詩と短歌と投書したのです是からは賞でもいたゞく樣になりとうござりますどうかよろしくねがいます(香川縣すみ子)(記者曰、なれませう、御勉强次第で)

○本號から初めて投稿をするから宜しく願ふとか、初號からの愛讀者だけれど男を振つて文章を出すとか云ふ種類の投書は隨分多數で、別に又本社の隆盛を祝され、或は記者に懇切なる暑中見舞を辭をたまはつた方も多數で、此等は到底本欄へ載せ切る事が出來ませんから、左に芳名を記して謝辭に代へます、諸孃の厚意は社員一同深く感謝いたして居ります、但し文章に芳名の洩れて居る分も多數ありました、此等は已むを得ず御住所姓名を載せて謝辭に代へる事が出來ませんから惡しからず思召て下さい。

○備中、なでしこ○相樂郡、堀池靜子○大阪市、よし子○在甲府、中島ふどー○たまき○上毛、月岡芳枝○吞子○加島村の一少女○柴山水雨○露子○美枝子○宮城松江○德島市、若山みさほ○京橋、伊東幸子○兵庫山陽社宅、柳田のぶ子○北海道、七飯、伊東錦子○熊本、村岡みれ子○三河、紫淸女史○熊本市、つろの○壽子○里の少女○遥江、無名子○樋口きわめ○長崎、野瀨あい子○せん○天野、野○神田、澤地浦子○京都、すみれ○神戸、菊森としへ○川井萩琴女○近江、小田ちよ○澁谷分院內、いと子

○剽窃詩文の注意

○詩文を剽窃すると云ふ事は一種の公德問題てすから記者の方て之を全然無くすると云ふ事は出來ません、只幾萬の誌友諸孃の中で一人でも公德に背いた行ひをなすつたら、汚れた名は紙上へ出るのです、さて本號にも亦多少の注意が參りましたから、例に依り一括して列載します、左は第八號の分です。

△文章の部

○叙事文秀逸和歌山市東香子の「水邊の納涼」は明治三十五年七月發行「中等教育國語漢文講義錄」所載第四回懸賞文甲賞神田三崎町一丁目十三番地菊地方多田寅松君作の「水邊の納涼」を剽窃せしものにて只原作は獨りにて出でしを二人にて出でし如くせし故本文中一二行原文より増加せり。

○同じく秀逸大分縣中津京町失名女作「夕立」は明治三十五年七月一日發行の「少年界」定期増刊少年文壇に於て甲賞を得たる山口縣長門厚狹郡厚西村今橋鐵三君の作を剽窃したるものなり

○抒情文天賞伊豆國田方郡三島町字長谷加藤滔子の「春の野」は「中學世界」定期增刊花香島録抒情文中百五頁、紀伊田邊桑町原保吉君作「春の野に若き農夫となりて」剽窃せしものなり。

○同じく抒情文地賞靜岡縣小笠郡南山村松下德子の「五月雨」は去年の「中學世界」七卷十號百七十九頁の常陸多賀郡松岡村下手綱小澤榮太郎君の作「五月雨の詩趣」の第二節の初めの一行を飛ばし二行以下を丸抜きにしたるものなり。

○抒情文秀逸赤坂新町五丁目四十一河村ふき子の「磯のわかれ」は本年三月一日發行「秀才文壇」五卷五號の美文地賞廣島神谷秋蝶作「わかれ」の剽窃。

○消息文秀逸上野國富岡町下野松尾方翠山女史の「都の友に寫眞の取り換を乞はれしに」と云ふ一文は樋口一葉女史著博文館發兌「通俗書簡文」九十九頁に在るを剽窃せしものにて最も此消息文は「女子國語讀本」卷五にもありて往復二通あり、差出す方の分も前に剽窃されし事あり。

▲新躰詩の部

○人賞靜岡縣小笠郡南山村松下德子の「春がたみ」は「萬朝報」募集新躰詩第二百二十四回馬場孤蝶選の第三、陸前尾形翠星君作「春がたみ」の剽窃なり。

○秀逸愛知縣かれの「琴の音」は三十六年一月發行「中學文壇」第一卷五號の富山岡野半學君作地賞當選琴の音の剽窃、一字も違はず。

▲三十三頁上段磐城秋月女史の「虹」は「少年世界」第七卷第七號新躰詩欄より剽窃せしもの。

▲繪畫の部

○天賞神戶市相生町四丁目一五一木田しげ子の「金魚賣」は本年六月發刊の「大阪朝日新聞」より剽窃せしものにて、猶右の繪畫は六月發刊の「こども」(大阪より出づる雜誌)にもあり。

以上は本誌第八號の剽窃文です、即ち懸賞當選者松下德子、加藤滔子、木田しげの三名には無論賞品を送りませぬ、又六號七號の剽窃詩文で前號の注意に洩れ、新しく知らせて來られた分を左に發表します。

▲第六號の分

○圖畫の部人賞埼玉縣渡邊きくの「田の畔」は本多錦吉郎氏著「小學圖畫臨本」中「田野」の一部分を剽窃せしもの。

▲第七號の分

○論文秀逸泉州天堀美浪子の「ネルソン傳を讀む」は明治二十七年十一月廿日博文館發兌「學生筆戰場」第四卷第二十二號乙賞福岡縣生葉郡姫治村佐藤孝三郎君作の「ネルソン傳を讀む」と大同小異なり。

○小說秀逸の部伊豆加藤滔子の「摩尼水莊」は明治三十六年一月發行の「婦人界」定期增刊閨秀文學中、九十六頁にある八千代子の「友達」と寸毫の差なし、全く剽窃なり。

○はかき文秀逸本郷山峯庵の「人の世」は本年一月十五日發行「中學文壇」寸金中神田美士代町原雪溪君の作の剽窃なり。

○同百二頁下段京都花薹の「桔梗」は「女子國語讀本」第七卷大町桂月氏の百花譜の一部分を剽窃せるもの。

○新躰詩秀逸埼玉渡邊きく子の「少女」は明治三十四年發刊新躰詩集「月の桂」の中なる與謝野鐵幹氏の作を剽窃せるものなり。

右に依りて六號の圖畫賞撰者渡邊きくには賞品發送を見合せました。

○是は剽窃ではありませんが第八號和歌天賞群馬縣吉田きみ子の作は六月一日發行「秀才文壇」五卷十二號にも地賞として當撰して居ます、最も作者は同人ですから剽窃とは言へませんが、既に一度他の紙上へ出たものには懸賞無効ですから賞品は送りません。

○例に依つて剽窃詩文の注意を送つて下さつた方の芳名を左に列記して謹んで其勞を謝し記者の不敏を助けられたる親切を併せてお禮申します。

○岩代、紫翠女史○大阪西區、平田撫子○辰井琴子○常陸、栗女子○たか子○菊子○無名女○信州、前掛女史○甲斐勝沼、なてし子○安房山人○大阪西區、樋口紫電女史○德島、住友とき子○神奈川、中村ゆかり女史○福岡縣、伊規須翠楊○大阪堂島、梅本やよひ○讃明生○但馬、愛讃生○小倉市、みつる○近江石山、一少女○近江大津、愛讀生○府下、山本澄子○麴町、加藤豐子○神戶、秋嶺女史○白金、山中○小島いづみ子

○諸孃の交際

○私も東京のたそがれ樣のよーに畫が大好てす皆樣、何卒水彩畫木炭畫日本畫等の類を送りて下さい私も着次第送りますから(熊本市細工町三丁目三九茂里方つるのにわ)○皆さん私は遠國の方々と文通致し度ひのですが御思ひの御方は何卒どし〳〵御送り下さいまし(越後岩船郡村上小町長島はつ子)○竹田久子樣森久子樣宮崎久子樣田能村久子樣田生久子樣三浦久子樣大石久子樣舟木久子樣櫻木久子樣藤原久子樣共に御同名の御緣を以て御交際しては下さいませんか(今紫久子)○記者先生次號から繪はがきをつけて下さいな皆さまどーぞ御贊成あそばして下さいまし本誌には上毛の方もよほどお見えのやうですが皆さんどし〳〵御投書なさいましそれから七號の越後の小柳滿玖子樣私も貴女と同じやうな過境ですから以後は御心安くれがひます次號に必ず御住所知らして下さいすればすぐに私から手紙を上げます(上毛新田の里すみれ子)○諸孃の内で本誌第一號を御ゆずり下さる方は御座いますまいか私は一號を如何にもして得ようと思て最よりの書店に申すに及ばず本社に迄聞き合せましたが御座いませんから大變困て居ます(廣島市大須賀村奥本いそな)○東京の坂田常子樣へ御禮申します御芳名は遠から承はつておりましたが不計栃木の溫泉で御尊顏を拜し其後亦雜誌をも送つて頂戴し何と御禮の申上樣もありませむ(福岡上新川端町五五三坂梨芳子)○松井長子樣御尋ねに預りまして有りがたう女子文壇は私の文章の先生よ貴孃直接に御手紙下さいな尙高橋りは子さん大川石子さん以後宜ろし

く御交際下さいな（北海道膽振國早來本郷なほえ子）○女子文壇愛讀皆樣妾にも御交際をお願ひ申ます、して妾にあみもの栞を送つて下さいな御送り下さいました御方樣には私もよくは出來ませんがあみものか繪はがきで御かへししますよ（神戸市桐生町四丁目一五一ノ七木田繁子）○皆樣御交際を願ひますよ、尚長野縣の工藤松子樣、貴女も御同縣でお懐しい事、妾は本郷村ですどうぞお遊びにお出で下さいな（長野縣中鹽田本郷村矢嶋嘉子）○北海道の土屋みさ子樣貴女も都の戀しい御一人ですか私も都の女學校を卒へまして只今は國に居りますがやつぱり都の戀しい一人ですから何卒此を御縁に此後も親しき御交際を願ひます（山形縣新庄町北本町高山喜代子）○記者樣初め皆樣に申上ます私は信州の淺間山のふもとに其日を送つて居る者ですお當女子文壇の第十六號から愛讀者になりましたどうか記者樣皆樣あいかわらず御交際下さい（信州伊藤ろく子）○第八號の諸孃の御交際欄一○七頁の上段の濟谷八郎方吉田みち子は清水八郎方の活字の間違ですから不明で戻つた方があるやも知れませんから御詫致しますどうぞ今度は清水八郎方をして御送り下さる樣願ひます（みち子）○私一番好きなのは淺野しげる子樣あゝ何と言ふやさしいお方なんでせう！少し近いなられ御一所にお遊び申しますのに殘念ですわ（肥ノ國久子）○男子の女子文壇愛讀者の御方々に申し上げます御親切に御手紙下さるのが厚く御禮申し上げますが私しは大變迷惑致します故以後は固く御男子の方との御交際は謝絶致します惡しからず（北海道本郷なほえ）○文壇諸孃樣お手紙や御自筆の繪端書を送ッて下さいな屹度お返し致升「先着者」には絹製の編物三種上升お約束しましたよ（山城國乙訓郡乙訓村井内林和一方バイオレット）○私は一寸した事から七月二十四日なつかしき家を出てまして、とある都に物學びに行きましたすると、かなしいかな私はいむべき病にをかされて成功せずたゞ〳〵歸りました其の時の姿が心くれ〳〵も（宮城縣角田町一沼湖畔にて一女史）○**神戸にてよなえ樣あなたも群馬ですつて、おなつかしう存**じます以後はよろしくれがひ上げます私の住所は新田郡藪塚本町ですどーぞ御交際を願ひます八號にて父子樣へ仰の通りたき子と申のは私の姉で御座います姉にきゝましたら御名前ばかりではわからないと申ました何卒御住所御姓名を御知らせ下さいましお手紙下さいませば私も拙筆ですが御返事さしあげます（伏島直子）○私小說「暑中大探險」を未だ御存じない御方に送りたひと思ひます御望の方は下名へ（茨城縣新治郡石岡町字宮下石崎秀子）それから皆樣繪葉書の交換も願ひます私も自筆で御返事致します（石崎秀子）○誌友諸姉よ妾は五才の時母に死別し同時に父には生別れ其後は義祖父母に養はれ同胞とない薄幸の少女であります妾と同じ薄幸の方と雁書の御交際致したいと存じて居ます妾は池邊増田兩君合著の「義姫還曆」と秀才文壇本年一月以後なれば何號にても宜敷御交換下さいませんか伏して願ます（山口縣熊毛郡三輪村福永美都子）○愛讀者御令孃方よ此後は親しく御交際のほどひとへにお願ひいたします（駿河村上節枝）○女子文壇愛讀せられます諸孃樣私も六號から御仲間入をさして頂きましたから何卒此不束者末長く御交際下さいませ繪端書の御便よりもどうぞ願ます又私の故郷北海の皆樣若し此に草にも等しき私が御覺えも御座いますならば其尊きに水莖のあとをめぐめて下さい十有餘年住みなれし札幌の天地が戀しくてなりませぬ（横濱市中村町一四六八大村方小川初子）○文通を以て御交際をねがひます（栃木縣宇都宮市時町三十五筑波久和子）○神戸津村樣佐藤樣お手紙ありがたう、それから北海道松井長子樣、御親切なり手紙恐れ入りましたお返事とゞきましたか（兵庫山陽社宅柳田のぶ子）○私は折惡しく六號を買ひはしましたから諸姉の中誰方か口畫の揃ふてるのを送つて下さる方はありますまいゝ下された方には美しい畫はがきを卷し上げます（本郷區弓町一ノ二五小島すみれ）（記者曰、六號ならば本社に少し殘つてあるさうです、相當代價を入れて御申越しになれば送ります）○私**は九月に宮地を去つて　外國へ行くか日本に居りますか未定ですか　兎も角一時は皆樣とこれで御別れ致します（加藤湖月）○諸孃樣私は貞操あるお方々と　神聖なる文通の御交際を願ひ度いと思ふのです又娛樂の一つとして　繪ハガキの交換をも（東京南千住町九百四十五番地野口方眷子）**

編輯だより

○繪葉書添附。　**諸孃がお待ちかねの繪葉書は愈よ次號から本紙につけます、　從來山中河合兩畫伯の筆になつた彩色口繪の代りに鏑木清方氏が得意の風俗畫と花季類との繪葉書を添へます、女子文壇の繪葉書と云へば天下を横行して繪葉書界の大評判たらんことを期して居るのです**

○投稿規則。　投稿規則は必ず毎號一わたり眼を通して下さい、　時々規則に變る事がありますたとへば圖畫の寸法が小なくなつたやうな事て、一々注意しないでも能く規則を御らん下さつたら間違ひはありません

○原稿の部分わけ。　投稿には論文、敍事文、抒情文、消息文等の別を文章の初めに必ず書き入れて下さい、　短歌や新體詩は一目しても分りますが、文章は鳥渡見ても分りませんから、わけて無い爲に非常に手數を要する事がありますす、忘れないやうに書き添へて下さい

○投稿の輻湊。　毎月〳〵投稿の數は増すばかりて、之れ偏に誌友諸孃が愛顧に依ることゝ存じ聊かそれに酬ゆる爲め本號から數頁の紙數を増加しました、併し代價は少しもあげません、本誌は一人でも多くの寄稿者の滿足を計り一人でも多くの讀者を得たいと思ふばかりて、單に營利主義の雜誌とは自らちがひます。

B. Thank you, she is insproving very rapidly. Let us talk about something else. Tell me about your summer.

A. I was mostly in Karuizawa with my mother. Though we have had a great deal of rain, I enjoyed the summer up there and certainly rested well.

B. It must have been delightful. Is not Mount Asama very near from there?

A. Yes, it is. But please do not ask me whether I cmilbed the valcano.

B. That means you did not.

A. But tell me about your summer experiences.

B. You see that my home is in Hakodate and so I was very fortunate to learn swimming, fishing, and even rowing when the sea was calm.

A. No doubt that you are well sun-burnt. That is the best sign of health and vigor.

B. You are very flattering.

A. I have a great deal to ask you, but I hope to see you soon again.

乙　難有御座います，大相早くよい方に向ひて參ります．病氣等の話は止めて外の事を話しましよう．貴女の夏の事を御聞かせ下さい．

甲　私は母と一所に大概輕井澤に暮しました．なか々々雨が降りましたが面白く送りまして休む事はよく休みました．

乙　其れは御愉快で御座いましたでしよう．輕井澤から淺間山へは大相近く御座いませんか？

甲　相で御座います．併しあの火山へ登たかと御尋ねなさらない樣に御願ひ申ます．

乙　御登山なさらなかつたとの意味で御座いますね．

甲　マーどうか貴女の夏の御經驗談をして下さい．

乙　御承知の通り私の家は函館で御座いますから水泳，魚釣，又海の穩かなる日には舟漕さへ習ひました．

甲　成程，日に焦けなさいました．それが健康と氣力との最好の記號です．

乙　御上手です事．

甲　色々御伺ひ申たい事が御座いますが又近日御目にかゝる事に致します．

the grass. Oh, listen to that sweet warbler! She sings and sings all the day long ever since I came here a month ago. Where, except here, can we hear the song of a warbler at the end of the summer?

If not for the mist, I might see Mount Fuji at this moment. Next Wednesday, if it proves to be fine, we want to climb the mountain. Will you not join us? Do let me have a favorable answer.

Very sincerely
Yuki Takamine.

給へ．私が此處に一ヶ月以前に参り候以來堪えず歌ひ居候，かゝる山家の外に何處にてか夏の終りに鶯の聲ときゝうべきやと存候

今もし此霧なかりせば富士山の見え得べきものを！來る木曜に晴天ならば登山せんと存じ候が御前樣にも御同行如何に候や．何卒嬉敷御返事の程願上候．

高峯　雪子

A Chat.

A. How are you? I was not expecting to see you so soon in Tokyo.
When did you come back?

B. Just a week ago. I did not intend to leave home so soon, but a very dear friend of mine has been ill during the vacation, and so I thought I might be some help to her if I could see her now and then.

A. I am very sorry for her.
How is she now?

閒　話

甲　如何て入らしやいますか？こんなに早く東京で貴女に御逢ひ致すとは思ひませんでした．何時御歸りになつて？

乙　鳥渡一週間前に．私も斯う早く家を出ようとは考へませんでしたが，私の親友が休暇中病氣して居りましたのでもしや時々見舞たら何かの役に立つかと存じて歸京致しました．

甲　本當に御氣の毒で御座います事．此頃は如何て入られますか．

That moss-covered vessel
I hailed as a treasure;
For often at noon,
When returned from the field,
I found it the source of
an exquisite pleasure,—
The purest and sweetest
that nature can yield.
How ardent I seized it,
with hands that were glowing,
And quick to the white-pebbled
bottom it fell!
Then soon, with the emblem
of truth overflowing,
And dripping with coolness,
it rose from the well,—
The old oaken bucket,
the iron-bound bucket,
The moss-covered bucket
arose from the well.

S. Woodworth.

苔の生しける　器をば
寶と我は　崇めつゝ
眞晝に野より
歸り來て
こゝに快樂を
我は得し,—
此のたのしみに
超すあらじ.
燃ゆる手を伸へ
釣瓶取り
急ぎて落とす
小石底!
溢ふ眞理の
記標とて
滴たりつゝも
汲み昇る,—
古き柏に
金輪せし
苔の生したる　かの釣瓶
井戸より上りし　釣瓶かな

Gotenba,
Aug. 25, 1905.

My dear Friend,

From the above address you know where I am. It is joy to with a few lines to you while the breeze plays softly with the pines in front of my window and the winding brook murmurs among

御殿場
八月廿五日

親しき友よ,

此の宿所書にて私の何處にあるか御承知に相成候半と存候窓の許なる松に微風の調を耳にし，叢分くる小川のさゝやくをきゝつゝ一筆參らす事の嬉敷存候．おゝかの愛らしき鶯を聽き

英　文

津田梅子閲　　河井道子述

The Bucket.

How dear to this heart are
　the scenes of my childhood,
When fond recollection
　presents them to view!—
The orchard, the meadow,
　the deep-tangled wild-wood,
And every loved spot
　which my infancy knew!
The wide-spreading pond,
　and the mill that stood by it;
The bridge, and the rock
　where the cataract fell;
The cot of my father,
　the dairy-house nigh it;
And e'en the rude bucket
　that hung in the well,—
The old oaken bucket,
　the iron-bound bucket,
The moss-covered bucket
　which hung in the well.

釣　瓶

最も貴し　此の胸に
振分髪の　昔をば
床しく描く
　　　　　想出は！—
果樹園牧場
　　　　　茂る森,
幼心に
　　　　　愛でし場所！
池の間際の
　　　　　水　車,
橋や瀧落つ
　　　　　岩角や,
父の庵近き
　　　　　乳産場,
井戸に下りし
　　　　　釣瓶さへ,
古き柏に
　　　　　金輪せし
苔のむしける　かの釣瓶,
井戸に下りし　釣瓶かな

毎號懸賞募集項目

毎號精讀を要す

選評大家（文學士鹽井日本女子大學教授、巖谷小波君、佐々木信綱君／文學士尾上女子高等師範校教授、廣津柳浪君、山中古洞君）

○論　　文　　○抒情文　　○叙事文（各半紙廿四字詰三十行以內）

○消息文（半紙廿四字詰二十行以內）　　○はがき文（端書かな付廿四字四行）

○短編小說（半紙總かな付廿四字六十行內）　　○新躰詩（半紙一枚十句以內）

○短　歌（半紙二ッ切一枚一首）　　○圖　畫（一寸の二寸判風俗景色）

○新藝俳句（はがき判紙一枚一句）

▲各欄とも一人佳作一章宛投稿の事　但着色無用可成鷹皮紙を用ゆ

▲此外家庭教育に關する事項並に讀者の通信等何ても寄稿あれ

○論文○抒情文○叙事文○消息文○小說○圖畫、當選者へは左記の相當價格品選定の上贈與すべし

▲天賞　金壹圓五拾錢　▲地賞　金壹圓　▲人賞　金五拾錢

▲特別賞▼（正金を呈す）　一等金三圓、二等金貳圓、三等金壹圓五拾錢

○新體詩○はがき文○短歌○俳句、當選者へ贈與品左の如し

▲天賞本誌三ケ月分　▲地賞同二ケ月分　▲人賞同一ケ月分

▲特別賞▼（正金を呈す）　一等金壹圓、二等金七拾錢、三等金五拾錢

賞品規定

毎回の本誌により當選者は贈品に差支へざる樣前以て住所氏名を通知あれ○賞品は發表二ケ月の後に故障なき者へ美麗なる名譽褒狀を添へ贈呈すべし

（投稿〆切＝毎月十五日）

▲嚴守すべき投稿規定必一讀を要す

○投書は各欄とも決して政治的時事論に涉るべからず、○用紙は規定の紙に限る○投書は一行廿四字詰に認むべし、但し句點も一字に數ふべし○投書には題の下には必らず本誌に倣ひ住所姓名を明記し、書體は楷書にて假名は平假名を用ひ明瞭なるを要す○各種の投書は必ず別-認むべし○封筒には『女子文壇原稿』の文字を記すべし○投書の中には他の用事の文句を記すべからず○投書には各自句點を施すべし、圈點は一切施すを禁ず○投書は他人の作物を剽竊するを禁ず之を犯したる當選文は無効たるべし○投書は一切返附せず○此規定に背く原稿は一切沒收す○投書は不足、未納税は一切受取らざるべし○投書丈け取纏郵送するときは開封にして差出せば卅匁迄二錢にて事足れり

（最寄書店になくば直接發兌元へ注文を乞ふ）

定價

女子文壇（毎號水彩畫彩色畫寫眞口繪數葉挿入）毎月一日發行

一册（大判百二十頁）前金拾錢	定價郵税共一册金拾壹錢	外國行
六册（半ケ年分）前金五拾七錢	定價郵税共六册金六拾三錢	郵税共
十二册（一ケ年分）前金壹圓八錢	定價郵税共十二册金壹圓廿錢	拾四錢

注文心得

○本誌は前金の外送本不致候○代金過不足のなき樣注意被下度候○領收書は一切差出さず候○御注文毎に何號より何册及御住所氏名等は詳細に御認め可被下候○郵券代用は必ず定價の壹割增に願上候○御問合は返信料付に願上候▲御申越の號數賣切の時は近刊の分を以て送本可仕候

廣告

六號ヨリ改正

種別	普通	特別（表紙四面口繪對面）
一頁（二十四字六十四行）	金拾五圓	金貳拾圓
半頁（二十四字三十二行）	金八圓	御斷（半頁以下中上候）
一行（五號字二十四字）	金參拾錢	○

〆切發行前十五日

▲廣告大取次

京橋區南佐柄木町二番地　日本廣告株式會社
神田區千代田町二番地　博報堂
京橋區八官町十八番地　廣告堂
神田區花房町九番地　富士原秀穗

明治三十八年八月廿九日印刷
明治三十八年九月一日發行

定價金拾錢

不許轉載

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

發兌元　女子文壇社
東京京橋區大鋸町十一番地
電話＝本局六〇七番

特約發賣元
東京市神田區表神保町三番地　東京堂書店
東京市京橋區尾張町二丁目廿　東海堂
東京市京橋區鍋屋町十三番地　北隆館合資會社
東京市神田區裏神保町一番地　上田屋書店
東京市京橋區鍋屋町九番地　良明堂

明治三十八年九月一日發行（毎月一回一日）

女子文壇

第壹巻 第九號

明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可



最廉無比

定價金拾錢

郵税壹錢